

ただ、光莉さんと結婚
したい

とりがら016

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、俺の性癖は甲斐甲斐しくお世話をしてくれるお姉さんに完膚なきまでに破壊
され、その結果。

俺は、この人と結婚するしかないと心に誓つた。

※前作の続きです。多分読まなくとも大丈夫です。

<https://syosetu.org/novel/249158/>

目 次

第 1 話	そして勘違いは始まつた	1	第 8 話	そして対策は固まつた	—	70
第 2 話	勘違いかもしけない気持ち	11	第 9 話	そして勘違いは応援になつた	79	
第 3 話	そして勘違いは増えた	—	第 10 話	そしてGWがはじまつた	90	
第 4 話	そしてお嬢様が現れた	—	第 11 話	そして争いが始まつた	100	
第 5 話	そして依頼が舞い込んだ	31	第 12 話	そして死人が出た	—	
第 6 話	そして勘違いは加速した	41	第 13 話	そしてゲームが始まつた	109	
第 7 話	そして新たな問題が舞い込んだ	62	第 14 話	そして解を導いた	—	118
51			第 15 話	そして裸で付き合つた	127	

第16話 そして傷を負つた | |

第17話 そして罪を償つた | |

第18話 そしてジャブを放つた

169

第19話 そして新たな弱点が見つかつ
た

179

159 147

第1話 そして勘違いは始まつた

春。

温かな風が緩やかに吹き、陽気な日常を桜色で彩る季節。全国の学生が新たな生活を始めるこの日、みんなは何を思うだろうか。

新たな生活に浮足立たせ、始まる学生生活に夢馳せる者。引っ越し思案で、友だちができるか不安になる者。人それぞれ様々な思いがあり、様々な願いがある。

学生たちが様々な思い、願いを抱える中。高校生活が始まり二週間目を迎えた俺、水室夕弥は、こんな思いを抱えて校舎へ足を踏み入れた。

俺はただ、光莉さんと結婚したい。

これは、俺が小さい頃から性癖を破壊しにきたお姉さんと結婚するために奮闘する物語である！

俺の好きな人の話をしよう。

俺の好きな人の名前は朝日光莉。あさひひかり 年齢を感じさせない若さを誇り、更にお胸が大き

く、小柄でパワフルで面白くて優しくて、めちゃくちや可愛いお姉さん。ただし、年齢は俺の両親と同じとする。

両親と同じ高校に通つており、それからずつと交流があつた光莉さんは、両親が結婚し俺が生まれたとなるとそれはもう俺を可愛がつた。うつかり幼気な俺の性癖を完全に破壊するほどに。これは責任をとつてもらうしかないとずつとアプローチをしているのだが、「年齢が」「その、ほら、私おばさんだし……」とわけのわからぬことばかり。

「というわけで、どうすれば光莉さんが俺を男として意識してくれるか考えてくれ」

「難しいと思うけどなあ。光莉さん、自分に自信があるようでないし」

「おい、俺の前で光莉さんのことわかつたような口きいてんじやねえぞ。死にてえのか？」

「それが人に相談乗つてもらつてる人の態度……？」

放課後。帰路につきながら相談を持ち掛けた相手は、織部里沙おりべりさ。父親の妹、その子どもであり、つまり従妹。手入れの行き届いている明るい茶髪を腰まで伸ばし、クール美人な顔立ち化と思いきや、目はくりくりと可愛らしい。何度「お前の従妹紹介してくれ！」って頼まれたことか。それを父さんにチクつたら翌日からそいつの姿見かけなくなつたけど。

「昔は俺のこと好きって言つてくれたんだけどなあ。あの頃顔全体で感じてた温もりが懐かしいぜ」

「うわ、性欲丸出しじゃん。光莉さんそれを怖がつてるんじやないの？　あまりにも夕弥が性欲強すぎて、受け止めきれる気がしないから」

「は？　ドエロいなそれ。非常に興奮してきたわ」

「思つても言うなよ。私身内だけど一応女の子だよ？」

「言いにくいけど、お前に女を感じたことは人生で一度たりともない」

「言いにくい割にははつきりしそぎじやない？」

青筋を立てた里沙に頬をつねられる。思い出すなあ。小学生の頃里沙と一緒にいると「うわ、夫婦だ夫婦！」ってからかわれたから、「は？」　婚姻届けも出してねえしまだ社会にも出てねえのに夫婦とか頭ワリイのか？　ちゃんと勉強しろよお前。頭ワリイゴミを育てるために学校はあるんじやねえんだぞ」と反論したらなぜか里沙に怒られたことを。

ちなみに父さんは「間違いなく俺の息子だな」つて満足気だった。その瞬間「あ、俺は致命的に間違えたことを言つたんだな」と自覚できた。父さんは教師をやつてるのが信じられないくらい頭がおかしくて人でなしだから、反面教師にできて非常に助かつている。

「ほんとーに女を感じたことないの?」

「何? お前従兄に何期待してんの? むしろキモいだろ。従兄に女として見られるの?」

「確かに夕弥はキモいけど、なんかムカつく」

「俺を無条件でキモくしてんじやねえよ。ぶつ飛ばすぞ」

俺は『従妹を女として見るのが』キモいって言つたんだぞ? なんで『氷室夕弥はキモい』に変換されんだよ。え、普段から俺のことキモいって思つてるつてこと? いつも光莉さんに対しての想いを叫んだり相談したり歌つたりしてるだけなのに、俺のどこがキモいんだ。意味わからんねえなこいつ。

「じゃあれやつてみる? 『こいつ、こんな体だつたつけ……』ってやつ」

「エロ漫画かよ。それに俺は光莉さんのドエロダイナマイトボインに夢中だからお前如きの体なんて興味ねえよ」

「巨乳に対する呼称があまりにも昭和過ぎない? っていうか私も普通にある方だし! ほら」

言いながら、道の真ん中で胸を持ち上げる里沙。しかし従妹にそれをやられたところで何の感情も浮かばない。せいぜい『こいつ、こんな体だつたつけ……』って思う程度だ。あれ? 里沙の思惑成功してねえか?

「あ、今いやらしい目で見た」

「おいおい、バカ言うなよ。生まれた時から一緒の従妹だぞ？ 今更いやらしい目で見るなんてあり得ねえだろ。つていうか何が目的なの？ 僕にいやらしい目で見られて何の得があんだよ」

「……ほんとーにわかんない？」

え、て呆ける俺を見る里沙の目には悲しそうな色があった。何かを諦めているような、それでも繋りたい何かを見ているかのようだ。

「ね、いとこ同士でも結婚つてできるんだよ。知つてた？」

「……」

あまりの衝撃に固まる俺を見て、里沙は可愛らしく「ふふ」と笑う。顔を真っ赤にしてそのまま俺に背を向けて、逃げるよう走り去つていった。

……え？ うそ、ほんとに？ いや、そんなはずない。事実確認だ。このまま連絡を取り合わず明日を迎えたらい変に意識しちやつて俺が恥ずかしくなる。

スマホを取り出し、『おい、今の冗談だよな』と里沙に送ると、『そだよー』と返つてきた。

「そだよーじゃねえよ。

「男の純情を弄びやがつて……許さねえ……！」

この瞬間、復讐のために里沙に将来性も何もないんじゃないバカ野郎を紹介しよう
と心に誓い、それを察した両親に説教された。イカれてんのかこいつら。

「あはは、ごめんつて。ほら、あんなにはつきり女を感じたことないつて言われたからム
カツいちゃつたつていうか」

「一瞬でも真剣に考えた俺に申し訳ねえと思わねえのか？」

「あれ、真剣に考えたんだー???

私のこと? ありがとねー??」

「抱きしめてキスするぞ」

「本当にごめんなさい」

翌日。いつものように家の前で合流し、登校しながら昨日のことについて文句をぶつ
ける。にやにやしながら煽つてくる里沙が本当にうざいから言いたくないことまで
言つちまつたし。俺の『抱きしめてキス』は光莉さんのものなのに……。

「なんかキモい」

「感覺で罵倒するのやめてくれる?」

今自分が立場弱いって自覚あんのか? それとも何があつても薫姉さん以外自
分の味方してくれるからって調子乗つてんのか? だとしたら許せねえ。里沙も父さ

んも母さんも。なんで父さんと母さんまで里沙の味方すんだよ。なんだよ「いつだつて喧嘩が起きた時点で男の方が悪いって決まつてんだよ」つて。なんだよ「薰ちゃんの子どもだから悪いことするわけない」つて。俺がグレしてねえの奇跡だろ。

「はあ、うちの両親子育てランキングがあつたら最下位だろうなあ。光莉さんがお母さんだつたら毎日ばぶばぶちゅつちゅつてできたのに」

「確かに最下位だね」

今その要素はなかつたのに俺をみながら里沙が同意する。なんでだ？　ただ俺は光莉さんへの想いを口にしただけだつていうのに……。

そうしていつも通りの会話をしながら足を進めると、学校に近づくにつれてうちの生徒がちらほら増えてくる。それもいつも通りだけど、何か今日はちょっと違う気がした。なんとなく視線を感じるような、そう、『夫婦』だつてからかわれた時と同じような視線を感じる。気分がよくないのは、女の子から感じる視線は好奇というか、どちらかというといい感情っぽいからいいんだけど、男から向けられているのはいやらしい感情。それが里沙に向けられている。

「後ろ隠れてる。じやないとお前にいやらしい目を向けたやつらが根こそぎ里沙過激派に始末される」

「あ、私の心配じやないんだ……」

でもありがと、としょらしく言つて俺の背中に里沙が隠れると、周りの女の子が小さく黄色い悲鳴を上げる。ほんとになんだ？ 何が起きてんだ？ もしかしてため込んでただけで、『あいつらってやっぱり夫婦に見えるよね』っていう世論が今日になつて爆発したのか？

「おい」

その答えを教えてくれたのは、いつの間にか俺たちの近くまでやつてきていた担任の先生……つまり、父さんだつた。『公平さを保てなくなるから』という理由で自身の子が通う学校に親は勤務しないというのが普通だが、うちの高校に問題児が多くて離れられなくなっている問題教師。

その問題教師は、懐かしむような、しかしあきれた様子で俺たちにスマホの画面を見せてきた。

そこに映しだされていたのは俺たちが通う光生高校のホームページ。といつても光生高校に通う生徒、教師、その家族だけが見れるものであり、その特性もあつてか『光生高校ニュース』なんていう身内ネタに振り切つたページもある。

そのトップページにあつたのが、『織部里沙、道の真ん中で愛を伝える!!』という見出しどともに、夕日に照らされた俺たちが向かい合つている写真。記事の内容にはしつかり「ね、いとこ同士でも結婚つてできるんだよ。知つてた？」という里沙のセリフが載

せられていた。

「ちつ、違うんですよじさん！　こ、これはその、ただ夕弥に女の子として見てほしかつたっていうか」

「おい待て里沙!! ややこしいこと言つてんじゃねえよ!! 違うんだ父さん、ただ俺は里沙に性的な魅力を感じちまつただけなんだ!!」

「あれ？ なんで俺朝つぱらから息子と姪のラブラブを証明されてんの？」

間違えた!! クソ、なんで俺は『気が動転したらポンコツになる』ところが似ちまつたんだ!! そりやそうか、だつて両親ともにそうだし。遺伝率100%じゃん。なんだこのクソ遺伝子。そのせいで俺の学園生活が終わろうとしてんだけど???? 「そんなセリフを吐くやつがよくややこしいこと言うななんて言えたね!!!」

「うるせえ!! 元はと言えば里沙が『私、ちゃんと女の子として育つてるんだよ……？』って上目遣いで見ながら俺の制服をちょこんつてつまんできたのがワリイんだろうが!!」

「自分に責任がないことにしたいからつて話作るな!! 夕弥に対してそんなことするわけないでしょ!!」

「俺も昨日までそう思つてたわ!! みなさん聞いてください!! 俺可愛い妹だと思つてたこいつに昨日誘惑されました!! 俺は被害者です!!」

「あー!! そんなこと言うんだ!! 昨日私のこといやらしい目で見てたくせに!!」
マズい、止まらない!! ここまでヒートアップしたら止め時がわからない!! どうし
よう、周りに人が集まつてきてるし、あのニュースを否定しようにも否定しきれないと
ここまで来てる。

ただ、俺は知ってる。普段クズでどうしようもない父さんでも、こういう時には頼り
になるつてことを。

「いやあ、確実に俺の息子だな」

頼りにしていた父さんは懐かしむように頷いているだけだった。ほんとダメだなこ
いつ。

これは、最悪な高校生活をスタートさせた俺が、従妹ではなく大好きなお姉さんと結
婚するために奮闘する物語である。

第2話 勘違いかもしれない気持ち

学校の前で大騒ぎした俺たちは、朝っぱらから生徒指導室にぶちこまれた。隣には里沙がいて、正面には父さんが座っている。父さんはスマホ……恐らく俺たちのニュースを見ながら、流石に結構な問題だからか頭を抱えていた。

「どうしよう……日葵ひまりが可愛すぎる……」

違った。母さんの写真見てただけだった。

「息子と姪がひでえ目に遭つてるつてのに何してんだクソ親父」

「別にそう問題でもないだろ。俺は学生の頃千里と付き合つてるつて新聞張り出されたし」

「お父さんとそんなことになつてたんですか……？」

千里、里沙のお父さん。今ではクールでカッコいい人だけど、学生の頃は女の子と間違われてもおかしくないほどのメスだつたらしい。それに父さんとは親友でそういう仲を疑われてもおかしくないほどだつたらしく、それなら付き合つてるつて言われても……おかしくないけど本人たちはたまつたもんじやないだろうな。

「でもさ、俺たちは異性だから妙にリアルだろ。いとこだから話題性も抜群だし……」

れが光莉さんの耳に入つたら最悪だな』

「見ろ。日葵も『え!? 一人ともそんなことになつてたの!?』つてびっくりしてる」

「光莉さんに伝わる助走かけてんじやねえよ!」

流石の母さんでも光莉さんには言わないだろうけど、あの人かなりのポンコツだからふとした拍子に言つちまう可能性もなくはない。母さんと光莉さんほぼ毎日会つてゐらししいし……。

「あ、今光莉と一緒にだつて」

「おいシャレになんねえつて!! 光莉さんには絶対言うなつて伝えてくれ!!」

「言つといたけど、多分死ぬほど動搖してゐるからバレると思うぞ」

「ふざけんなよクソ親父……!!」

どうすんだよ、これで光莉さんにバレてしかも『おめでとう』なんて言われたら!! 多分あの人違うんですつて言つても聞いてくんねえぞ。『やつぱり私みたいなおばさんじゃなくて、若い子がいいに決まつてるわよね』つてなるつて絶対! しかもいい人だから『いとこ同士なんて気にしちゃダメよ。ほんとに好きなら胸張つてなさい』つて応援してくれるつて!! マジでいい女だな、結婚しよう。

「……いや、待てよ? ここは先に手を打つて『俺と里沙がニュースになつちやつたんですよねー』って話題にすればいいんじやねえか?」

「ふふふ、実はもう送ってるんだよね、私」

「ずっとスマホ触ってるって思つたら、でかした里沙!! ちなみになんで俺から目を逸らしてるんだ?」

「いや、あの、えっと」

俺から目を逸らしながら、里沙がスマホの画面を見せてくる。なになに? 『夕弥と付き合うことになりました』『そう』だつて?

「何してくれてんの?」

「ち、違う! 『夕弥と付き合つてるって勘違いされてめちゃくちゃ困つてるんですけど、夕弥は相変わらず光莉さんが大好きだつて言つてるから安心していいですよ』つて送ろうとしたの!!」

「それがどうしてこんなことになつてんだよ!!」

「仕方ないでしょ? 焦つてたんだから!!」

「仕方ないで許せることと許せねえことがあるんだよ!!」

あまりの怒りに立ち上がつて里沙に詰め寄り、応戦する形で里沙も立ち上がり言葉をぶつけ合う。こいつもわざとやつたんじゃないだろうけど今回ばかりは許せねえ。なんだ? どう間違えたらフォローがご報告になるんだ? 気が動転してたらポンコツになる遺伝子こいつも受け継いでんのかよ。終わつてんなこの遺伝子。

しかしまずい。ついさつきまで考えていた最悪の事態がもう目の前まできてるどころか俺の思考が追い付かないレベルの速度で追い越していった。早急に対処しないと取り返しのつかないことになる。

「安心しろ、夕弥」

「父さん？」

そこで立ち上がったのが、父さんだつた。得意気な表情で俺を見る父さんにムカつきながらも、やつぱり頼りになるんじやないかと期待してしまう。

そこで俺はそういえばと思い出した。『付き合うことになりました』への返答が『そ^う』つていう淡泊なものだつたことを。もしかしたら、父さんが先手を打つていて冗談だつてわかつていたから淡泊な返事だつたんじやないか？

「日葵によると『私みたいなおばさんじやなくて、若い子がいいに決まってるわよね』つてため息吐いてるらしい」

「何が安心しろだよカス。殺してやろうか？」

「むしろここまで手遅れなら落ち着いて考えられるだろ。ポジティブにいけポジティブに」

「信じられねえくらいネガティブな状況なんだけど??」

「いつそ付き合つたことにして、別れたつてことにしてみる？」

「んなことしたら里沙がいとこと付き合つて別れたやつってなつちまうだろ？ そりやダメだろ」

「……そう」

俺がやらなきやいけないのは、光莉さんの誤解を解くこと。学校内で勘違いされるのは別にいい。言いたいやつには言わせとけばいいし、どうせ時間が経てば俺たちが付き合つてないっていうのはわかることだ。

でも、光莉さんに関しては時間が解決するなんて悠長なことは言つてられない。『俺が光莉さん以外を選んだこと』に納得させちゃダメなんだ。俺は光莉さんしか見えてないつてことを信じさせなきやいけない。

「押し倒すしかないな」

「流石俺の息子。当然の帰結だな」

「今私がしつかりしなきやいけないってことがわかつた。落ち着いて二人とも」

俺と父さんが完璧な解を出したつていうのに、里沙が待つたをかけてくる。一度俺を地獄に落としたこいつに対する信用なんて皆無に等しいが、一応聞いてやることにした俺は落ち着いて席についた。

「まず、私と付き合つてるつて勘違いしたまま光莉さんを襲つたら、光莉さんはめちゃくちや怒ると思う」

「光莉さんに俺の童貞を捧げられないからってことだよな？ 大丈夫、そこは先にちゃんと説明する」

「待て、女の子はちゃんと体を綺麗にしてからじゃないと恥ずかしいもんだ。いきなり襲われるのは嫌だからってことだよな？」

「まつたく違う。『里沙と付き合ってるのに私に手を出すってどういうつもり？』ってなるってことね。理解できる？ バカども」

俺と父さんが言つたことも間違つてはいないが、里沙の言うことも一理ある。確かに里沙と付き合つてゐるって勘違いしたままだと『不誠実だ』って怒られるのも無理はない。つてなると結局光莉さんの誤解を解かないと云つてことになる。

じやあどうやつて？ 光莉さんは結構柔軟だし誤解だつて言つたらわかつてくれそうだけど、伝え方を間違えればどんどん沼にはまつていく。だから一手目は絶対に間違えちゃいけない。

「どうやつて誤解を解くか……」

「正面から伝えるのは？」

「バカかお前は。もし正面から伝えて信じてもらつたとして、『やっぱり私のことが好きなのね、嬉しい』って言われたら発情する自信しかない。お前は光莉さんの前に獸を放つ気か？」

「なんで夕弥みたいなのにバカつて言われなきやいけないの？」

「待て里沙。今回ばかりは夕弥が正しい」

「おじさんはそろそろ自分がほぼすべてにおいて正しくなってことを自覚してください」

なぜかはわからないが、父さんが里沙からとんでもない罵倒を受けた。おかしい、父さんは俺の背中を押してくれる立派な父親なのに。里沙が父さんを否定する理由はなんだ？

……もしかして。

「おい里沙、勘違いなら勘違いって言つてくれ。もしかして本当に俺のことが好きなのか？」

「勘違い」

勘違いだつたみたいだ。よかつた。

勘違いついでに、里沙の案である『正面から伝える』について考えてみる。よく考えれば、すぐに否定しなければ『私のこと本気じゃなかつたのね』って思われるだろう。それなら正面から伝えるっていうのは悪くないかもしない。今の時代、SNSを通して告白することも珍しくなくなっている。だからこそ、正面から伝えるっていうのは本気度が伝わりやすい。

「父さん。俺、行つてくるよ」

「学費もつたいないから行くな」
覺悟を決めた息子を冷たい理由で叩き伏せるゴミが俺の父親です。助けてください。

氷室夕弥、つていう男の子がいる。

昔好きだつた人と、今でも大好きな親友の子どもで、信じられないくらい可愛くて小さい頃からいっぱい遊んだ記憶がある。それこそ、小さい頃から『光莉さんすき!』つて言つてもらえるくらいには。

その『好き』に熱を帯び始めたのはいつ頃からだつただろうか。

最初は違和感を覚えつつも、懷いてくれてるとかそういう意味での『好き』だと思つてた。でも、どうやら異性に向ける『好き』らしいつて気づいたのは、夕弥が中学生になつた頃。真正面から「本気で女性として見てます」つて言われた時だつた。

そんな夕弥が、里沙とねえ。

いや、100%勘違いでしょ。

あの二人の息子なら、好きつていう言葉に偽りはない。だから、私に対する好きつていう気持ちは本気で、自惚れじやないつていう確信もある。もちろん里沙は可愛いしい

い子だけど、だからって夕弥が私を放置して付き合うなんてありえない。

……なんて言うのはめちゃくちや恥ずかしいし自信過剰だし死にたくなるから、日葵から『夕弥と里沙が付き合つてる』つて言われた時は話に乗つたけど。

「それは勘違いって話なのよね？」

「はい……お騒がせしてすみません」

里沙に呼び出され、適当なカフェに入つて向かい合う。話題はもちろんあの勘違いの話で、私がすんなり受け入れると里沙は目を丸くしてからしつかり頭を下げた。「にしても、ほんとに親子なのね。昔まつたく同じことあつたし」

「こんな形で遺伝を感じたくなかったです」

ぷく、と小さく頬を膨らませる里沙。ほんとに顔がいいわねこの子。顔がいい両親の子どもだからそりや顔がいいに決まつてること、同性で年齢差がある私でもドキッとするくらいには整つた顔をしている。こんな子とずっと一緒にいるのに私しか見えてない夕弥はかなりおかしい。従妹だからっていうだけで無視できるような女の子じやないでしょ。

「でもなんで里沙が？　夕弥なら自分で伝えにきそうなものだけど」

「えっと、それは、ですね。少し相談というか、なんというか……」

もじもじし始めた里沙に首を傾げる。こんな時に夕弥を抑えて、私のところにきて相

談?

里沙はしばらくもじもじした後、アイスコーヒーで喉を潤させた里沙は意を決したよううに私と目を合わせ、形のいい唇をゆっくりと震わせた。

「……わ、私、夕弥が好き、かも、しれなくて」

「……そう」

申し訳なさそうに言う里沙への返事は、思ったより優しい声が出た。安心、があつたのかもしない。やつと夕弥が私以外の女の子を意識するかもしないって。つていうか申し訳なさそうなのはなんで? もしかして私も夕弥のことが好きだと思つてる? いやいや、流石に、ねえ? もし本当に私が夕弥のこと好きだつたら、年齢差とか関係なく無遠慮にぶんどうつてくからそれはない。

じやあなんでと考へて、もしかしてと思つたことを言葉にした。

「あんた、夕弥に申し訳ないって思つてる?」

「……」

小さく頷く里沙に、思わずそつと頭を撫でた。

里沙は、私へ夕弥への好意を伝えることによつて、夕弥からのアプローチを断る理由を増やしてしまつて思つて、夕弥に申し訳ないって感じてる。なーにめちゃくちやいい子じやないこの子。もしかして私が産んだ? こんなにいい子で可愛い子なら私の

娘に決まつてゐるわね。

「別に気にしなくていいわよ。どつちにしろあの子の好意に応える気はない……つて里沙の前で言うことじやないわね」

「い、いえいえ！　いいんです。まだ本当に好きかわからないし、むしろ勘違ひだつて思いたいです」

「先に言つておくけど、いとこだからとか考えなくていいわよ。好きになつちやつたんなら仕方ないし、好きつてそういうものだし」

「……それなら、年の差とか考えなくてもいいと思うんですけど」

「いい度胸だな、テメエ」

思わずブチギレると、里沙は額をテーブルにこすりつけて「申し訳ございませんでした」と全力で謝罪した。もう、冗談なのに。

「で？　相談つていうからにはその先があるんでしょ？」

「……はい。その」

ちよつと、付き合つてゐるつていうのを本当にしたいなつて思つてまして。続けられたその言葉に、「それもう好きつてことでしょ」と返すと、顔を真つ赤にして黙つてしまつた。

とりあえずこの子を私の娘にしようと思う。

第3話 そして勘違いは増えた

「作戦、やり遂げました」

「マジでやつたのかよ……」

俺と里沙がただならぬ関係（勘違い）だということが学校中に知られた翌日。中庭で弁当を食べながら昨日の結果報告を聞いていた。

作戦とは、『里沙が俺のことが好きだと光莉さんに言つて、なんとかもやもやさせよう大作戦』のことであり、発案者は里沙。俺のことを好きだなんて嘘でも言いたくないだろうに提案してくれたのは、俺をからかおうと言つただけのセリフが原因でとんでもない事態になつてしまつた負い目があるからだろう。別にもう気にしてねえのに。

「光莉さんを騙すのは気が引けるけどなあ」

「嘘じやないって言つたら？」

「昨日千里さんから『うちの娘が返つてきた途端ゲボ吐いたんだけど、心当たりある？』って聞かれたぞ。死ぬほど嫌だつたんじやねえか」「ごめん。あまりも気持ちが悪くて」

「謝る相手に気持ち悪いとか言うな」

まあそれに関しては思うところは何もない。俺だつて里沙のことが好きだなんて言おうものなら、言葉よりも先に鳥肌が立つて耐えられなくなつて色々あつて内閣總理大臣になる。だから職に困つた時は誰かに里沙のことが好きだつて言うつもりでいる。俺のこの人生設計で唯一不安なのは、父さんにこのことを話した時「完璧だな」って言われたことくらいだろうか。

「ところで平氣？ 昨日からずつと追われてるけど

「命を狙われて平氣なやつつている？」

そして不安といえば、今の俺の状況も不安である。

里沙は正直言つてかなり可愛い。スタイルもいいし頭もいいし、運動もできるし人当たりもいいから男女問わず大人気だ。そして特に男からの人気がすごい。里沙のことが好きなやつなんて珍しくないし、気が付けばアプローチされていたなんてことはざらにある。

そんな里沙が、俺と付き合つてるつていう噂が広まつた。もちろん俺は命を狙われることになつた。

「金属バットで思いきりぶん殴られそうになつたし」

「最初は避けたけど、流石に避けきれなくて死んだんだよね」

「何勝手に殺してんの？ 幻と喋つてるつもりだつたのかお前」

「まあね」

「まあねじやねえんだよ」

得意気に答える里沙がムカついて弁当から卵焼きを奪つて食つてやると、怒った様子もなく「おいしい？」と聞いてやがつたので「おいちい！」と可愛らしく答える。

距離を空けられた。なんでだろう。ただ光莉さんに甘える予行演習のつもりで言つただけなのに。卵焼きを咀嚼しながら首を傾げ、味付け的にこれを作つたのは里沙だと勝手に予想しながら飲み込んだ。ごちそうさま。

「お粗末様。ね、ゴールデンウイークどうする？」

「光莉さんとハネムーン」

「そんな戯言より、お父さんが旅行に行きたいって言つてたんだけど」

「俺の純愛に対し戯言つて言つたことはこの際許してやるよ。もちろん光莉さんも一緒だよな？」

頷く里沙を見て、即座に光莉さんへ連絡する。電話は迷惑だろうから『ゴールデンウイークの新婚旅行どこに行きたいですか？』と送つておいた。邪魔なのが何人かついてくるけど、どうせ光莉さんしか目に映らないし誰がいても一緒だろ。

うちの家族は結構付き合いが多い。っていうのも、父さんの妹が二人いてそのどちらも結婚していることもあるし、高校時代父さんと仲が良かつた人たちも全員結婚して

る、もしくは子どもがいるからっていうのもある。ちなみに光莉さんは将来的に俺と結婚する。

「まあ旅行になるかどうかはこれから予定立てて決めると思うけど、どつちにしろ空けておいてね」

「……今気づいたんだけどさ。光莉さんって今里沙が俺のこと好きって思ってるんだろ？」

「……うん」

「じゃあさ。光莉さんの前なら、里沙は俺のこと好きアピールしないといけないんじやね？」

里沙がピタリと固まつて、手から箸が落ちる。持ち前の反射神経で地面に落ちる前にキヤツチし、「しつかりしろ。このままだと箸べろべろ舐めちゃうぞ?」と言つてみても固まつたまま。これはめちゃくちゃショック受けてるな。自分で蒔いた種なのに。

いや、よく考えたらそうだよな。俺も仲が進展しそうだから里沙の作戦を受け入れたけど、そういうことになるよな。しかも元々光莉さんをもやもやさせることが目的だし、むしろそうすることが正しいまである。

もつとも、俺と里沙の心が保てるかどうかは別の話だ。

「え、待つて。それって他のみんなにもそういう姿を晒すつてことだよね」

「そうなるな」

「それって夕弥が光莉さんと話してたら、積極的に妨害しにいかないと不自然つてことだよね」

「まあ、俺のことが好きつてことになつてるならそういうことになる」

「早まつたことした。私自殺する」

「なお早まろうとしてんじやねえか。落ち着け」

俺から自分の箸を取り返し、喉元に突き立てようとした里沙の腕を掴んで阻止する。そりやめちゃくちや嫌だろうけど、ここで里沙の命が尽きたら自動的に俺の命も尽きることになる。父さんなら『目の前で女の子を死なせただと？ 死ね』くらいは普通で言つてくる。俺も流石に命は惜しい。

つか、マジで軽率すぎたな。俺たちの身内つて基本的にノリがいい人しかいないし、里沙が俺のこと好きなフリをしたら積極的に盛り上げてくる未来が見える。マジで集まつたら学生に戻るんだよなあの人たち。

「どうしよう……何人かは倫理観死ぬほど壊れてるから、一緒の部屋で寝させられることもありえそう……」

「そうなつたら子どもできないと不自然だよな……」

「夕弥にとつての自然が不自然なんだけど、自覚ある？」

どうやら俺にとつての自然は不自然らしい。また俺は賢くなってしまった。

しかしこれは早急に対応策を考えないといけない。まず全員に『光莉さんに里沙が俺のこと好きだつて嘘をついている』つていう状況を伝える……ダメだ。そんなことをしたらリアルさがなくなるし、光莉さんにバレてしまう可能性がある。

それなら、バレても問題なく演技ができそうな人にだけ伝えておいて、俺たちの心労を軽くするのが一番か?

「よし、春斗に相談しに行くか」

「呼んだ?」

「きやつ!!」

後ろから突然かけられた声に悲鳴があがる。俺の。

振り返つてみると、髪を綺麗な金に染めた高身長のイケメンがイケメンなスマイルでイケメンに手を振つていた。

岸春斗。きしはると。父さんたちの高校の同級生であり、うちの高校教師でもある岸春乃さんの義理の息子。うちの高校身内多すぎて身動きとり辛いんだけど、こういう相談事したいときにはクソおもろいことなつてるやん。どこまでいつたん? G?』

「Gが何を指すかは知らねえけど、なんともなつてねえよ」

「G行為」

「クソ下らねえ上にド下ネタかよ」

けらけら笑いながら俺の隣に座り、長い脚を組む春斗。こいつ所かまわざイケメンオーラ振りまくから一緒にいると気まずいんだよな。俺も負けず劣らずイケメンだけど、「性格がゴミ」ってわけのわからないこと言われてイケメンに見えないらしいし。

「あの、春斗。私たちそういうんじゃないから。ほんとに」

「聞いてた聞いてた。夕弥が追われとつてひとしきり笑つたから、事情聴いたろーつて思つて」

「小さい頃から知つてる大親友を危うく見殺しにするところだつたんだぞ？ 笑つてんじやねえよ」

「そん時はそん時やろ」

「人の命を簡単に割り切るのやめてくれない？」

うちの父さんの友だちにしては珍しく、春乃さんはかなりいい人だ。非の打ちどころがないと言つてもいい。なのに春斗は倫理観よりも面白いことを優先するクセがある。流石に絶対に倫理観を優先した方がいいときはそうするらしいが、俺はいまだにその場面に出会つたことがない。

「しつかし、無理ちやう？ あれやろ、光莉さんの前やつたら夕弥が女の子と話したりし

てると里沙は嫉妬せなあかんやろ?」

「うつ、ゲエエエエ……」

「想像しただけで吐きそうは聞いたことあるけど、想像しただけで吐くなよ」

咄嗟に春斗がビニール袋を取り出して受け止めたから大惨事にはならなかつたけど、見る。俺たちの様子を見ていた何人かの男が喜んでんじやねえか。とんでもねえ変態しかいねえなうちの高校は。ぜひ退学したい。

「できるだけサポートはするけど、笑つてもうたらごめんな」

「おい、里沙は確かに面白いけど、俺に笑いどころなんてないだろ」

「もう笑えるやん。おもろ」

「あの、私が面白いっていうの否定してくれる?」

「想像しただけで吐くやつがおもろないわけないやろ」

二人そろつて春斗に言い負かされた俺たちは、「こいつわかつてねえな」と肩を竦めることで自分の優位性を保つことにした。いつだって最強なのは人の話を聞かずに何を言われようともダメージを受けないやつだつて決まつてている。それはつまりバカなんじやないかつて声も聞こえてくるが、俺は賢いからそんなことはありえない。里沙はバカ。

「ほんじや光莉さんにバレへんよういちやつくフリするとして、一人に別の話あんねん」

「私に告白するなら時期考えて」

「冗談は夕弥の性格だけにしといてくれ」

「なんで俺を攻撃した？」

「おもうそな部活見つけたんやけど、一緒に見に行かへん？」

俺と里沙は顔を見合わせ、そういうえば部活とかあつたなと思い出す。部活に入れば光莉さんと話すことも増えるし、行つてみてもいいかもしれない。

ただ、俺はこのとき春斗が『おもうそ』と言つたことをもつと警戒するべきだつた。名前のない部室に入った瞬間現れた、『お嬢様に憧れるもお嬢様適正がなさすぎでぐしゃぐしゃになつてゐる滑稽な生き物』を見た瞬間、俺はそう思つた。

第4話 そしてお嬢様が現れた

「ようこそいらっしゃいまし！『麒麟寺朱音をお嬢様に育て上げる部』への入部希望ということでおろしくて！！」

表札の掲げられていない部室のドアを春斗に言われるまま開けると、テーブルの上に仁王立ちしながら意味のわからないことを金髪碧眼の女の子が叫び始めたのでとりあえず閉めて春斗を見た。

爆笑している。

「なんだあの珍妙な生き物」

「ダハハ！！ な？ おもうそうやろ？」

「なんか私たちとてつもなく変な部活の入部希望者だと思われてるけど」

「あ、まだ部やないで。申請通るわけないやろし」

じやあまだ部活でもなんでもないのに一人で部室を占領して、意味の分からぬ部を名乗つてることか。イカれてんなあの人。

里沙と目を合わせ額き合い、部室に背を向ける。ああいうのと関わるとろくなことがない。ただでさえ俺たちは今全校中の注目の的なのに、あんなのと一緒にいたら確実に

『麒麟寺朱音

きりんじ あかね

悪い噂が立つ。確かに光莉さんと話す話題が増えるつて思つたけど、こういうんじやねえんだよな。

そんな俺たちに待つたをかけたのが春斗だつた。

「話だけ聞いたつてもえんちやう？ ここで帰つたらあの人悲しむんちやうかな。せつかく来てくれたのに一回見ただけで帰られるつてめつちやきついで」

「うつ、確かに……」

「驚くほど良心が傷つかない」

「里沙はええ子やなあ。おい、見習えよカス」

「そこまで言われるようなこと？」

言われっぱなしは趣味じやないから仕方なくもう一度入つてやることにして、またドアに手をかける。まるで初めて入るかのように「お邪魔します」と言つてからドアを開けると、そこにはテーブルの上に仁王立ちしている金髪碧眼の女の子がいた。

「よう、そいらつしやいまし！ 『麒麟寺朱音をお嬢様に育て上げる部』への入部希望と
いうことでよろしくて！？」

「あの子はNPCか何か？」

「あれがNPCやとしたら明らかに設計ミスやろ」

「どう見てもメインじやないとおかしいもんね」

人をゲームキャラ扱いするやつはドチクショウだから、里沙と春斗もドチクショウだつてことが今証明された。

どうもと頭を下げて、各々名前を告げて自己紹介すると、麒麟寺さんはテーブルから華麗に降りて無駄に豪華な椅子に座り、「お茶でも淹れてください?」と一言。「お茶の場所も教えられてねえのに淹れられるか!! ふざけんな!!」

「指示されたことに対して怒つてるんじゃないんだ……」

「はあ、使えませんわねこのゴミカス」

「おい、今このお嬢様初対面の相手にゴミカスって言つたか?」

かなり失礼なお嬢様にブチギレながら、いつの間にか春斗が淹れてくれた紅茶を飲んで椅子に座る。なんで春斗お茶の場所わかつてんだつていうのとそもそもなんでこの部屋にティーセットがあるんだつて言いたいことはいっぱいあるが、前者は春斗だからっていうことで納得し、後者はこの学校だからってことで納得した。

「で、なんで俺たちは麒麟寺さんをお嬢様に育てあげなきやなんねえんだ?・」

「あげなきやならない」むしろこのわたくしをお嬢様に育て上げられることを光栄に思うべきですわ!」

「それはほんまにそう」

「面白そだからつて適当に同意しないで。えっと、麒麟寺さん。そもそもなんでお嬢

様になりたいの？」

こんな失礼で意味のわからないやつにお嬢様になりたい理由聞くとかいいやつかよ。俺と同じでいい子に育つたんだな。俺たちをこんなところに連れてきた悪魔とは大違ひだぜ。

麒麟寺さんは里沙の質問に対し、春斗の淹れた紅茶を一口飲んで「うますぎでは？」とお嬢様らしからぬ言葉を漏らして慌てたように咳払いした。

「なぜか留年してしまいましたので、お嬢様になれば巻き返せると思つたからですわ！ 聞くところによるとお嬢様はお金持ちらしいですし！」

「あんたが留年したのは確実にアホだからだろ。つか先輩だつたんすね？」

「お嬢様がお金持ちなのは、いいところに生まれたからやで」

「あまり難しいことを言わないでくださいまし」

「どんどん留年した理由が露呈してる……」

そして致命的にお嬢様には向いていない。カツプもわしづかみにして飲んでるし。掌で上から覆うように掴むつて何？ なんかカツコいいんだけど。お嬢様よりお嬢を目指した方がいいんじやね？ あの、ヤのつく感じのやつ。

でも、なんか不思議だな。こんなにおかしい人がいるなら父さんが放つておくわけないと思うんだけどなあ。の人、なんかおかしい生徒担当みたいになつてるらしいし。

「ちなみに顧問の先生とか決まつてるん?」

「氷室先生が『人数集めたら承認する』とおっしゃつてくださいましたわ!」

担当してたわ。流石父さんだつた。

「でも確かに部活の承認得るのつて、5人は必要ですよね?」

ちび、と可愛らしく紅茶を飲んで言つた里沙に、麒麟寺さんが「あと一人、悩ましいですわね……」と顎に指を添える。いつの間にか俺たちが数に加えられてんだけど。なんで俺の貴重な青春を光莉さんじやなくてわけのわかんない部活に捧げなきやいけないの? 面白そうつて言つてたし春斗だけにしてくれよ。今も一緒になつて「あと一人だけやつたら心当たりあるで」つて言つてるし。

「同じクラスで、『お前らと一緒にいたら内申がマイナスに振り切れる』つて言うてあんまり学校で話してくれへんやけど。ちなみにこの二人の従兄弟」

「霞い? 確かにあいついいやつだから押せばいけど……じやねえよ俺入る気ねえから

らな」

井原霞。俺と里沙の従兄弟であり、うちの高校教師である井原蓮さんの息子。今思つ

たんだけど、この高校に身内が多いのは、この高校がおかしいやつらの集まりだからじやねえのかな。

とは言つてみたものの、霞はおかしいやつではない。うちの遺伝子では珍しい常識人

で、イケメンであり恥ずかしがり屋という可愛らしい一面もある。

「あら、夕弥はわたくしをお嬢様にしたくないと？」

「どう活動すれば麒麟寺さんをお嬢様にできるんです？」

「わたくしに勉強を教え、いい大学に入れるよう教育を施していただき、勝ち組の人生へのレールを敷いていただきますわ」

「活動内容が真面目だと断りにくくなるからやめてくれませんか」

「でもそれって部活動っていうよりただの勉強会じゃ……」

里沙の言葉に、麒麟寺さんがふつと笑う。まるでその言葉を待っていたとでも言いたげな笑みに、この数分間で既に麒麟寺さんに對して『アホ』の烙印を押している俺たちは、どうせくだらねえこと言うんだろうなど期待ゼロで待ち受けた。

「お嬢様とは位高きもの。つまりすべてを導く立場にあるべきですわ！」 ですので、皆様方の助けになるような活動をしたいの。いわゆるvolunteerというやつですわ！」

「なんでボランティアの言い方ネイティブなんだよ」

「それなら生徒会とかでいいんじゃないですか？ わざわざ部活じゃなくとも」「わたくしみたいなアホに生徒会は無理でしてよ」

「現実見えてへんようで見えてるみたいやな」

よかつた。「それいいですわね。でしたらわたくしたちで生徒会を乗つ取りましよう！」なんて言い出さなくて。俺絶対嫌だぞ生徒会。あんな時間削つて学校のために動くような意味の分からぬい団体。内申点とかプラスされそうではあるけど、もうその程度じゃ取返しのつかないくらい内申点マイナス振り切つてる自覚あるし。なにせ入学間もなくして命狙われてんだから。

……まあだからといって部活に入るわけじゃない。あくまで生徒会よりはマシだつてだけで、ボランティア活動してるのになぜか悪評が広まりそうな部活は願い下げだ。このまま部活に入つたら学校中に『アホお嬢様（偽）の取り巻きのアホ』だつて認識されてしまう。

「さて、お返事聞かせてください。もちろん入りますわよね！」

「俺はええよー」

「すみません、私は遠慮しておきます……」

「俺も……」

断ろうとしたところで、スマホから着信音。この音楽は……！　高鳴る鼓動を抑えつつ、スマホを取り出してみてみれば『マイスウイートラバー』と表示されていた。

「あら、お知り合いにゴムがいらして？」

「アホは黙つてろ。もしもし！」

『もしもし。元気そうね』

「光莉さん！ もしかして新婚旅行で行きたいところが決まつたんですか！」

『はいはい。それは将来のお嫁さんと考えてね』

「将来のお嫁さんは光莉さんですし、光莉さん『お嫁さん』って言うの少女みたいで可愛いですね」

光莉さんだ！

光莉さんから電話がかかつてくるなんてどうしたんだろう？ 十中

八九俺に愛を伝えたいがためにかけてきたに違いないが、光莉さんは恥ずかしがり屋なところがある。ここは光莉さんから愛を伝えてくれるのを待つて、それから俺からも愛を伝えよう。なんだろう、『待て』をされてるみたいで興奮してきたな。

『今どこにいるの？』

「学校ですよ。春斗のやつに部室棟の方連れてこられたて、今変な部活の勧誘受けてます」
『へえ。そこつて連絡通路渡つてすぐのところ？』

「？ そうですけど……」

『懐かしいわね。そこ、私が入つてた文芸部の部室だつたのよ』

俺は懐から入部届を取り出し、名前と血印を捺して麒麟寺さんに提出した。

「奇遇ですね。ちょうど俺もこの部活に入ろうとしてたんで、やっぱり運命かもしだせん」

『そ。で、里沙は一緒にいるの？』

「ああ、いますよ」

里沙に目配せする。光莉さんは今『里沙は俺のことが好き』だと思つてゐる。つまり

俺が部活に入るつてことは、里沙も入らなきや怪しまれるかもしない。

里沙もそれがわかっているのか、はちやめちやに嫌そうな顔をして俯いた。少しして顔を上げると、瞳を潤ませ、頬を紅潮させながら俺の制服の裾をちょこんとつまんだ。

「ゆ、夕弥が入るなら、私も……だめ？」

演技うまつ。相手が俺じやなかつたら恋に落ちるぞその仕草。ただなんでそんなことしたんだ？ 別に見えてねえからそこまでやらなくていいだろ。見ろ、春斗が面白くて爆笑してるじやねえか。

『相変わらず仲良さそうね』

『家族みたいなもんですから。それよりいつ俺に愛を伝えてくれるんですか？』
『そんな予定はないし、もう用はないわよ。それじや』

え？ と呆けた声を出す暇もないまま電話が切れる。用はないつて、俺の場所と里沙が一緒にいるかつて聞いただけじやね？ 何の用だつたんだ？

！ もしかして、俺の声を聞いたかつただけとか？ いやあーかわいい人だ！ きっと嫌なことがあって俺の声を聞きたくなつたに違ひない。は？ 光莉さんに嫌な思い

させたやつがこの世に存在してゐるのか？　ぶつ殺してやる。

「夕弥夕弥」

「ん？」

俺が光莉さんに仇なす一切を塵にしようと決意していると、春斗が俺を呼んでスマホを見せてきた。何々？

『夕弥と里沙を部活に入れたいから協力してください……』

「……春斗？」

「つてわけで麒麟寺さん！　あと一人！」

「では先ほどお話を上がりました霞さんを襲撃しにいきますわよ！」

麒麟寺さんと春斗が部室を飛び出し、霞を襲撃しに行く。

取り残された俺と里沙は目を合わせて、同時にため息を吐いた。

「あいつ、許せない……」

「ああ。勝手に光莉さんと連絡とりやがつて……!!」

「そつちじやない」

第5話 そして依頼が舞い込んだ

「『麒麟寺朱音をお嬢様に育て上げる部』……マジで5人集めてきたのか」

職員室。俺たちは部の承認を得るために顧問（予定）の父さんのところにやつてきていた。春斗の策略によつて入部届を出してしまつた俺と里沙は断ることもできたが、それだと光莉さんに嘘をつくことになつてしまつたため入部だけはしてやることにした。クソみみたいな部活だつたらやめりやいいしな。

「んー!! んー!!」

「ところで霞は拘束プレイの趣味でもあるのか？」

「いえ、霞さんは入部をお願いしたら抵抗されましたので、ふん縛つて連れてきましたわ！」

「あ、あの、流石にやめてあげない？ 嫌がつてるし……」

麒麟寺さん、俺、里沙さん、春斗。そして最後の一人は霞。襲撃すると案の定抵抗されたため、俺と春斗が取り押さえ、麒麟寺さんが「拘束はお嬢様の嗜みでしてよ！」と興奮しながら縛り上げた。里沙は最後まで止めようとしていたが、「早めに最後の一人を確保しておいた方が時間を使わなくて済むぞ」と言つてやると黙つて見届けた。

こういう時つて見てるだけで自分はいい人ですっていう顔してるやつが一番悪いって決まってるんだよな。お前のことだぞ、里沙。

「んーまあ喋れるようにはしたつてもええか」

「んっ、げほっ……おい、僕は入らねえからな！ 言つたろ、お前らと一緒にいたらくな目に遭わないから嫌だつて！」

「おい里沙、やれ」

猿轡を外した瞬間生意気なことを言い始めた霞に里沙を差し向ける。里沙は頷いて俺とハイタッチをかますと、霞の前にしゃがみこんだ。

「……私たちと一緒にいるのいや？」

「うつ、いや、その、一緒にいるが嫌なのは夕弥と春斗だけで」

「私たち家族なんだから、私はみんな一緒にいたいな」

悲しそうに目を伏せる里沙に、霞が言葉に詰まる。

対霞には里沙がよく効く。なぜなら霞が嫌っている、というより周りの目が気になるから一緒にいたくないのが俺と春斗だけであり、里沙はかなりの優等生で、しかも見た目がよくて女の子として完璧と言つてもいいやつだから、初心すぎる霞には里沙がよく効くというわけだ。血がつながっているとはいえ、いとこくらいになれば少し異性を意識しても無理はない。

「で、でも別にそんなみようちきりんな部活で一緒にいなくたつていいだろ？」

「うん」

「おい里沙、こつちこい」

あまりにも同意するしかなかつたからか頷きやがつた里沙の腕を引いて、肩を組み身を寄せる。「顔が近くてキモい」と失礼なことをぬかしやがつた里沙へ嫌がらせにウインクをかましてやつた。

「言つただろ？　ここであいつを引き込んでおかないと明日も明後日も麒麟寺さんに付き合わされることになるぞ」

「いや、あれは同意するしかくない？　私だつてそう思つてるし」

「俺もそう思つてるけど、頼む。あの初心なザコを納得させられるのはお前しかいないんだ」

「今夕弥さんが里沙さんに『俺にはお前しかいない』と言つていたと投稿しましたわ！」
「なんでそんなことするの？」

なぜかどんでもない嫌がらせをしやがつた麒麟寺さんを睨むと、胸を張つて得意気に鼻を鳴らし、そのままどんでもない投稿をしたであろうスマホの画面を霞に見せつけた。

「あなたが部活に入らなければ、里沙さんが不利になるであろう投稿をしまくりますわ」

「おいあのお嬢様脅し始めたぞ」

「ほしいものはなんとしてでも手に入れるつてお嬢様っぽいんちゃう?」

「それを職員室でやつてるのがおかしいと思うんだけど……」

「父さんも止めないし。生徒が生徒を脅してんのに「ウケる」とか言つて写真撮つてるぞこのクソ教師。俺もウケるから写真撮つてるけど。」

「流石の霞も里沙を人質に取られたら弱すぎるのか、少し悩んだ後「わかったよ……」と言つてため息を吐いた。それに満足そうに頷いた麒麟寺さんは父さんを見てふんぞり返る。」

「さ、部の承認のために動いてくださいな! 活動内容はお勉強及びvolunteerですわ!」

「わかつた。でも部の名前長すぎて覚えにくいから『便利部』とかにしどくか」「使いつぶす気満々だぞこのおっさん」

「里沙は潰さねえよ」

「誰も潰すなよ」

本当に不思議そうな顔をした父さんをぶん殴り、俺たちは親子喧嘩を始めた。

翌日、朝。

殺気に溢れる視線を一身に受けながら教室で里沙と話している時、それは訪れた。

校内の放送を報せるジングルと。声の調子を整えるように咳払いして、マイクに声を乗せた。聞こえてきたのは、昨日散々聞いたお嬢様の声。

『みなさまごきげんよう！　1年C組、麒麟寺朱音ですわ！　わたくしはつい昨日、麒麟寺朱音をお嬢様に育て上げる部、通称便利部を立ち上げました！　学校のみなさまのお手伝いをするために、校内サイトに依頼ページを作成いたしました！　恋のお悩み、勉学のお悩み等なんでも依頼してくださいれば、便利部がお手伝いいたします！　それではみなさま、よろしくお願ひいたしますわ！』

思わず校内サイトを開き、『今日のゴミと里沙たま』というクソ氣色悪い記事を無視して、見たことのない『便利部依頼ページ』というリンクを見つける。これを一体誰が？まさかあのお嬢様か？　いや、それはない。あのお嬢様はアホだから無理なはず。

……いや、今はいいか。とりあえず見てみようとリンクから飛ぶと、そこには『氷室夕弥を殺してください』『氷室夕弥の四肢をもいでください』『里沙たん、ちゅき』『里沙、見てるか？』『結婚してくれ、里沙』と依頼ではなく終わっている文字の羅列で埋め尽くされていた。多分うちのクラスだ。

「おい、里沙。見ない方がいいぞ」

「もう見た。気持ち悪い……」

クラスの男子数人が気持ちよさそうに身をよじつた。犯人はあいつらか。とりあえず顔は覚えたから、父さんに報告しておこう。あの人里沙にはクソ甘いからなんとか地獄に追い込んでくれるだろ。

「……ん？」

よく見てみると、部活メンバー一覧というリンクもある。それをタップしてみれば堂々と学年クラス、そして本名まで記載されていた。ああ、だから『里沙、見てるか?』ってやつがあつて、俺に対する恨み言が多くったのか。多分部活メンバーがわかつてなくてもそういうのであふれてたと思うけど。

「まあ、でもこんなのになんとしたか依頼送つてくるやついねえだろ。むしろ里沙に対する気持ちワリイ発言とか見えやすくなつてるから、それはなんとかしないとな」

「夕弥つて時々、ちゃんと頼りになること言つてくれるよね」

「なんやかんやで里沙のこと大事に想つてるやろしなあ」

「当然のように割り込んでくるのやめてくれ」

気配は感じていたものの、流石にいきなり肩組んですぐ近くに顔出されたらびっくりす、うわっ、顔良っ。そりやクラスの女の子も「え、岸くんだ!」「なんであのゴミの近くに!」って言うわな。あとなんでこの短い期間で俺が『ゴミ』つてのが共通認識になつ

てるんだよ。俺なんか悪いことしたか？

でもなんでここにいるのが俺も気になる。春斗は大体自分のクラスで霞をいじつてるか、自分のクラスで霞をいじつてるか、自分のクラスで霞をいじつてるかだから俺たちのところにくることはそんなにない。霞いじつてばつかだなこいつ。

その答えは、春斗が指を指した先にあった。その先は教室の入り口、そこに麒麟寺さんと霞、そしてもう一人見覚えのない女子生徒がいた。

「早速依頼やつて」

「は？ マジ？」

「ほんとに依頼する人いるんだ……」

驚きつつ、手招きする麒麟寺さんに従つて教室を出る。「（び）きげんよう」とどこか慣れなさそうに言った麒麟寺さんに「地獄に落ちろ」と挨拶を返し、里沙に殴られながら部室へ向かつた。

部室に入ると、豪華絢爛な装飾に革のソファ、いくらするかわからないティーセットにどこかの社長が使つていそうなデスクがドンと鎮座している。あれ、昨日こんなだつたつけ。

「さ、お座りください。春斗さん！」

「お客様、コーヒーか紅茶、どっちがお好みですか？」

「えっと、じゃあ紅茶で」

「かしこまりました」

……まあいいか。俺たちが使う部室が豪華で困ることなんて何もないし。嫉妬される要因が増えるだけだ。

割り切った俺とは違ひめちゃくちや困惑している里沙と霞を置いて、ノリで社長デスクの椅子を引くと、麒麟寺さんが機嫌よさそうにそこへ座る。なんか楽しくなってきたな。

「……さて、お話を聞かせてください？」

「えっと、自己紹介、したほうがいいよね。2年A組の三上若菜みかみわかなです。朱音ちゃんとは元クラスメイトで」

「三上さん。元クラスメイトって言わると留年が浮き彫りになるのでやめてくださいまし」

「えつ、あの人留年してたの？」

「あ、言つてなかつたつけ。そうだよ」

霞が驚き、里沙の言葉を聞いてから麒麟寺さんを見て「まあそうか」と呟いた。あいつ普通の皮被つてるけどちゃんと失礼だよな。麒麟寺さんはそんなこと気にする人じやないから青筋立たせるだけで済んでるけど、ちゃんと言う相手は選んだ方がいいと

思う。ちなみに麒麟寺さんはどちらかと言うと言わない方がいい相手。

「あの、その……こんなこと相談するの恥ずかしいんだけど、ちょうど半年前くらいに彼氏ができますね？」

「あら、おめでとうございます」

「朱音ちゃんには言つたことあるから知つてるとと思うんだけど……」

「そのような記憶力があれば留年していませんわ」

「後輩の前で留年ジョーク連発するのやめろ。反応に困るだろ」

「お前に反応に困る心があるなら、そこで笑つてる春斗をどうにかしろ」

霞が言うから仕方なく、俺のイケメンスマイルで見惚れさせて静かにさせてやるかとイケメンスマイルを春斗に披露したところ、余計笑いが深くなつた。

息の根を止めれば静かになるか……？

「でも、ね。あんまり進展なくて。まだ手をつないただけなんだ」

「おー。なんや可愛らしくてええと思いますけど」

「私としては、その先までいきたいというか」

「ごめん里沙。僕耳塞いで後ろ向いてるから」

初心すぎる霞はここでリタイアした。里沙も優しい顔で「仕方ないなあ」と霞の背中をぽんぽん叩いている。あんな顔俺にしたことあつたか？　いや、ないな。俺に向けて

くる顔は大体失望と侮蔑と嘲笑だ。俺一体普段里沙に対して何やつてんだ？

今までのこと振り返り、里沙に対する所業を思い返してみる。光莉さんとのことを相談したり、光莉さんの可愛さを語つたり、光莉さんへの愛を語りつくしたり……ダメだ、なんの問題も見当たらない。

「それで、この前ニュースになつてたでしょ？ 氷室くんと織部ちゃん」

「え」

「お」

里沙との思い出から現実に引き戻したのは、なにやら不穏な言葉だった。流れを整理すると、『半年前に付き合った彼氏がいる→あんまり進展がない→だから、最近ニュースになつた俺たちのところにきた』。

「結構、おあついみたいだし、アドバイスとかもらえないかなーって」

「そういうことならちようどいいですわね！ タ弥さん、里沙さん！ 今回はあなた方二人で解決しなさい！」

俺と、里沙が、恋の相談に乗る。

「じゃあまずは押し倒してキスすればいいと思います」

冗談だと思ったのか、三上さんは笑つて「もう、何言つてるの？」と言つた。俺は真剣だつたのに、失礼な人だなあ。

第6話 そして勘違いは加速した

土曜日。俺と里沙は、校区内にある大型デパート『ルミナス』にきていた。父さんが学生の頃からずっとあるルミナスは、やはりというべきか様々な客で賑わいを見せている。

そんな賑わいの一部であるはずの俺たちは、表情に出さないよう内心に絶望を貼り付けて、二人並んで立っていた。

「さあ、どうしようつか……」

「知らないよ……」

背後から感じる好奇心と期待に濡れた視線は気のせいではないだろう。

俺たちがここにきている理由は、『便利部』に依頼を持ってきた三上さんにある。

俺と里沙がカツブルだと勘違いしている三上さんは、アドバイスをもらうどころかお手本を見てほしいと俺たちに言つてきた。もちろん麒麟寺さんは「そういうことであれば、我が部の、いえ、日本の、いえ、世界のベストカツブルの力をお見せ差し上げますわ!!」と俺たちの意見も聞かず承諾した。それを逃す春斗ではなく、「そういえば、次の土曜ルミナス行くつて言うてへんかったつけ?」と俺たちを蜂の巣にし、霞は「里沙

に恥かかせるなよ」と良心を見せつけた。

しかし、恋人同士の振る舞いなんて知らない……いや、両親を見てたからなんとなくわかるけど、それを里沙とやろうとも思わない。でも、ここでそういう演技をしないつてことは『便利部』の活券に関わる。俺としては知ったこっちゃないけど、麒麟寺さんは霞を部に引き入れるために里沙を人質にとつてたし、あまりにもひどいこと以外は従つておいた方がいい気もする。

「ま、せつかくだしぶらぶら見て回ろうぜ。あっ！　今のはブラジャーブラジャーのことぶらぶらって言つたわけじゃねえからな！」

「そつか」

冷たい反応をされてしまつた。せつかくなんかちよつと気まずい雰囲気だつたから和ませようと思つたのに……。本当に間違われてないか不安だつたつていうのもあるけど。

俺と恋人と思われていて、なおかつそれを見られているという状態が気になるのか、少し様子のおかしい里沙を連れて歩く。土曜日だからか俺たちと同じく……厳密にいうと違うけどカツブルもそこそこいて、それを見るたびあつちを観察した方がためになるんじやねえかと振り向いてみるも、三上さんは俺たちにしか目がいつていないうだつた。

それなら、できるだけ恋人っぽく振舞つた方がいいか……。恋人っぽい振る舞い、そ
ういえば、両親はどこか出かけるときに時々別々に家を出ていく。なんでそんなめんど
くせえことすんのかつて聞いたら、「待ち合わせ場所で会つた時に、綺麗にしてきてくれ
た日葵を褒めたいからな」とカツコつけていた。

そういうえば俺は里沙のこと褒めてないなと思つて里沙に視線を向けると、ちょうど目
が合つた。

「なに?」

「里沙。お前は本当にいい体をしてるな」

里沙の顔が青ざめて、家族を見る目から敵を見る目になつてしまつた。どうやら何か
違つたらしい。

「え、まさか夕弥、私をそういう風な目で見てたの……?」

『勘違いしてるようだから言わせてもらうけど、『いい体だと思う』ことと『性の対象と
して見る』ことは直結しないぞ』

「いや、だとしてもそんなこと言われていい気分しないよ。やり直し」

「なんか、仮にもデートしにきてるからか、いつも可愛いけど今日はより可愛いな
「は? キモ」

「ぶつ飛ばすぞテメエ」

やり直しを要求されてやり直したらこの仕打ち。そりや俺も裏め言葉あんまり思いつかなかつたけどさ。仕方ねえだろ。可愛い以外出てこなかつたんだから。

……ただなんとなく、隣にいる里沙が機嫌よさそうにしてるから不正解つてわけじやなかつたんだろう。ふふ。キモとか言つて照れ隠しですか。可愛いやつめ。

「そうだ。手とか繋いでみる?」

「さつきキモつて言つたやつの発言かよそれ

「別に手を繋ぐくらいどうつてことないでしょ。キスとかは死ねつて思うけど」

「人の命を何だと思つてんの?」

ん、と手を差し出すと、ん、と手を握つてくる。ちやつかり恋人繋ぎしてきたのはこいつの根性を褒めるべきか、引きつりそうな表情を注意するべきか。別に「なんで繋がなかつたの?」て三上さんに聞かれたら「人が多くてむしろ危ないかと思いまして」つて言えばいいだけなのに、頑張るなあこいつ。

「久しぶりに繋いだけど、おつきくなつたね」

「おいやめろよ! そんなえつちなこと言うの!」

爪を立てられた。痛い。

「ごめんなさいは?」

「里沙より手が大きくなつてごめんなさい……」

「そつちじやなくて」

里沙はため息を吐いてから「まあいいよ」と言つて前を見る。まさか俺の手が里沙の手より大きくなつただけでブチギレるなんて、どうなつてんだ教育つてやつは。日本の未来は終わつてんな。

しかし、マジで久しぶりに繋いだけど里沙の手がめちゃくちゃ小さく感じる。可愛い女の子の手つて感じだ。俺の手は固いのに、里沙の手は柔らかい。きっと童貞レベル100なら握つただけで昇天することだろう。ちなみに俺のレベルは89だから危ないところだつた。

しばらく歩きながらいつも通りの会話を繰り広げている中、店の前、アウトドアショッピングだらうか。その前に展示されているテント？ が目に入つた。

「里沙。あれつてテント？」

「ん？ ……テント、じゃないかな？ ヘえ、透明なテントつてあるんだ」

見つけたのは、ドーム型のテント。ただし透明であり、中がスケスケの。ただでさえキヤンプはプライバシー守られにくいのに、自らそれをぶち壊しに行く大胆なテント。一瞬簡易ラブホテルかと思つた俺はかなり一般的と言つていいだろう。

「そういやキヤンプつてあんまり行つたことないよな」

「だね。次のゴールデンウイーク、キヤンプもありかも」

「ちよつと見てみるか」

「うん。行こ」

簡易ラブホテルの横を通つて店内に入る。アウトドアショッピングというよりはキャンプ用品店べきか、キャンプに詳しくなくとも「あ、キャンプで使うんだろうな」とわかるくらいわかりやすくキャンプ専門店の装いだ。

「もうここでキャンプでいいんじやね？」

「自然どころか人工物に囲まれてるけど……」

「ちゃんと雨も降るだろ」

「それ多分、バーベキューの煙で火災報知器が反応してるだけだと思う」

「ここでキャンプをする案は却下らしい。なんでも使えるし色々なテントを楽しめるいいと思つたんだけどなあ。」

それより、二人用のテントとかないかな。もちろん光莉さんとの愛の巣つてわけ。自然に囲まれながら二人きりの世界を構築して、そのまま結婚して子どもができるつて寸法よ。

里沙が手を離した。そんなに気持ち悪かった?

「ね、見てこれ！」

「ん？」

別に俺が気持ち悪かったわけじやなく、いいものを見つけただけだつたらしい。
里沙が手に持つてゐるのは、直径20cmくらいの球体。色は水色で、近くを見ると
様々な色のものがある。

「そんなにボール好きだつたつけ」

「これボールじやないの！ なんだと思う？」

「でつかいうんこ！」

「今日ほど夕弥との血の繋がりを恨んだ日はない」

「そんなんに？」

俺としてはルミナスが揺れるくらいの爆笑ワードだつたのに、どうやら里沙には刺さ
らなかつたらしい。里沙はため息を吐いてまた一つ幸せを逃し、手に持つてゐるボール
の説明を始めた。

「これね、中に材料入れて転がすだけで、アイスができるらしいの」

「つてことはフンコロガシつてことだから、さつきの俺の回答もあながち間違いじやな
いのか」

「あと、思いきり叩きつければ人殺しの道具にもなる」

「俺を冷たくしてどうする。すみませんでした」

謝つたら許してくれた。里沙はボールを眺めながら「ほしい……」と呟き、値段を見

てぐぬぬと唸り始めた。値段は1万5千円で、学生には少し手を出しづらい金額。
仕方ないな。今日はデートだし、俺が一肌脱いでやるか。

「里沙」

「え、なに？」

「んなもん買つてしばらくは使うけど、どうせ普通にアイス買つて食うのが楽だつて気づいて使わなくなんだからやめとけよ」

「血も涙もない……」

いや、わかつてるけど……と文句を言いながら棚に戻して、不満がありますと頬を膨らませたまま自然と手を繋いだ。

「なんか、ほら、ないの？ 否定するだけじゃなくて楽しそうだとか、肯定するようなさ」

「里沙がいればどこでも楽しいからな」

「……ふーん」

里沙はちよろいのでこんな感じのことを言うと機嫌が直る。実際一緒にいると楽しいからずつと一緒にいるわけだし、嘘は言つてないから別にいいだろ。今も上機嫌なのが俺の手をにぎにぎして喜びを表現してるしな。こいつマジで可愛いな。妹みたいに思つてるけど、本当の妹だつたらキモいくらいシスコンになつてた自信がある。だつて、父さんは妹の薰さんいまだに可愛がつてるし、母さんも同じだからあの二人の血が

流れてる俺は間違いなくそうなつていた。

「てか、だから俺里沙のこと好きなのか」

「え？」

「え？」

「え？」

思わず出た言葉に里沙が反応して、俺以外の誰かがそれに反応して、その声があまりにも聞き覚えがありすぎて俺が反応して、振り向いた。

そこには、艶のある黒い髪を肩まで伸ばし、少々釣り目気味な大きい目、笑いすぎたのか目尻にある小皺がとつてもチャーミングな、おっぱいの大きいお姉さんがいた。

朝日光莉。俺が好きな人。

状況を整理してみよう。俺たちは恋人繋ぎで、今俺が里沙に対して好きって言つて、それを聞かれて見られた。

「光莉さん、ここにちは。今日もお綺麗ですね」

「ここにちは」

ひとまず、挨拶は大事。そして褒めることも大事。もしかしたら聞かれてないかもしないし、自分から墓穴を掘ることはない。相手が触れてこないならこっちから言うべきじゃない。いや、本当にそうか？　光莉さんがもし俺と里沙が付き合い始めたつて勘

違ひしてたら終わりじゃないか？

……いや、それならこっちから「さつきのは勘違いです」って言つた方がいい。最悪は避けなきやいけない。そう決意して口を開こうとした時、繋いだ手がちよこ、と引かれた。

「ね、ねえ夕弥。今、ほんと？」

こいつも勘違いしてんじやねえか!!

状況わかってんのかテメエ！ 今光莉さんは俺と里沙が付き合い始めたつて勘違いしてるかもしけねえんだぞ!! なのになんで「いや、恋愛的な意味じやねえんだよ」って否定するのに罪悪感がある聞き方してくんどう！ ちよつと言葉詰まっちゃうだろうが！

「私、お邪魔みたいね。またゆつくり話聞かせて」

「あ、違うんです！ 光莉さん！ 光莉さん！」

光莉さんは俺と里沙を交互に見てから、小さく微笑んで俺たちに背を向け、そのまま去つていった。すぐに追いかけるべきだとわかついていても、この勘違い女、いや言い方が悪かつた。里沙の勘違いを置いていくわけにもいかず。

「……とりあえず、飯にすつか」

「う、うん」

えつと、多分ごめん。とようやく先ほどの事態を理解し始めた里沙の頭をぽんぽんと

撫でると、「ウザい」と弾かれた。嘘だろお前。

第7話 そして新たな問題が舞い込んだ

どうやら三上さんの参考になつたらしく、ほくほく顔でお礼を受けてそのまま見送り、帰り道。

「……」瞬でも勘違いしちやつてごめん

「いや、俺があんなこと言つちやつたのが悪いんだよ。里沙は何も悪くない。俺のママにしてやつてもいい

「なんで？」

俺にもわからない。

あの後、里沙には『家族として』好きだつて言つたのは理解してもらつた。でも光莉さんはあの場からすぐいなくなつちやつたし、まだ説明できていない。『便利部』の活動で里沙とデートを演じることになつて、俺がぽろつと里沙に好きだつて言つちやつただけ、と言えば話は早いけど、少し待つてほしい。

光莉さんは『里沙が俺のことが好きだ』と思つてゐる。つまり、光莉さんから見れば『自分に好意がある女の子を期待させ突き放したクソ野郎』に映るつていうことだ。

「どうする……このままじや俺がクソ野郎になつちまう」

「それは大丈夫じゃない？ 元々だし」

「俺は父さんの背中を見て育つたんだ！ そんなわけあるか！」

「じゃあクソじやん」

「あ、じゃあクソか」

納得した。だから俺入学間もなくしてクラスメイトから『ゴミ』って罵倒されるのか。
なんであんな子育て大失敗男が教師なんてやつてるんだ？

「光莉さんには私から言つとくよ。『便利部』の活動で、そういう風に見せるために夕弥
が言つたつて」

「マジでいい女じやん。結婚してくれ」

「ふふ、いいよ。しょつか？」

え、と呆ける俺に里沙はまた笑う。その頬は赤く染まっていて、「それじや！」と何か
を誤魔化すように背を向けて走り去つていった。

……え？ うそ、ほんとに？ いや、そんなはずない。事実確認だ。このまま連絡を
取り合わず明日を迎えたたら変に意識しちゃつて俺が恥ずかしくなる。

スマホを取り出し、『おい、今の冗談だよな』と里沙に送ると、『そだよー』と返つて
きた。

そだよーじやねえよ。

「男の純情を弄びやがつて……許さねえ……!!」

……あれ？ この流れ、なんか知つてるような気がする。

まあ気のせいだろ。きっと。でも一応月曜日は死なないように気を付けようと思う。
一応ね？

「はあっ……はあっ……!!」

月曜日。息を切らしながら、俺は部室棟廊下にある掃除用具入れに身を潜めていた。
事の顛末はこうだ。俺と里沙が向かい合つて写真が一面になつていて、俺がプロ
ポーズして里沙が受け入れたっていうニュースが学内サイトに上がつていた。そして
俺は里沙の過激派に命を狙われた。クソツ、なんでこの学校は命のやり取りが日常的に
行われてんだ？！

「いたか!?」

「いや、いない」

「探せ！ 必ずやつを性犯罪者の骨格標本にしてやるんだ!!」

どうやらうちの学校にはサイコパスがいるらしい。なんでそんな恐ろしい発想がで
きるんだ。

里沙と一緒に登校して、学校に近づいた瞬間背後から気配を感じ、振り向けばどう見ても俺を殺す気しかない目をしている数人の男子生徒。脱兎のごとく逃げ出した俺は、追手からの目線を切りながらこの掃除用具入れに逃げ込んだつてわけだ。

なんで俺がこんなみじめな目に……？　今回ばかりは悪いの里沙だろ。流石の父さんと母さんも里沙を叱ってくれるだろ。だつて二度目だぞこれ。もしかして確信犯なんじやねえのかあいつ。だとしたら許さねえ。今度会つた時「正直お前に性的魅力を感じてる」って言つて死ぬほど嫌な気持ちにさせてやる。

俺が里沙への復讐を考えていると、殺伐とした空気に似合わない綺麗な鼻歌が聴こえてきた。その鼻歌の主は俺が隠れている掃除用具入れの前で立ち止まると、ゆっくりとドアを開ける。

「すんません」

「えっ、ちょっ」

顔も確認せず腕を掴んで中に引き入れ、また閉めた。そして間髪入れず大声を出されないように口を塞ぐ。すみません、こうしないと俺の居場所がバレるかもしけなかつたんです。

「……！」

「すみません。俺、命を狙われてるんです」

つかこれ、掃除用具入れ狭いから密着しちやつてますね。本当にすみません。絶対女性ですよね。鼻歌聴いててそう思つたし、女性特有の香りするし、柔らかさとかもモロにそう。俺性犯罪者じやん。なんで？ なんで俺性犯罪者になるか殺害されるかの二択を選ばなきやならなかつたんだよ。

……いや、この人が知り合いならワンチヤンある。恐る恐る目線を下げ、どうか知り合いであつてくれと祈りを捧げながら顔を確認した。

「……」

そこには恍惚としている麒麟寺さんがいた。知り合いは知り合いだけど様子がおかしい。なんか小刻みに震えてるし。もしかして呼吸できない？ いや、鼻まで塞いでないから大丈夫なはず。それなら閉所恐怖症とか？ でもなんか気持ちよさそうだしそれもない？ ジヤあなんだ!? なんで俺が麒麟寺さんを引きずり込んだのに俺が怖い思いしてるんだ!?

そうして混乱する俺の耳に、予鈴の音が届く。それと同時に追手も教室に戻つていく音が聞こえて、しばらくしてから掃除用具入れの外に出た。

「ふはっ、はあ……ハア……」

「あ、あの、麒麟寺さん。さつきのには訳があつて」

「い、いえつ、わかつていますわ。ニュースを見れば大体のことは推測できます、もの」

頬を赤く染め、息を切らしながら話す麒麟寺さんはどこか色っぽい。ぺたんと可愛らしく座り込んでるものだから余計にそう見えてしまう。光莉さんには及ばないけど。「でもすみませんでした。苦しかったですよね？」

「大丈夫ですか。わたくし、少々ドMですので」

「矛盾してねえか？」

「え、何？　じゃあ掃除用具入れに引きずり込まれて口を押さえられて興奮してたってこと？　いや、怖がらせるよりはいいけど……むしろ最善か？　だって喜んでくれてるんだし……よし、麒麟寺さんがドMでよかつた！」

「てかなんで部室棟に？」

「朝、少しでも時間があれば掃除してありますの。使用させていただいているわけですから、少しでも綺麗にしておかなければと」

少し落ち着いてきたのか、流暢に喋りながら立ち上がる。麒麟寺さんってただの、つていうかとんでもないアホだと思つてたけど結構見習うべきところある気がするんだよな。今のだつてそうだし、これだけできた人ならさつきのドM発言も俺に気を遣つてのものに思えてきた。

「夕弥さん、ありがとうございました。おかげで非常に興奮いたしましたわ」

違うわ、ガチだった。なんだこの人。『お嬢様に憧れているドM留年女子生徒』つて世

界のどこを探してもこの人くらいしかいないだろ。どんだけ追加する気だよ不名誉な
アイデンティティ。進歩のない日本の教育が産んだ化け物か？

「ああんつ、それより聞きましたわよ」

「咳払いに見せかけて喘ぐな。何をです？」

「三上さんから、随分いいデートを見せてもらつたと。部長として鼻が高い高ーい！
ですわ」

「鼻をあやすな。いや、ほほ普段通りだつたんですけどね」

「夕弥さんと里沙さんはいとこでしよう？ 長い年月の上に今の関係があるのなら、そ
れは関係を進めたい三上さんにとっていい見本になるのは当然でなくて？」

「この人本当に留年したのか？ 単純に勉強できなくて留年したって聞いたけど、今
のセリフ聞いたら少なくとも留年するほどバカじやない気がする。まあ、それを聞いて何
かの地雷踏んでもなんだし別に気にしなくていいか。ドMは本当っぽいし、嘘つくタイ
プじやないだろ。」

「それと、また新たに対処しなければならないことがありますわ」

「対処っていうと、なんか依頼には聞こえませんね」

「ええ。わたくしを壁に押さえつけながらこれを見てくださいまし」

「もちろん壁には押さえつけず、残念そうな麒麟寺さんを無視してスマホを覗き込む。

そこには、里沙に対するおぞましい書き込みがあつた。便利部の依頼ページに書き込まれたそれは、里沙に対する求婚であつたり告白であつたり、中には俺への殺害予告まであつた。別にそれは日常茶飯事だからいいとして、里沙へのおぞましい書き込みは放つておけない。

「既に先生が動いてくださつているようですが、我が部の一員にこのような書き込みは許せませんわ。里沙さんはわたくしと違いまともな女性。毎日これを見てしまつては心に傷を負つてしまふかもしません」

「とりあえず麒麟寺さんに自分がまともじやないつて自覚があつてよかつた。それで、何か対策は考へてるんですか?」

「わたくしはアホなので考へてくださいまし」

「カス。とりあえず、今日の昼にでもあいつら集めましよう」

やつぱりこの人頭が悪くて留年しただけだ。間違いない。俺の罵倒で気持ちよくなつてゐる麒麟寺さんを見て確信した俺は、春斗と霞に『今日の昼、便利部部室に集合』と送つておいた。

すぐに返信があり見てみると、『里沙の件やな。了解』と春斗から、『里沙の件だな。とりあえず武器の調達から始めよう』と霞から。察しが良くて助かるが、流石に身内から犯人者が出るのは止めなきやいけないので『バレないようにな』と返しておいた。

第8話 そして対策は固まつた

「さて、それでは第一回『里沙さんに不快な思いをさせる不届きものどもへの制裁会議』を開催いたしますわ！」

昼休み。便利部中央のテーブルを囲み、俺たちの前に立つ麒麟寺さんがホワイトボードにマーカーを走らせ、『里沙さんに不快な思いをさせる不届きものどもへの制裁会議』と無駄な達筆な字で刻む。アホな人つて字が下手なイメージあつたけど、多分お嬢様は字が綺麗みたいなイメージがあるから字の練習をしたんだろう。

里沙は申し訳なさそうに、春斗は珍しく真剣な表情で、霞は殺気立っていた。俺と春斗がひどい目に遭つてもほとんど気にしないくせに、霞つて里沙にめちゃくちや甘いよな。何？ 里沙のこと好きなの？ 死ぬぞ。冗談抜きで。

「みんな、ごめんね？ こんなことになっちゃつて」

「里沙が謝る必要ないよ。あんなクソみたいな書き込みするやつらが悪いんだから」

「俺も同意見だけど、そもそもその発端は里沙だつてことをここに宣言します」

「それはそうかもせんけど、それを言うんやつたら発端は夕弥と里沙のじやれ合いをニュースにのつけたやつやろ」

「まあそれはそう」

「つまりそいつをふん縛つてぶち殺せばいいってことか」

「みなさん！ say shock me！」

「静肅にだろドMが」

「あと別にそんなうるさくなかったやろ」

一応麒麟寺さんが部長だから言うことは聞いて静かにしておく。正確に言えば言うこと聞くなら麒麟寺さんをぶつ飛ばすって言わなきやいけないんだけど、麒麟寺さんは静肅にとsay shock meを間違えただけだろうし。いや間違えるか普通。静かにしてほしいっていう気持ちよりもいじめてほしい気持ちの方が勝つたってこと？ そんな欲望濡れだから留年するんだよバカが。

もちろん俺は常識人なためそんなひどい罵倒は口に出さず、麒麟寺さんが話出すのを待つ。麒麟寺さんは俺たちの顔をゆっくりと見回した後、ホワイトボードに『対策』と書き出した。

「今ある問題は我々便利部の依頼ページに、里沙さんへのクソ氣色ワリイ文言が書き込まれていること」

「麒麟寺さん。怒りすぎてお嬢様言葉崩れてますよ」

「その発端は夕弥さんと里沙さんがニュースになつたこと。つまり対策として考えられ

るのはなんでしょうか?」

「あ、そつからこつちで考えてくれつてことなんやな。了解」

そうえいばこの人対策何も思いつかないから俺たちを集めたんだつた。あまりにも自然に進行始めたから何か対策を思ついたのかと思つちやつたぜ。

まあこれはものすごい偏見だけど、お嬢様は下々のものに全部任せて、下々の出した成果を自分のものにして高笑いするものだろう。ア!? 誰が下々のものだ!!

「言うても二択やろなあ。ニュースが発端でこんなことなつてるんやつたら、その勘違い事態打ち消すか、それとも勘違いされたままどうにかするか」「どうにかするつて何するんだよ」

「んー、私の言うことなら聞いてくれるかなあ」

「俺にひどいことするなつて言つても、里沙が洗脳されてるとか訳のわからんねえこと言つて殺しにくるだろうなあ」

あんなニュースが出たくらいで俺の殺害を決意するくらいだ。里沙が何を言つたとしても、やつらにとつて重要なのは『里沙に特定の相手を作らせないこと』。だから俺にひどいことをするなつて里沙が言つても止まらない、書き込むのをやめてつて言つても表面上は収まるだろうがそういうやつらが次にどういう行動をとるかわからない。

マジで終わつてねえかこの学校。なんでこんなどこに入つちまつたんだ?

「ログインIDとかで書き込んでるやつはわかるだろ？ そいつらを弾くようにサイト側が対応すればいいんじゃないか？」

「既に夕弥さんに対して過激な行動に出てる以上、見えなくしただけでは意味がありませんわ。根元から断ち切らなければ、ヒートアップしてもつとひどいことになりかねません」

霞の意見を麒麟寺さんがバッサリ切り捨て、部室内に沈黙が訪れる。相手はあんなニュースが出たくらいで里沙に気持ち悪い文言送つたり、俺を追いかけまわして亡き者にしようとしてくる化け物どもだ。そう考えれば一時的な対応をとつて落ち着かせるんじやなくて、根本から断つっていう麒麟寺さんの意見は間違っていない。

ただ、その方策が思いつかない。

「……私が、夕弥をこっぴどくフルって言うのは？」

「その後学校で里沙と話さなくなることだろ？ それは俺が無理だし、第一それは里沙と付き合つてたつてことを認めたことになるから、それを理由に俺が殺される」「僕はそれでいいと思う。少なくとも里沙の安全は保障されるだろ」

「アホ。里沙が夕弥をフルってことは里沙がフリーになるつてことやぞ？ んなもん力

「あの、俺が殺害されることについても注意してもらつていいですか？」

「こら、あかんぞ」

春斗が適当に霞を怒った姿を見てブチギレそうになつたが、今は里沙の問題をどうするかが先決だ。こいつらに対する文句と制裁はあとでいいだろう。なんでこいつら俺の扱い雑なんだよ。そりや里沙は可愛いらしいやつだし非の打ちどころがないけど、俺だつて……まあ、俺も春斗と霞の立場ならそうなるわ。何にも悪くなかった。むしろ俺が悪かつた。

再び部室内に沈黙が訪れる。里沙は死ぬほど申し訳なさそうにしてるし、早くなんとかしてやりたいけど、一つもいい案が出てこない。これは、もう先生がなんとかしてくれるのを待つた方がいいか？

そうやつて諦めかけていた時、麒麟寺さんが「こういうのはいかが？」と里沙を見つめて話し始める。

「え？」

「夕弥さんをこらしめようと暴れているド変態を誰も止めない理由はなんだと思います？」

「夕弥がカスだから」

「夕弥がゴミだから」

「春斗さん、霞さん正解ですわ」

「里沙。今は何も言わず俺をよしよししてくれ」

「キモ」

俺の心は打ち碎かれた。幼馴染二人にカスだとかゴミだとか言われて、慰めてもらおうと思つたらキモつて言われて。もういいんだ。俺に生きてる価値なんてないんだ。生きてるだけで里沙に迷惑かけるなら死んだ方がマシだ。

「あくまで客観的に見てですわよ。わたくしはそう思つていませんもの」

「流石この世を引っ張つていく器を持つてゐるだけのことにはありますね」

俺はわかつていた。心中ではバカだとかアホだとか罵倒しつつも、この人が上に立つ者の才覚をお持ちであるということを。わかつてんのか？ 俺のことをカスとかゴミとかキモとか言つてきたクソ幼馴染ども。人の悪いところしか見つけられないお前らは人として終わつてんだよ。テメエらみたいなもんは麒麟寺さんの部屋の床を舐めて掃除でもしてろ。

「夕弥さんがどうしようもないお方だから、里沙さんに相応しくないというのが我が校の総意になつてゐる。つまりそこを覆せれば、むしろ覆さなくとも多くの方を仲間にできるかもしれませんわ」

「それはどうやつて？」

「里沙さん。いつも夕弥さんを罵倒する姿ばかり見てますが、本当に悪いところしか

ないのですか?」

いつものアホな雰囲気はどこへ行つたのか、本当にお嬢様かと思つてしまふほど凜とした表情で里沙を見る麒麟寺さん。今舞台に上がつてゐるのは麒麟寺さんと里沙の二人で、俺たち男どもは客席へ降ろされてしまつた。それだけ場を支配されたと言えばいいのだろうか、少なくともこの部室内での主導権は麒麟寺さんが握つていて、それに引き込まれてゐるのは事実だ。

「……え、つと、言わなきやだめですか?」

「その反応をするということは、きちんと夕弥さんのいいところを理解してゐるということですわね。そう、入学して間もない夕弥さんのいいところをあなたは知つてゐる。でも、周りの方々は何も知らない」

「つまり、みんなに夕弥のことを知つてもらう?」

「その上で里沙さんが本気で夕弥さんのが好きだと信じてもらえれば、仲間は増えるはずですわ。仲間にするなら女子生徒がいいですわね。高校生男子は、女子にダサいと思われることをなにより嫌いますから」

「えーっと、つまりなんだ。里沙が女子に俺のいいところを伝えて……付き合つてるどうこうはどうするんです?」

「そこは里沙さんにお任せいたします。ただ、この案を採用するのであれば、夕弥さんに

好意がないとは言えませんわね』

麒麟寺さんの案は、里沙の恋を応援させることで味方につけるつていうこと。確かに里沙くらい可愛くていいやつなら味方に付いてくれる人は多そうだ。でもそれって、なんか、どんどんあのニュースで生まれた勘違いが本当になつていきそうな……。光莉さんには里沙が『本当にしたい』って嘘ついてるけど、マジで本当になつたら困るんだけど俺。もし高校の間に光莉さんと付き合えるつてことになつたら、光莉さんにまで矛先向かねえか？ 里沙から俺を寝取つたって。

「……タ弥、いい？」

多分、里沙もそのことがわかつてゐんだろう。俺に聞いてくれたのはそういうことだと思つてる。

できれば、ダメだつて言いたいけど。でもここでダメだつて言つたら里沙を見捨てることになる。

うん、そつちの方がダメだな。

『できるだけいい風に言つてくれよ。俺の人生もかかつてんだからな』
『……ふふ、うん。私、タ弥のこと誰よりも知つてゐる自信あるもん』
『ちなみに俺の方が知つてるで。マジな話』

「あとで僕にも教えてくれ。頗くらいいしか思いつかない」

「決まりですわね！ 里沙さんに負担をかけるのは申し訳ありませんが、頼みましたわよ！」

じやれ合い始めた俺たちを見て、麒麟寺さんが得意気に笑つて胸を張る。掃除用具入
れで割とあることを知った俺はなぜだか気まずくなつて目を逸らすと、里沙と目が合つ
た。

じとつとした目で見られた。俺のことを誰よりも知つているつていうのはどうやら
本当らしい。誤魔化すためにしたウインクも大した効力はなく、むしろ麒麟寺さんに告
げ口された。あつ、やめろ！ その人興奮しちゃうだろ！

第9話 そして勘違いは応援になつた

あのニュースが出てから、大丈夫？ と心配されることが多くなつた。朝登校するときいつも夕弥と一緒になんだけど、夕弥は男の子にいつも追いかけられて途中ではぐれて、教室に行けば「大丈夫？ 氷室に何かされてない？」と声をかけられ、大丈夫と笑つて答えるのが日課になつてた。

多分、大丈夫だろうなつて思つてたから。夕弥なら逃げきれるだろうし、逃げきれなくとも口がうまいからなんとかして無事で帰つてくるんじやないかつて。多分夕弥も私に被害が出てなかつたらこの状況をどうにかしようなんて言い出さなかつたはずで、それは春斗も霞も同じで、春斗は追いかけられてる夕弥を見て笑つてたし、霞は夕弥の逃走ルートを見て、どうすれば効率的に捕まえられるかなんて遊びもしていた。

だから、私に被害が出なかつたら面白いだけで済んだのになあ。

「里沙、大丈夫？」

放課後。おじさん……先生が出て行つた途端、クラスの男の子が戦闘体勢に入つて夕弥のところへ殺到して、夕弥が逃げ出した後。友だちが私のところにきて心配そうに声をかけてくれた。みんな私が依頼ページですごいことを言われてるつて知つてるから、

いつもこうして声をかけてくれる。それ自体はありがたいことなんだけど。

「みんな心配してるよ。氷室に洗脳されてるんじやないかとか、弱み握られてるんじやないかとか」

これ。入学して全然経つてないのに悪評を広めまくつてるのが面白いけど、現状を考えれば笑えない夕弥に対する評価。これのせいで男の子たちが止まらないし、放置しても大丈夫だつてなつてしまつていて。これをなんとかするには、夕弥がいい人で私が好意を抱いているつてことに……しないと……いけない……。

「ど、どうしたの？ 何か苦しそうな顔してるけど」

「やつぱりひどいことされてたの？」

「ちつ、違う！ そんなことない！」

夕弥に好意を抱いていることにするつていうのがあまりにも嫌すぎて顔に出てしまつていたのか、みんなに心配されてしまつた。慌てて否定したから余計夕弥に脅されてるみたいになつてるし。ダメだ、私がここで失敗しちゃつたらまた夕弥たちに迷惑がかかつちやう。

「……あのね。みんな、夕弥がゴミだとかカスだとか色々言つてるけど、それは確かにそ
うなの」
まず、それは認めないといけない。最初から夕弥を全肯定すると盲目に見えるし、洗

脳感が強くなるから。

「でもね。そんなことが気にならないくらい、一緒にいて楽しいの。何もない道を歩いてても絶対に笑わせてくれるし。それに、自分本位に見えるけど、私が危なくなったり苦しんでたりしたら、いつも私を優先してくれる」

小学生の時。私が怖いおじさんに声をかけられたときは真っ先に飛んできて「最近のネットの拡散力ってすごいんですよ」つて脅してたし、クラスの男の子にちよつかいかけられると無言で庇つてくれて、「お前らが思いつくよりもひどい嫌がらせを、お前らにできる自信と準備が俺にはある」つて言つて追い払つてくれたし。

……まあ、一般的な王子様みたいなカツコよさとはかけ離れてるけど、それでも私を守つてくれてたことに変わりはない。「里沙がひどい目に遭つたつて父さんに知られたら息子とか関係なく殺されるから」なんて言つてくるけど、そんなことなくとも助けてくれるつて信じてる。

「確かに夕弥はおかしいかもしないけど、私にとつては素敵な人なの。面白くて優しくて、時々カツコよくて。私を大事にしてくれる夕弥が好き」

言つてから、あれ?と思つた。夕弥のことはもちろん家族として好きだけど、今の言葉のニュアンス的には恋愛的な好きで、私は夕弥とそういうことになるなんて考えるだけでも吐き気がしてたのに。なぜか、今はするつと『好き』つていう言葉が出てきた。

……そういえばお母さんが、『お父さんはすごく演技がうまくて、自分の容姿活かして兄貴をたぶらかしてたから、里沙はそうなつちゃだめだよ』って言つてたつけ。なるほど、その演技力が私に受け継がれていて、恋愛的な『好き』も演技なら自分にすら違和感なく言えちゃうってことか。お父さんの遺伝子は恐ろしい。

なんてお父さんの遺伝子に震える私の耳に、黄色い声が突き刺さる。いつそ耳鳴りにすら聞こえてしまいそうなそれにびっくりしている私に、休む暇もなく質問が飛んできた。

「ごめん！ そうだよね、里沙が好きっていうならいい人に決まってるもんね！」

「ねえねえ、もつと教えてよ氷室のこと！ それだけ言うならいっぱいエピソードあるんじやない!?」

「え、えっと……言わなきやだめ？」
「だめ!!」

多分、作戦には成功したけどそれと同時になにかを失った気がする。とりあえずごめん、夕弥。

「おはよう氷室！ 里沙！」

「ん？　おはよう」

「お、おはよう……」

これで7回目。里沙と一緒に登校して、里沙の友だちに挨拶された回数。今までには里沙にだけ挨拶して俺は無視してたのに、それほど昨日の作戦がうまくいったってことだろうか。一応昨日成功したっぽいことは教えてくれたし、実際今日は俺を襲撃しようとしたやつらに対して、「うわ、ダツサ」「モテない理由自分から振りかざしてんじやん」と女子生徒が言葉の刃を多投してくれる姿を見かけた。

ただ気になるのは、挨拶してくれた度に里沙が気まずそうにしてること。

「なあ里沙。そういうえば昨日具体的にどうなつたかつてのは聞いてないよな」

「……えっと、耳貸して」

「いいけど、ちゃんといい医者紹介してくれよ」

「取らなくていいから」

ああそういうことかと少しかがんでそつと里沙へと近寄る。顔を寄せてきた里沙の髪が頬をくすぐつて、ふわっと甘い香りがして、ちゃんと女の子してるなーと感心している俺の耳に里沙がそつと囁いた。

「あのね」

「おう」

「私が夕弥のこと好きってことになつて」

それは作戦通りだから、別に里沙が気まずくなる必要は……まあ里沙からしたら「めんどうから気まずくはあるだろうけど、別に割り切つてりやいいのに。」

「それでね」

「あ、まだあるのか」

「夕弥との思い出とか根掘り葉掘り聞かれて」

「おう」

「気づいたら私も止まらなくなつちやつて」

「うん」

「めちやくちやガチだと思われちやつた」

だからごめん、と謝る里沙に、なんだそんなことかと拍子抜けした。それって俺が被害被るわけでもないし、むしろ里沙の男避けにもなるから悪いことなんて……光莉さんと付き合う道が遠のくくらいだ。大問題だけどそれは昨日割り切つたから仕方ない。

だからそれを聞いても里沙が気まずくなる理由がわからなかつた。なんだろう、女子からそういう目で見られるかもしれないからごめんとか？ 里沙なら俺がそういうの気にしないつてわかつてそうだけなあ。

「あ、もしかして言つてる間に俺のこと好きだつて思つちやつたとか？」

「そ、それはない!!!!」

「バカお前耳元だつてこと忘れんな!!」

見事俺の左耳を破壊した里沙は、顔を赤くして走り去つていった。なんか最近よく里沙が走り去る姿見るなあとのんきに考えて、指を鳴らしてまだ左耳が聞こえることを確認してから歩き出した俺の肩に、手が二つそつと添えられた。

「おはよう。夕弥」

「朝からうるさいな」

「春斗、霞。おはよう」

相変わらずイケメンスマイルを振りまく春斗と、不機嫌そうな霞。二人の視線は遠くなつた里沙に注がれていて、しばらくしてから俺に視線を向ける。

「なんやおもうそうなことなつてるやん」

「聞いてたのか?」

「幼馴染だし、家族みたいなものだからな。話してる内容は大体わかる」

「なんか霞からそういうの聞くと嬉しいわ俺」

「せやんな! なんか俺もきゅんってきたわ」

「うるさいな!」

強くない力で肩を叩かれて、反射的に「いたつ」と言うと、霞が「あ、悪い」と謝つ

てきた。マジでいいやつだなこいつ。時々言動とか行動とかズレるしめちゃくちゃ初心だけど。多分初心は関係ない。

「ま、多分友だちとそういう雰囲気の中で話したから恥ずかしがつてるだけだろ。あいつそういうの想像しただけで吐いたんだぞ？」よく考えたら怒つていいよな俺」

「里沙は純粋だしな」

「んー、どうやらなあ。案外もしかしたらもしかするかもせえへんで？」

「もしそうなつたらマジで相談に乗つてくれ」

俺やだよ。それってなんか、光莉さんから応援されることになるじゃん。光莉さんが俺を諦めさせる武器を手に入れるつてことじやん。

それに、うまく断れる自信ねえし。こういうこと考えてること自体里沙に申し訳ないし。

ほないこか、とへらへらしている春斗と、それとなく気にしとくよ、とやはりいいやつの霞に挟まれて、俺は校門を通り抜けた。

「みなさん！ ゴールデンウイークのご予定はいかが!?」

「俺たちは家族ぐるみでどつか行こうって話になつてる」

「ウワアアアアアアアアン!!!」

「こんな秒でガチ泣き出来る人おるんや」

放課後。里沙に対する書き込みが激減し、とりあえず昨日の作戦が機能していることを全員で大喜びした後、麒麟寺さんから提供された話題にそれとなく返したらガチ泣きされてしまった。この人、みんなで遊びたかったんだろうなあ。

朝様子のおかしかつた里沙は正気を取り戻したようで、「ごめんね。ちょっと変だつた」と俺に謝ってくれた。俺の耳を破壊しようとしたこと以外は気にすることでもないから、「好きだぞ」と答えてやると、めちゃくちや青ざめて震え始めたから俺が謝るハメになつた。元に戻つたか試すにしては酷なことをしてしまつたと反省している。

「ぐすっ、いいもん。ちょっとみんなで遊びたいなつて思つてただけで、ご家族同士の付き合いなら仕方ないし」

「お嬢様言葉崩れてめっちゃかわええことなつてもうりますよ」

「ね、夕弥。あの人連れて帰つてもいい?」

「霞に聞けよ」

「僕にも聞くなよ」

かわいそうに。霞にも見放されてしまつた麒麟寺さんは春斗から紅茶を受け取り、ちび、と可愛らしく一口飲むとすぐに復活して、いつものように胸を張つた。

「さて！ わたくしがゴールデンウイークを一人寂しく過ごすことが決定してしまいましたこの現状、どうにかして打破しなくてはいけないと思いますの!!」

「他に友だちいねえんすか？」

「他にということは、わたくしたちお友だちってこといいんですね。えへへ」「夕弥夕弥。本気でかわいい。ダメ？」

「だから霞に聞けつて」

「だから僕にも聞くなつて！」

「法律に聞いてみたらええんちやう？」

少し調べてみると、どうやら誘拐というものに当たるらしく、それを里沙に伝えると残念そうにしていた。まあわかる。最近心を許し始めてくれたのか、麒麟寺さん愛らしいもんな。つか心許すの早くねえか？

「みなさん。わたくしはもちろん他にもお友だちはいますが、部としての絆を深めるためにも、せめて一日一緒にいるべきだと思いますの」

『『せめて』つて言うところに懇願めいた何かを感じるな』

「こら。思つても言わないのそんなこと」

「どつか行く言うてもゴールデンウイーク全部使うわけやないやろし、いいですよ。

どつか遊びに行きましょ！」

「本当!? 嬉しい！ ですわ！」

跳ねて喜ぶ麒麟寺さんを俺たち4人は優しい目で見つめて、勢い余つてテーブルに手をぶつけて「痛い！」と叫び、里沙に治療されているところを見て「ああ、この人留年したんだった」と思い出した。

第10話 そしてGWがはじまつた

神奈川県某所にあるホテル『アルストロメリア』。そこは敷地内に様々なアミューズメントがあり、それはプールだつたりゴルフだつたりと思いつく限りの遊びがそこにあらる。

ゴールデンウイークに氷室家、織部家、井原家、岸家、そして光莉さんでアルストロメリアに訪れ、チエツクインを済ませたかと思えば父さんが全員を引き連れてやつてきたのは、いくつもの真っ白な真四角の大きい建物。中に何があるか想像もつかず、ここにくるまでに受けた説明は、『1つの建物ごとに4人で入り挑戦すること』、『リタイアせずクリアできたら、滞在費がタダになる』という二つだけ。

「父さん、なんだここ?」

「アルストロメリアは父さんが世話になつた人が経営していくてな。で、このアミューズメント……『花を捧ぐ』っていうらしいんだけど」

なんかうまくは言えないけどとりあえずつける名前を間違えている気はする。
「ぜひ最初のお客さんについてことで招待されたんだ。本来はクリアしたら夕食がタダになるんだけど、滞在費をタダにするからってことでな」

「ほーん。で、俺は光莉さんと一緒なんだろうな?」

「バカ! こういう組み分けの時はくじ引きの方が楽しいに決まつてんだろうが!」

そういうつてウキウキしながら12本の割り箸を取り出す父さんに呆れて、「恭弥かわいい」と優しく笑う母さんを見て更に呆れた。いつまでカツプル気分なんだこの人たち。両親の仲がいいと子どもは優しい性格に育つて聞いたことがあるけど、俺に対する周りの評価を見るにそんなことなさそうだからあの説は嘘だと思つている。

カツプルモードになつてゐる両親と絡むと気持ち悪いから、俺は自然にスキップしながら光莉さんへ近づき、「光莉さんも俺と一緒がいいですよね!」とイケメンスマイル。ふつ、これで光莉さんは俺に惚れたに違いない。これで惚れてくれるなら既にゴールインしてゐるだろうからそんなことはないけど、俺も着々と男を磨いてるから今日はわからないぞ???

「ん、そうね。夕弥はなんでもできるし、何があつても何とかなりそうだもの」

「これが愛の告白つてやつですか……」

「違うよ」

「簡単に否定するのはやめてくれ」

さつきまで千里さんと話していた里沙がわざわざ俺の方を見て否定してくる。いいじやん別に告白じゃなくても愛であることは多分そくなんだから。息子とか弟とかに

対するそれだとは思うけど。

……いや待て、そういうえば思い出した。確か里沙つて光莉さんの前だと俺のことが好きなフリをしないといけないんじやなかつたか？

嫌な予感がして里沙の方を見てみると、どことなく光莉さんの近くにいる俺を面白くなさそうな目で見ている。あいつの演技力半端ねえな。

「おいおい。明らかに光莉さんの方が自分より魅力的だからって腹立てるなよ」「言つちや悪いけど、私の方が若いもん」

「千里？ この子本当に言つちや悪いこと言つてるわよ。どういう教育してんの？」「僕の背中を見て育つたんだ。誇らしいよ」

「だからなのね……」

よかつた……光莉さんが子どもには優しくてよかつた……。光莉さんを挑発するようなことを父さんとか千里さんとかが言つたら再起不能にさせられるから、里沙もそんなことになつたらどうしようかと思つた。今千里さんが子どもの責任取られようと/or>してゐるけど。まあ千里さんならいいや。

千里さんが光莉さんに詰められている間に、父さんが俺のところにやつてくる。手で握つた割り箸を俺に差し出し、「引いても番号見るなよ！」と連呼するのが鬱陶しくてすぐ引いて、里沙も俺の後にすぐ引いた。なんか同じような言葉が聞こえるなつて思つ

たら父さん「引いても番号見るなよ！」つてずっと言つてる。あれの息子だつてことが漠然と不安になることがあるのはきっとああいう姿を何度も見ているからだろう。

「夕弥と一緒にいいなあ」

「今光莉さんは千里さんを殺してるところだから、別に演技しなくていいぞ」

「え？」

「え？」

「よーし！ じゃあ番号見ていいぞ！」

里沙が首を傾げた理由を聞こうとした時、やつと別の言葉を父さんが発した。まあいかと疑問をどこかへ追いやつて番号を見ると、『T r e s』。なんでスペイン語？

「あ、私『T r e s』」

「俺もだ。マジで一緒にやん」

「ほんと？ やつた」

「ハイ番号別に分かれて！ キビキビ動く！ 『U n o』がそつちで『D o s』がそつちで『T r e s』がそつち！」

「学校におるときよりやる気やん」

「当たり前だろ。学校は子どもの未来がかかつてんだぞ？」

「普通学校におるときの方がやる気のやつが言うねん、それ」

どうやら春乃さんは父さんと一緒にらしい。いち早く父さんに近づいて、楽しそうに会話を始めた。そういうことすると母さんが嫉妬するからやめてほしい。あの人父さんが女人に話しかけられるだけで嫉妬するんだから。父さんが母さん以外の人になびくわけがないのに。キッショ。

「あら、夕弥と里沙も『Tress』?」

「光莉さん! 光莉さん一緒になんですか?」

「あ、あの、さつきはすみませんでした。父は無事ですか?」

「死んだわ」

どうやら千里さんは死んだらしい。どうりでさつきから見かけないと思つた。

あと一人は誰だろうと待つていると、里沙に後ろから優しく抱き着く影が一つ。
里沙の母親であり、父さんの妹である薰さんだ。

「わ、お母さん」

「一緒みたいだね。よろしく、光莉さん。夕弥」

「よろしくお願ひします。すみませんね、カツプルと一緒にじゃ気まずいでしょうか?」

「ちなみに、私は千里を葬つて勢いづいてるわよ」

即座に頭を下げ許しを請う。危ない。そういえば光莉さん、ある日を境に俺に対してもあまり甘くなくなつたんだつた。それはそれで子どもつていうより男として見てく

れてる気がしていい気もするけど、光莉さんに殺されるようになるつてこともある。今更だけど日常的に殺してくる人つてなんなんだ？　日本は放つておいていいのか？

いい。なぜなら光莉さんは世界一可愛くて綺麗でいい人だからだ。

他是父さん、春乃さん、恭華さん、霞が『Uno』、母さん、千里さん、蓮さん、春斗が『DOS』らしい。光莉さんに殺されたはずの千里さんがいつの間にか戻ってきているのを見て、慣れって恐ろしいなと震える俺に、里沙がそっと耳打ちした。

「ごめん、夕弥」

「ん？」

「……やらなきやいけない」

やらなきやいけない？　と少し考えて、あ。と気づく。

そういえば光莉さん一緒じやん。里沙、俺のこと好きなフリしなきやじやん。しかも薰さんいるじやん。え？　つてことは里沙は自分の母親の前で、俺のことが好きなフリしなきやいけないつてこと？

「1組でもクリアできたら滞在費無料らしいからな！　みんな頑張れよ！」

誰よりもウキウキしている父さんの声が遠く聞こえたのは気のせいだろうか。

多分気のせいじやなくて、きっとこれから先訪れるであろう心労が原因だろう。娘と一緒になことが嬉しいのか、機嫌が良さそうな薰さんを先頭に白い建物へ入りながら、バ

れないようにため息を吐いた。

『ようこそお越しくださいました！ このアミューズメント花を捧ぐは、4人1組となりゲームのクリアを目指すものです！』

中に入つて聞こえてきたのは、人のような機械音声のようなちぐはぐな声。全体に響き渡るそれと、ちょうどどこの建物の辺を4等分するかのように扉が設置されている。入つてすぐの場所にあるテーブルには、ごつい機械的な腕輪が置かれていた。

『デスゲームみたい』

「ここにいるのがあんたたちじやなかつたら、私の勝ちだつたのに……」

「勝てないからとかじやなくて、殺すのに躊躇するからっていう意味で言つてます？」

恐る恐る聞くと、光莉さんは真面目な顔をして頷いた。多分この中だと俺が殺されやすいから距離をとつておこうと思う。

『まずは各々そちらにある腕輪を装着してください！ 装着いただきましたら、次の説明に参ります！』

こういうのってつけたらダメだつて漫画で学んだけど、それは漫画の話。父さんの知り合いが経営してるホテルっていうのが気になるけど、まさか犯罪まがいのことはやら

されないだろうし、多分大丈夫だろ。

腕輪を腕に通すと、ガチャッという音とともに腕輪がはまる。腕輪にはモニターがあり、そこに表示されているのは『98』という数字だった。3人の腕輪を見れば、光莉さんが『40』、里沙が『67』、薫さんが『31』。なんだろう、男らしさの数値とか？『皆様にやつていただくのは、かくれんぼ＆鬼ごっこ！』扉の先には街が広がつており、数機のドローンが飛んでおります！ そのドローンから隠れ、見つかつたら逃げる！腕輪に表示された数値は見つかりやすさとなつております！』

「うそだろ」

「ひや、100じゃないだけマシって思えば、ね？」

里沙の慰めが耳に入つてこない。もし俺が光莉さんより数値が低かつたら、見つかつた光莉さんを助けに入つて俺に引き付けるみたいなイケメンムードができたのに、これ俺が追いかけまわされるだけじゃね？ しんどい。

『高い数値が表示されてしまつた人もいることでしょう。しかしこ安心ください！ 街中にはボックスが設置されており、その中には腕輪に差し込めるカードが入つております！ その効果は様々であり、数値を下げるカードも存在します、が！ カードは差し込むまで効果がわかりませんのでお気を付けください！』

「夕弥は兄貴とそつくりだから、ドローンを引き寄せるカード引き当てそう」

「父さんと似てるシリーズで一番嬉しくないんですけど
どつちみち数値高いから引き寄せるし。」

『カードを駆使し、助け合い、30分間逃げ切ることができればクリアです!』

30分。もし低い数値が出て見つかりにくいつて場合はそれほど長くないのかもしない。ただ俺の数値は98で、もうドローンから見れば爆音流して輝いているようなものだろう。ドローンなのに「アホがきやがつた」と思うに違いない。

『あ、ちなみに4人全員ですよ! それではお楽しみください!』

「ごめん。終わつた」

「他の組に期待しよつか」

「何言つてんの」

俺の背中をバン! と叩き、光莉さんが笑う。あまりにも女神すぎる微笑みに俺は死んだ。

「始まつたら私がなんとかしてあげる。私もあんたを探すから、あんたも私を探しなさい」

「この腕輪は、結婚指輪だつたってことか……」

「違うよ」

否定されてムカついたから里沙に投げキッスをしておいた。里沙が泣いた。俺は薰

さんに怒られた。

第11話 そして争いが始まった

扉を開けた先には、ふよふよ浮いているUFOキャッチャーみたいな形したドローンが7機くらいありました。

「うそだろ」

『ハッケン！ ハッケン！』

ビカビカとドローンが発光し始め、機体から2本のアームが伸びる。先が手の形になつていてそれを俺に伸ばしてくるのと同時に走り出した。

なんだよ98つてそんなにひでえのかよ!! 見つかりやすさとかじやなくて探されてしまうなかつたんだけど！ バランス調整ミスリすぎだろクソが!!

ビービーと警報音のようなものを鳴らしてくれるのは距離がわかるからありがたい。どうやら全力で走れば直線距離なら逃げきれるほどの速さらしく、音がどんどん遠ざかっていくのがわかる。とはいえ、ずっと全力疾走できるわけじやないからどこかに隠れないといけない。

周囲を見渡して、あ、そういうえばめちゃくちゃしつかり街っぽく作られてるなと今更ながらに気づく。見た目はビル街で、気になつたのは高い位置に映し出されているモニ

タ一くらいだろうか。モニターには残り時間が映し出されていて、それぞれの見つかりやすさの数値も表示されていた。よく見れば俺のところが赤くなってるから、恐らく見つかった人は赤く表示されるんだろう。

ちら、と後ろを確認して、近くの路地裏に入る。忘れちゃいけないのが俺は見つかりやすさ98だつてこと。多分どつかに隠れたとしても、めちゃくちゃな速さで見つかるに違いない。だから俺が期待するのは、ボックス。

路地裏に入つて少し奥に入った場所でそれを見つけた。正方形の四角い箱にひまわりが刻まれているそれをすぐに開けて、中に入っているカードを取り出し腕輪に差し込んだ。

『水室夕弥様がひまわりのカードを使用されました！ 効果は「これから5分間、全ドローンに自分の位置がバレる！」更にその間ドローンは他の人には目もくれない！』街全体に響くアナウンスの直後、街のあちこちから『ハツケン!! ハツケン!!』という音が俺に向かってくるのがわかつた。は？

「俺が何したつてんだよ!!」

5分つて長すぎだろ！ まあその間は他の人が見つからないし終われないって考えたら悪い話じやないんだろうけど！

いや、ここは3人を信じよう。3人がいいカードを拾つてこの状況を打破してくれる

に違いない！ 心の中で3人に希望を託し、四方八方から現れたドローンから逃げるために近くにあつたドアを開けた。

ご丁寧にビルの内部まで作りこまれているらしく、入った場所はラウンジのようになっていた。走りながら見渡せば、そこには先ほど俺を地獄の底に落としたボックスが一つ。

「……今度こそ！」

さつきは死ぬほど悪い効果だつたが、近くに悪い効果を2つも置かないと、多分！ やけくそ気味にボックスを開けて、カードを取り出して一気に差し込むと、さつきと同じようにアナウンスが鳴り響いた。

『氷室夕弥様がエリカのカードを使用されました！ 効果は「今いる建物が5分間封鎖される！」』

ガシャン！ という音とともにすべての壁にシャッターがおりた。いや、これは当たりなんじやないか？ 俺も出られないけど、ドローンも入つてこれない。しかも5分間なら俺が追われ続ける効果が切れるまでこのままでことだろ？

そう余裕をぶつこいでいる俺の耳に届いたのは、外から聞こえてくる無数の『ハツケン！ ハツケン！』という音と警報音。見なくても無数のドローンがこのビルを取り囲んでいることがはつきりわかる。

「おかしくなるおかしくなる！　もういいだろ中に入れないんだからほつといてくれよ！　効果に忠実すぎだろお前ら機械かよ！」

機械だつたわクソが！

クソ、なんだこれ。絶対捕まることはないのにめちゃくちゃ怖い。ずっと『ハツケン！　ハツケン！』って聞こえるしビービービービーうるせえし、つかよく考えたら5分間乗り切つたとしても、見つかりやすさ98だつたらこの無数のドローンがそのまま俺のところに殺到してもおかしくない。だつたら今俺がやるべきことはここで頭がおかしくなることじやなくて、ビルの中からボックスを探し出すことだ！

階段を使って2回に上がる。オフィスをイメージしているのかいくつものパソコンと業務デスクが並んでいる。それに混じつて忌々しいボックスが存在感を放っていた。

もうこうなつたら何があつても一緒だろうとボックスを開け、カードを差し込む。事態が好転してくれと祈りを捧げると同時に働き者のアナウンスが効果を告げた。
『氷室夕弥様がゲッケイジユのカードを使用されました！　効果は「ドローンは周囲にいるドローンを攻撃する！」』

『コロス！』

『シネ！』

『ハツケン！　ハツケン！』

『ジゴクニオチロ!』

『クツウヲアジワエ!』

『ハツケン! ハツケン!』

「俺はただ楽しみにきただけなのに、なんで争いの引き金を引いてるんだ……」

頭がおかしくなるどころかもうおかしくなった。外からドローンの殺伐としたセリフが聞こえてくるし、そんな中でもまだ俺を発見しているドローンがいる。これもうR18だろ。子どもがこんな目に遭つたら泣いやう通り越して感情失うよ。

もうこれ以上俺が何かしたらひどいことになる気がするから、おとなしくしておこう。このまま捕まつたとしてもみんなわかってくれるはずだ。

願わくば、光莉さんと愛の逃避行をしたかつたなあ……。

「何あの地獄絵図……」

「清々しいくらい恭弥の血を引いてるわね」

「ど、どうにかして助けられないかな……」

夕弥が開始早々とんでもないカードを引き当てて、そのまま連続でとんでもないカードを引き当てて、作り上げられたのはビルを取り囲むドローンがお互いを攻撃し合いな

がら、中にいる夕弥を捉えようとうろついている地獄絵図。そのおかげと言つてはなんだけど、すぐにお母さんと光莉さんと合流できたのはまあ、いいことなんだとは思う。夕弥にとつては最悪だろうけど。

「助けるつていうならこの現状を打破できるカードを使うしかないわね」

「でもカードの効果はランダムだつて言つてたし……」

そう。カードを使って助けようにも、カードの効果はランダム。もしかしたら今よりもひどいことになるかもしれないし、実際夕弥もなんとかなつてくれつて祈りながらカードを使つて、今みたいにひどいことになつたんだろうし。そう思うとカードを使うのに躊躇してしまう。

のに、光莉さんは懐からカードを取り出して腕輪に差し込もうとしていた。

「ひ、光莉さん！　ストップ！　夕弥が死んじやうかもしれないんですよ!?」

「聞いたことある？　運営側が積極的に死人を出すアミューズメント」

「流石に兄貴の知り合いでもそれはないだろうけど、これ以上ひどい目に遭うのは夕弥がかわいそう」

「ほんとにひどい目に遭うと思う？」

言つて、光莉さんはカードを見せてくる。見た目はシンプルで、長方形で真っ白。両面には名前のわからない花が描かれている。

「さつきからアナウンスでわざわざ花の名前言つてたから、何か関係あると思うのよね」「ひまわりとエリカと、ゲッケイジユ？ だっけ」

「ひまわりの花言葉は『私はあなただけを見つめる』、エリカは『孤独』、ゲッケイジユは『裏切り』。他にも色々あるんだけど、実際の効果と一致する意味としてはこれくらいね」

「……カードに描かれてる花の花言葉と効果が関係してることですか？」

多分ね、と頷く光莉さん。そう考えれば、何かおかしいなと思つていたアミューズメントの名前である『花を捧ぐ』にも意味が出てくる。私もアナウンスで花の名前を聞いた時なんだろうなとは思つたけど、花言葉と効果が関係してることもしなかつた。

「光莉さん、花言葉知つてるんですね」

「光莉さんは可愛くて口マンツクだから」

「む、昔アルバイトしてた時に勉強しなきやいけなかつたから知つてるだけよ」

夕弥がいるビルの周りは殺伐としているのに、私たちの雰囲気は和やかだつた。夕弥もここにいさせてあげたかった。ビルに引きこもつてゐるせいで光莉さんの可愛いところを見逃しちやつたんだから。

カードに描かれている花の花言葉と効果が関係してゐるなら、光莉さんの持つてゐる

カードに描かれている花はなんなんだろう。さつき差し込もうとしてたからひどいものじやないんだろうけど、せつかくだから気になつてしまふ。

「光莉さんの持つてるカードの花つてなんなんですか？」

『屁』に『糞』に『葛』つて書いてヘクソカズラ。昔暇だつた時、恭弥とひどい花を探そうつて言つて知つたのよ』

「花言葉は？」

『人嫌い』。だから……』

光莉さんがカードを腕輪に差し込むと、アナウンスが流れる。

『朝日光莉様がヘクソカズラのカードを使用されました！ 効果は「これより5分間、ドローンは参加者から逃げ回る！」』

『ウワア、ニンゲンダ！』

『キモイ！』

『コロス！』

アナウンスが流れてすぐに、ドローンが夕弥のいるビルから離れていく。夕弥が使つたカードの効果は残つてゐみたいで、ドローン同士が争いながら。でも、夕弥を追い続けるつていう効果はなくなつたみたいだから、上書きされる効果とそうちやない効果があるのかな？

「さて、どうせしばらく夕弥はあのビルから出られないでしょうし、その間カード探し
しようか」

「あーあ。夕弥また光莉さんに絡んでくるよ。光莉さんが助けてくれたんですね！ こ
れが愛つてやつですか、結婚しましょう！ つて」

「女に助けられてるような男は願い下げよ」

「だから行き遅れてるんですね」

「よかつたわね里沙。あんたが可愛くて」

「どうやら私は可愛くなかったら今の一言で殺されていたらしい。口には気を付けよ
うと思う。

第12話 そして死人が出た

「マジで流石です光莉さん！ 大好きです！ 今すぐ結婚するっていうのはどうでしょう！」

「あんたがもつと大きくなつたらねー」

「光莉さんとのことを想像したら、いつでも大きくなれます！」

光莉さんにぶつ飛ばされた。理由は流石にわかる。みんなの前だと恥ずかしいからってことだよな？

あの後。光莉さんに助けられた俺はビルの閉鎖が解除された瞬間にビルを飛び出し、女神である光莉さんと合流した。あ、里沙と薰さんもいた。

3人は俺がビルに閉じ込められている間にカードを集めていたらしく、『カードに描かれている花の花言葉がそのまま効果になる』という光莉さんの素晴らしい推理のもと有効活用し、見事30分逃げ切った。俺はほとんどおどりに使われた。

「つと。お疲れ様、夕弥」

「あ、すみません薰さん」

ぶつ飛ばされた俺を受け止めて、柔らかく笑う薰さん。父さんの妹なのに綺麗で優し

くていい人だなあと会う度に感心する。薰さんが妹だつていうのが父さんの妄言だつて言われても納得するくらいには信じられない。でも薰さんも父さんのこと兄貴つて呼んでるし、本当なんだろう。

「……あの、もう大丈夫なんで離してもらつていいですよ」

「んー？ せつかく可愛い甥と会つたんだから、もうちよつとお姉さんにサービスしてくれてもいいでしょ？」

そのままぎゅつと俺を後ろから抱きしめ、ふふ、と笑う薰さんにめちゃくちゃ照れ臭くなつて里沙に目で助けを求めるも、「もう、お母さんつたら」と微笑ましく見つめてくるのみ。お前、俺のこと好きなフリするんだつたら自分の母親に対しても嫉妬しろよ！いやいや、母親に嫉妬つて。甥を可愛がるのは普通のことでしょ？ ジゃなくて俺とお前がいとこ同士だつてこと忘れてんのか！ お前に限つてはその論理破綻してんだよ！

「そういえば兄貴たちどこ行つたんだろうね」

「スマホ見たら、『なんかお前ら遅すぎるから適当に遊んどくわ。ちなみに、クリアできなくて拗ねてるわけじやないから勘違いしないでよね！』つて恭弥からきてたわ」「うわ、キツ」

「里沙。それ父さんに直接言わないでやつてくれよ」

あの人人大体の悪口は効かないのに、母さんか薫さんか里沙からの悪口はめちゃくちゃ効くから。里沙から敬語使われ始めた時もすげえへこんでたし。「俺、もう家族じやないつてことなのかな……」つてへこんで母さんに慰められてたし。あのクソジジイ、母さんに慰めてもらいたいからへこんでるフリしてただけだろ。

「ふーん。じゃあ私たちも私たちで遊んじゃおつか」

「夕弥は大丈夫？ 春斗とか霞とかと一緒にいるんじゃない？」

「光莉さんがいればあとは誰でもいいですよ」

「……私は？」

「里沙はどうせ誰と一緒にでもついてくんだろ」

拗ねた様子で俺を睨みつけてくる里沙に返すと、光莉さんと薫さんがため息を吐いた。あの、光莉さんはともかく薫さんが今ため息吐くとぞくつとするからやめてくれません？

「夕弥。そういうのはちゃんと最初に言わなきや愛想つかされちゃうよ？」

「もつと言ふと恭弥みたいになるわよ」

「ごめん里沙。ずっと一緒にいてくれ」

「極端すぎない？ いや……いいけど」

いやだけどって言おうとして、光莉さんの前だから急ハンドル切ったな。いつもなら

キモいとも言つてくるのに、今はもじもじしながら視線を逸らして頬を染める強烈コンボ付きだ。乙女の反応として100点過ぎて、将来詐欺師にならないか心配になつてくる。薫さんも「あれ？」つて首傾げてるし。あの、勘違いしないでよねっ！ 里沙は俺のこと好きじゃないんだからっ！

俺の気持ち悪さが伝わったのか、それとも俺から父さんと同じ空気を感じ取つたのか、薫さんが「夕弥、やめて」と言つてきた。俺目に見えるところでは何もしてないのに流石だぜ。

「さ、どこに行く？」

「光莉さん。ここ式場もあるみたいですよ」

「私、仲良くしてた友だちがみんな先を越していく姿見てるから、式場トラウマなのよね」

「俺がそのトラウマ、幸せに塗り替えてあげますよ」

「夕弥。そんな妄言はいいから遊ぼ」

「薫さん。おたくの娘さんの教育はどうなつてるんですか？」

「ちゃんと育つてるとと思うよ」

どうやら薫さんも俺のさつきの発言を妄言と捉えたらしい。俺は泣いた。

まあ流石にもうちよつと段階を踏まないと結婚は早いか。そう納得して、ここに来た

時にダウンロードした地図を見る。ひよっこり顔を出して地図を覗き込んでくる薫さんと一緒に……つかまだくつついてたのかこの人。もはや違和感なさすぎて忘れてたわ。

「ほんとに色々あるね」

「あ、私にも見せて」

「じゃあ私も」

「光莉さんは私の隣にきてください。うつかり夕弥が妊娠させちゃうかもしれないんで

「これがちゃんと育ってる娘さんの言うことですか？」

「うん」

どうやら薫さんも俺がうつかり光莉さんを妊娠させると思つてているらしい。俺は再び泣いた。

全員に見えるようスマホを横に向けて、敷地内の地図を見る。敷地内にはプールやゴルフ場、ボウリング場に乗馬もあるようで、動物とのふれあいコーナーもあるらしい。里沙が目を輝かせてふれあいコーナーのアイコンをタップすると、『愛しいベイビーちゃんたちと触れられる憩いの場』というタイトルとともに、犬や猫、うさぎの写真が表示された。ちよくちよく思うけどクセ強いなこ。

「里沙。ここに行きたいの?」

「うん! うち、お父さんが襲われるからペツト飼えないし」

「あ、ちゃんと育てられないでしょ! とかそういうんじやねえんだ」

「飼う前からヒエラルキーでペツトの下に行く人間つているのね」

「でも本人がペツトみたいなものだから」

薰さんのとんでもない発言は聞かないことにした。なぜなら里沙が気まずそうな顔をしていたから。多分、その、まあなんだ。そういうことだろう。

薰さんが「じゃあ手つなごつか」と言つて俺の手を握り、「じゃあ私も」と言つて光莉さんが里沙の手を握り、存分に子ども扱いされながら向かつたふれあいコーナーの入り口で。

「ええもん。期待するだけアホやつてことやん」

「あの、春乃さん。気にしないでください。駄が行き届いていただけですから」

三角座りしてしょげている春乃さんと、春乃さんを慰めている霞がいた。先生でもあり友だちの母親でもある春乃さんのあんな姿を見るのは気まずいどころの騒ぎじやないから目を逸らしたくなるが、霞に気づかれて「助けてくれ」とジエスチャーで伝えら

れる。

「……どうしたんだ？」

「聞いてくれ。恭弥さんが始まつた瞬間秒で捕まつて、荒んだ心を癒そうとここにきたら、春乃さんが動物みんなをうつかり服従させちゃつたんだ」

仕方なく話しかけるとなんとも可哀そうな出来事を聞かされてしまつた。なんだ？ 父さんの年代は動物に対してもかしら特性持つてないと気が済まないのか？ そういえば父さんから「春乃を前にした動物は服従するんだぞ。特に犬」って聞かされてたけど、マジだとは思わなかつた。

「あのねえ春乃。あんたいつともわんちゃん服従させるんだから、やめておきなさいつて言つてるでしょ？」

「だつて！ なんかいけるかなつて思つてん！ せやのに今日こそはつて思つて入つてみたら一齊に服従するし、恭弥くんと恭華が入つたら一齊に懐かれるし！」

「あいつらは感性が獸だから仲間だと思われてるのよ」

「そつちのが嬉しいyan……あとわんちゃんつて言うのかわええな……」

「仮にも慰めてる相手を煽つてんじやないわよ」

それは光莉さんが可愛いから仕方ない。春乃さんは悪くない。

にしてもそうか。父さんと恭華さんがいなになつて思つたらまた懐かれてるのか。

あの双子は警戒心抜群の野良猫にも一瞬で懐かれるし、ふれあいコーナーに行こうものなら一瞬で動物に埋め尽くされる。多分中に入つたらもふもふの山が二つ出来上がるに違いないことだろう。

「私のことはほつといてええから、行つてきてええよ。霞もごめんな」

「……悪い夕弥。恭弥さんと恭華さん連れてきてくれ。これじやあまりにも春乃さんがかわいそうだ」

「任せろ」

こつちには薰さんがいるんだ。きつと可愛い妹の頬みならすぐに聞いてくれるだろう。まつたく、春乃さんがこんなにも可哀そうだつてのにあの2人は何やつてんだ?

憤りながらふれあいコーナーと書かれた扉を開けて中に入る。様々な動物がいるようだがやはり人気なのは犬、猫、うさぎといったペットとして身近な動物。動物ごとに柵で区切られており、一つ一つ見て回つて探すのは苦労しそうだなと思つた矢先、もふもふの山が二つ見えた。

「多分あそこだね」

「よかつたな里沙。大量に触れ合えるぞ」

「ああいうのじやないんだけど……」

よく見ればもふもふの山の一番下には父さんと恭華さんがいて、「ヘルプ! ヘルプ

！」と叫んでいる。ただあまりにも一体化しすぎて「ねえみて！ ヘルプ！ つて鳴いてるわんちゃんいるよ！」と子どもが喜ぶ始末だ。いや、そうはならねえだろ。逃げ出さないように二重になつている扉を開けて、もふもふの山に近づく。春乃さんなら既に服従させているであろう距離まで近づくと、山の下にいるアホどもが俺たちを見た。

「お、どうだつた？ クリアできたか？」

「その状態でよく普通に会話しようと思つたな。クリアしたよ」

「やるな、流石私の甥と妹と姪と親友。恭弥はすぐに捕まつたつていうのに」

「ああ！ 最初に100が出たらもう終わりだろうが！ 俺は悪くねえよ調整ミスだ調整ミス！」

「俺98だつたぞ」

「俺の息子ともあろうものが2の違いもわかんねえのか？ 100円のものを98円で

買えんのか？ 買えねえだらうが！」

「夕弥。夕弥はこんなみつともない大人にならないでね」

里沙の一言が父さんに刺さり、父さんは死んだ。

第13話 そしてゲームが始まつた

「お、夕弥に里沙やん！　光莉さんに薫さんも！」

「春斗」

里沙の一言によつて撃沈した父さんと、双子だからか同じくらいダメージを受けた恭華さんを引きずり出して外に放り出してから、改めてもふもふを堪能した後。昼食をとりにフードコートへ入ると、ちょうど入り口付近に春斗がいて手を振りながら近づいてくる。

「どうやつた？　クリアした？」

「もちろん。光莉さんのおかげでな」

「全員で頑張つたんだから、私だけ上げるのやめなさい」

「あつ……」

光莉さんに優しくチヨップされ、触れてもらつた喜びに思わず声を漏らすと里沙から「キモ」と言われ、すかさず慰めるように薫さんが撫でてくれた。いつも思うけど、薫さん俺に対して甘すぎないか？　純情すぎる男の子なら惚れるぞ。叔母だけど。「千里さんと日葵さんが席とつといてくれてるから、先そつち行く？」

「ちょーっと待つたア！」

俺たちを連れて席に行こうとした春斗の背後から現れ、俺たちの間に割つて入つてきたのは、高校教師のクセに派手な金髪でピアスも空けているチャラついた男性、霞の父であり恭華さんの旦那である井原蓮さん。蓮さんは「お、かわいこちゃんにかわいこちゃんの体毛ついてるじやん！」と里沙の肩から犬の毛を払つて、人懐っこい笑みを浮かべた。

「せつかくだし、ゲームしようぜ！」

「義兄さん。声大きい」

「……」

「義兄さん。声聞こえない」

両極端で素直でまつすぐ。どういう育ち方をしたらこうなるんだつていうくらい蓮さんはまつすぐだ。この人を見てたら教師だつてことを忘れるし、実際学校でも教師をやつている時間より生徒と遊んでいる時間が長い。あと恭華さんは薫さんの姉で、だから蓮さんことを義兄さんつて呼ぶのはそりやそうなんだろうけど、こんな人が義兄さんつて呼ばれてるのはいまだに違和感しかない。

「こんぐらいでいい？」

「よし」

やつと声のボリューム調整が終わつたのか、薰さんがオーケーマークを作ると蓮さんは改めて俺たちに向き直つた。

「このフードコートには和洋中なんでも揃つてて、デザートもある！ こんなにいっぱいあんならそれぞれの大好物もあるつしょ？ だつたら、お互のこと理解してるのでテストもできるつてわけ！」

「相手が一番食べたいものを推測して、それをテーブルまで持つていくつてことですか？」

「夕弥正解！ それぞれの相手は、そうだなあ。野郎と女の子で1対1つてのはどう？？」

「当てた場合は？」

「相手に好きな言葉言つてもらうつてのは？」

「よし、光莉さん。俺とやりましょう」

「まず日葵と千里がいいつて言わないと」

そもそもとかと性欲をぐつと抑え、「そんじやご案内！」と元気よく歩く蓮さんの後ろについていく。しかしマジでナイスだな蓮さん。蓮さんも俺が光莉さんのこと好きだつて知つてるから、さりげなくサポートしてくれているんだろう。蓮さんは父さん経由で俺と里沙が付き合つてるのは勘違いだつて知つてるだろうし。

少し歩くと、母さんと千里さんの姿が見えてきた。2人もこっちに気づいたようで、

母さんは年甲斐もなく手をぶんぶん振つて、千里さんも母さんに合わせてぶんぶん手を振つている。

「お父さん！ 恥ずかしいからやめて！」

「娘を大事に想う僕の心の何が恥ずかしいの？ ショックだな、まさか僕の愛情が恥ずかしいって思われるなんて、いやでも大丈夫だよ。里沙がそういう年頃だつて理解してるし、里沙はいい子だから僕の愛情を恥ずかしいなんて思つてないつて。ただそうはつきり恥ずかしいって言わると僕も傷つくからちょっとやめてほしいかな」

「娘をいじめるな」

べらべら喋り始めた千里さんに薫さんのビンタが飛び、千里さんの口撃は乾いた音にかき消された。そこまでしなくともと思わないこともないけど、千里さんが喋り始めた瞬間に光莉さんが袖をまくつて臨戦態勢だつたから、多分薫さんは千里さんを守つたんだろう。もちろん光莉さんから殺されないように。

「夕弥、どう？ ここ楽しい？」

「光莉さんと一緒にいて楽しくないことありえないだろ」

「ふふ、そつか。光莉と一緒にいるんだもんね」

「日葵！ 今私と結婚してくれるつて言つた!?」

「言つてないよー」

「ま、恭弥を殺せば目を覚ましてくれるからいいわ」

「俺と母さんの前でさらつと父さんの殺害予告しないでくれます？」

光莉さんは母さんの親友であり、そういう意味で好きなんじやないかと疑つてしまふほどの母さん過激派だ。これでも学生の頃よりはマシらしく、父さん曰く学生の頃は毎日のように母さんに欲情してたらしい。そういうところも素敵だ。

ちなみに父さんも母さんに欲情していたらしく、それは素直にキモいと感じた。マジで信じらんねえよな。いくら好きだとはいえ毎日欲情するなんて猿かよ。人類と名乗るのに必要最低限な知能が備わつてねえんじやねえの？

俺が心の中で父さんを罵倒している間に、蓮さんが母さんと千里さんに説明し、2人の承諾を得たところでそれぞれの相手を決めるフエーズに入る。もちろん俺の相手は光莉さんに決まっている。光莉さんも俺の方を見ずに母さんの方ばつか見てるし。あの、男と女で一組ですかね？ 少しは俺のこと見てくれてもいいんじゃないですか？

まあ、この場は蓮さんが仕切ってくれるんだ。当然のように俺と光莉さんをペアにしてくれるだろう。期待を込めて蓮さんに視線を送ると、蓮さんからウインクが返つてきた。

「じゃあここは女性陣に選んでもらおうぜ！ 青春のドキドキって感じがしてたまんねえっしょ！ 里沙ちゃん、日葵ちゃん、薰ちゃん、光莉ちゃんの順で頼んます！」

なるほど、ここで光莉さんから俺に対する愛を再確認させてくれるということですか。やつぱり蓮さんは素晴らしい。それに光莉さんを最後にすることで俺を余らせるようにするサポートのおまけつき。全員俺が光莉さんのこと好きって知ってるから、きっと俺を選ばない。

「……えっと、じゃあ夕弥で」

「ちよつとこつちこい」

里沙の手を引いてその場から離れ、顔を寄せるときまずそうに里沙が目を逸らす。

「何してんだ、テメエ」

「ごめん……！ でもだつて光莉さんの前だから」

「なんかこう、あんだろ。俺を選ぼうとするけど恥ずかしくて無理！ みたいな演技」

「だ、だつて流石にそれはキモくてできなかつたんだもん」

「もんとか言つて可愛く言つてつけど、すげえ暴言吐いてるぞお前。俺を傷つけて楽しいのか？」

「そんなに言わなくともいいじやん。夕弥を選びたかったのはほんとなんだから」

「えつ」

「こいつ、まさか俺のこと本気で……？」

「光莉さんとペアになつたら死ぬほど最低なセクハラしそうだつたし」

違つた。俺に対する信頼がえげつないほど低いだけだった。そこまで言われたら俺も納得するしかない。ここで食い下がつたらとんでもなく情けない男になることは目に見えていた。

なんかごめんな? と謝つて2人でテーブルに戻り、ペア決めが再開する。母さんが選んだのは春斗で、理由は「恭弥が嫉妬しなさそうだから」らしい。本当に俺にゲボを吐かせるのがうまいな、この両親は。

「じゃあ私は、せつかくだしお父さんじやなくて義兄さんにしようかな」

「僕は娘の前だと『お父さん』って呼んでくれる妻にこれ以上ない悦びを感じるんだ」

「なんていきなりクソキショイ発言しだしたんやこの人」

「お父さんはこの年になつてまでお母さんが照れてる姿を見たい恥ずかしい人なんです」

「お目当ての照れてる姿は見られてないみたいよ」

薰さんはゴミを見るような目で千里さんを見ていた。相手が相手ならありがとうございますと言つてしまいそうなほど冷たい視線に、千里さんが「ありがとう」と伝えている姿は素直にキショカつた。父親のひどい言葉を聞かせないよう咄嗟に里沙の耳を塞いでしまい、びっくりしたのか里沙が「きやつ!」と小さく声を漏らした瞬間、千里さんがぐりんと顔をこっちに向けてきたのは素直に怖かつた。バケモンだよこの人。

「なら私は千里ね。別に今更千里に言わせたい言葉なんてないんだけど」「僕はあるよ」

「なんやろ、今までの言動聞いてたらめちゃくちやキシヨいセリフに聞こえてくるんやけど」

「流石に薫さんの前だから『あなたの赤ちゃん産ませてほしいの』とかは言わないだろうけどなあ」

「日葵さん。夕弥早めに院入れた方がええんぢやいます？ 頭に少年がつく方の」

「え？ 夕弥今おかしなこと言つた？」

「ダメだよ春斗。日葵さんはおじさんのせいで狂つてるんだから」

「お前ら俺たち家族を丸ごとバカにしてんじやねえよ」

「発端はあんたでしょ」

家族を庇つたつもりが光莉さんに注意されてしまつた。おかしい。今『決まつた！』つて思つたのにな……。もしかして俺たち家族はおかしいのか？ 父さんがおかしいのは間違いないとして、俺は父さんの背中を見て反面教師にしたからまともなはずなのに。さつきだつて俺が光莉さんに言つてもらおうとしていたセリフを言つただけなのに。おかしいよこいつら。俺をいじめて楽しんでるんだ。光莉さんに言つてやる！ あ、光莉さんに注意されたんだつた。じやあおかしいの俺だわ。

「ここのにあるものはそこのQRコード読み込めば出てくるから、それぞれ一番食べたいものを決めたら女の子は女の子同士で、野郎は野郎同士で共有すること！ これで不正はないっしょ！」

「やるからには勝たないとな。母さん、里沙の一番食べたいもの教えてくれたら、今度俺が家を出て一ヶ月父さんと母さんを一人きりにすることを約束する」

「家族みんなで一緒にいたいからだめ」

「里沙。俺を殺してくれ」

「そうやって人は成長していくんだよ」

あまりのみじめさに里沙も不憫に思つたのか、優しさで包み込んでくれた。ありがとう

第14話 そして解を導いた

「今考えたら、俺曰葵さんに言わせたいセリフとかないんやけど」

「俺も里沙に言わせたいセリフないな……」

「あ、そうなんだ。僕は朝日さんの自尊心を粉々にしようと思ってたんだけど」

「恐ろしいにもほどがあんだろ」

先攻、男。メニューを決めた俺たちは席を立ち、ぶらぶらと店を眺めていた。スマホでメニューを見て決めてから来てもよかつたが、実際に目で見ると違うかもしれないし。あとなんか、目の前で当てようと必死になつてメニューとにらめっこするのが普通に恥ずかしかつたのもある。

「んー、じゃあさ。男はもし当てくれたとしたら『大好き』って言つてもらうことにしね?」「じゃあ僕は朝日さんからで」

「俺は里沙からで」

「俺は曰葵さんからで」

「俺は薰ちゃんから!」

間違いなく死人が出る。それにそれつて光莉さんの目の前で里沙に「俺に向かつて大

好きって言え』って言わなきやいけないってことだろ？ 終わってんだろ。その後一日里沙の顔も光莉さんの顔も見れる気しねえしその場に母さんもいるから四面楚歌どころの騒ぎじやなくなる。

「まあさすがにやめときません？」

「もう送つた！ すまん！」

「俺絶対当てへんようにせなあかんやん……」

蓮さんの独断により春斗の顔色が変わる。春斗の相手は母さんだから、もし『大好き』なんて言われようもんなら父さんと光莉さんに殺される。……面白そうだから母さんが好きなものを「あれ嫌いって言つてたぜ」って嘘教えようかな。

その点で言えば俺は安心だ。里沙の好きなものならわかるし、それを持つていかなければ大好きって言われる心配もない。適当にコッペパンとか持つて行きやいいだろ。

「夕弥？」

コッペパンを買おうと店へ行こうとした俺の肩に手を置いたのは、にこにこ笑顔を浮かべている千里さん。何か粗相をしたかと首を傾げるが、何も心当たりはない。

「君は里沙から大好きって言つてもらいたくないの？」

「……」

「あんなに可愛くていい子で優しい女の子から大好きって言つてもらえるなんて、男か

らしたら勲章ものだと思わない?」

なるほど。俺が里沙の好物を当てられるにも関わらず、コッペパンを買おうとしてたから怒ってるのか。世の中には娘に手を出すやつはぶつ殺すとかいう物騒な父親もいるけど、千里さんは別べクトルでめんどくさい父親だつたらしい。

「いや、そりやそうですけど」

「里沙に色目つかってんのか!!」

「どうしてほしいんだよあんた」

何? 里沙から大好きって言つてもらいたくないみたいのはムカつくけど、それはそれとして色目使われるのもムカつくってか? クソめんどくせえなこの人。薰さん結婚相手間違えたんじやねえか? 今のところ大正解なのつて里沙が生まれたことくらいだろ。

ただ俺は理解のある男。娘を持つていてる父親なんてこんなものだと思つていて。父さんも「もし娘が生まれていたら俺は化け物になつていた」つて言つてたくらいだし。もうとつくに化け物だけど。

「まあ冗談だけどね。夕弥は朝日さんのことが好きなんですよ? だつたら里沙から大好きって言われるわけにはいかないよね」

「千里さんつていきなり理解のある大人みたいな言動しますけど、多分さつき言つてた

ことも本心だろうから一番信用ならないんですよ」

「そういうことを正面切つていってくるのは流石恭弥の息子つて感じだね。興奮してきました」

「できれば二度と俺に話しかけないでもらえますか?」

父さんと千里さんはかなり仲がいい。恥ずかしげもなく親友だつてお互い言うくらいだし、一ヶ月に数回は時間を見つけて遊ぶくらいには。もう一緒に住めばいいだろつて思うけど、その場合里沙も一緒に家に住むことになるからそれは流石に……何が問題なんだ? 別に妹みたいなもんだし、何の問題もないか。

「でも、コッペパンはやめてあげて。夕弥なら好きだけど一番食べたいかつて言われるとういうじゃないもの、持つていけるでしょ?」

「そんな以心伝心みたいなマネできると思います?」

「恭弥の息子と僕の娘なんだから、できるでしょ」

「キッショ」

素直な感想を口にすると「根絶やしにしてやろうか、クソガキ」と凄まれてしまつたので走つて逃げた。

「にしても、よくチョコフォンデュなんてものをお昼に食べようなんて思えるわね」

「あはは……その、好きっていうのもあるんですけど、自分でやつてこなきやいけないから夕弥ならめんどくさがるだろうなって思いまして」

その考えは正しかつたんだと小さくガツツポーズ。当てられて何か言わされるのが嫌だつたからそうしたんだけど、蓮さんから『男が当てたら女の子には『大好き』つて言つてもらいます!!』つて連絡がきたときは心臓が止まるかと思つた。本当に当てられないようにしてよかつた。

あとまあ、本当にチョコフォンデュみたいな楽しいものが好きつていうのもある。あとで個人的にやりにいきたい。

「でも、蓮のやつも先に言つてくれたらよかつたのにね。そしたら里沙は当ててもらえるようにしたでしょうに」

「ひ、光莉さん！」

え? と首を傾げる光莉さん。乙女度が高いおばさんと察しがいいお母さんはすぐに光莉さんが言つたことの意味に気が付いて、私にとつては嫌な笑みを浮かべている。

「へー、そうだつたんだ。お母さんにも一言くらい言つてくれたらよかつたのに」「里沙ちゃんが夕弥をねー! ふふ、里沙ちゃんがお嫁さんになつてくれるなら安心だなあ」

「あら、まだ言つてなかつたの？」

「だつてその、恥ずかしいですし」

咄嗟に言い訳するとひとまず納得してくれたようで、「そ、ごめんなさい」と謝罪してくれた。危ない。そうか、そうだよね。光莉さんに言つてゐるなら別におばさんとお母さんには言つてもおかしくない。危なかつた。バレるところだつた。

「あ、それじやあ夕弥が何を持つてきたとしても正解だつてことにする？」

「そ、それはダメです！ なんかざるつていうか」

「里沙。恋にズルもなにもないんだよ」

「閃いた！」

「日葵ねーさんを押し倒して手籠めにしようとするのはやめてね、光莉さん」

『恋にズルもなにもない』を捻じ曲げて解釈した光莉さんはしかし、お母さんに注意されてしゅんと頃垂れる。光莉さん、いい人で面白くて可愛くて素敵な人だつていうのはわかるんだけど、どうしてもこういうところが目立つて見えててしまう。私とか夕弥とか、子どもと一緒にいるときは比較的まともなのに、大人で集まるとどうしてこうなつちゃうんだろう。

「あ、きたみたいだよ！ 夕弥だけだけど……何も持つてない？」

おばさんが見てゐる方に目を向けると、確かに夕弥だけがこっちに向かつて歩いてき

ていた。その手には何も持つていなくて、番号札みたいなのもないから何かを頼んできたっていうわけでもなさそう。

もしかして、「え、俺を食べたいんじやねえの?」って言つて大幅に外しに来たのかもしれない。何か食べ物を選んだら当たる可能性が少しでもあるから。それなら流石にお母さんたちも「正解」だつて言えないだろうし、もしそうだつたとしたら夕弥は超ファインプレーだ。

「夕弥、どうしたの?」

声の届く距離まで近づいてきた夕弥に声をかけると、夕弥は私と目を合わせてどこかへ向かつて指をさす。

「チョコフオンデュあつたからやろうと思つたんだけど、里沙は自分でやりたいかと思つてな。行くか?」

「……」

「ふふ。いつてらつしやい! 里沙ちゃん!」

「恭弥の息子であり恭弥の息子ではないわね」

「よかつた……段々氷室家の血が薄まつてゐみたいで」

本当に、本当にちよつとだけきゅんとした。

ふつ、俺の作戦は完璧だ。隣を歩く里沙を横目で見て、勝ち誇った笑みを浮かべる。

メニューを選ぶ中で考えたのは、外しに行つたとしても安全じやないってことだ。里沙も外してほしくて一番食べたいもの以外を選んでるかもしれないし、かといってルール的には好きなものを選ばなきやいけないから、他の人から見て「あれ、そんなの好きだつたつけ?」って違和感を持たれないようなものを選ばなきやいけない。だとすると、当ててしまふ可能性はぐんと跳ね上がる。

それならいいつそ、当ててしまつてもいいから里沙を席から遠ざけさせて、もし当たつていたとしても「二人の時に言つてもらいましたよ」って言つてお茶を濁すのが一番いいと導き出した。俺が天才すぎて光莉さんが惚れてくれる気配までしている。

「春斗のためにも、こんなことやつてるつてのは父さんに知られないようにしないとな」「おじさんが知つたら、たとえ春斗が正解してなくともおばさんとペアを組んだつていう事実だけで殺しにかかるべきだしね」

春斗は一瞬「まあゲームやし、せつかくやから勝ちに行こか」って言つて父さんに母さんの好きなものを聞こうとズルをしようとした瞬間、「あつぶな! 死ぬとこやつた!」ってスマホを投げてたし。その後「なんとしてでも負けなあかん」って決意を固めてたし。本当に危ないところだった。あいつこのゲームで勝つと光莉さんも待つてる

からな。

「あ、そういえば夕弥」

「なんだ？」

「私が夕弥のこと好きってこと、おばさんとお母さんにバレちゃつた」

「何してくれてんの？」

「ひ、光莉さんだから！　ばらしたの！」

「薫さんはまだしも、母さんポンコツなんだぞ……？　瞬く間に広まっていく未来しか見えねえよ……」

あと多分俺に悟られまいと様子おかしくなるし。もしかして俺たち取返しのつかないことしてねえか？

「そう考えたらこうやつてわざわざ二人で席を立つてのつてかなりマズいことなんじゃねえか？」

「ちよ、チヨコフォンデュやりにいつてるだけだから！　そ、それにその、ほら。二人きりなら、みんなに見られてないなら恥ずかしくないし」

「なにが？」

里沙が一步俺に近づいて、背伸びして耳元でぼそつと囁いた。

「大好き」

言つてすぐに少し離れて、顔を赤くしてもじもじしながら「ちょ、チヨコフォンデュ
がね？」と付け足す里沙に、一言。

「……いや、席から離れてんだから言つたことに対するやよかつただろ」

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……めん」
「……うん」

第15話 そして裸で付き合つた

「日葵と風呂に入ることを想像したらめちゃくちや勃起したわ」「息子と風呂に入りながら言うセリフか?」

アルストロメリア、大浴場。家族風呂があるみたいだけど、父さんがこんな感じだから却下された。あと俺も光莉さんと入るつてなるとこんな感じになるんだろうから自らやめておいた。光莉さんと二人きりなら全然問題ないのに、他有象無象どもが邪魔すぎて話にならない。

「日葵はすごいんだぞ? 特にあの」

息子の目の前で母親のすごいところを語ろうとした父さんの頭を掴み、湯船に叩きつけてその場から離れる。「せつかくだから久しぶりに息子と入りたいわん! ヘフヘフヘフ」とクソ汚い犬のフリをしながらの懇願があまりにも見てられなかつたから一緒に入つてやつたけど、もう息子としての義務は十分に果たしただろう。ていうかあんな姿を見せられてまだ息子でいてやつていることに感謝してほしい。

あんな化け物は放つておいて、春斗と霞を探す。千里さんは「子どもは子ども同士の方がいいじゃんね!」と流石の気遣いを見せた蓮さんに連れていかれたから、あの二人

は一緒にいるはずだ。どうせならあの化け物から俺を救い出してほしかつたのに、薄情すぎないか？

小さい頃から一緒にいた親友たちの薄情さに憤りつつ大浴場をふらふらしていると、二人の姿を見つけた。何やら莊厳な扉の前で立ち止まって何かを話している……待て、なんで大浴場に莊厳な扉があるんだ？

「何してんだ？」

「お、バケモンから逃げてきたん？」

「春斗。いくら事実だからって友だちの親に対してもバケモンはないだろう」

どうやら春斗と霞からしても父さんは化け物に映っていたらしい。安心した。俺が間違っているわけじやなかつたんだ。

俺の父さんが化け物だということを改めて認識したところで、二人は俺から扉がよく見えるように移動する。その扉に書かれていたのは、『イケない混浴』という文字。説明も何もなく、それだけが書かれていた。

「なんだこれ」

「父さんが言うには、この扉の先に水着があつて、それを着ると混浴できるらしい」

「屈強なオカマさんが見張ってるから悪いこともできんようになつてる言うてたわ」「屈強なオカマに見張られてる混浴……？」

ちゃんと施設だからそういうことはないと思いつつも、少し恐怖を感じる。どうせ混浴に行けばチャラい男が数少ない女の子を囮んでるだろうし、女の子がいなければ今か今かと獲物を待ち受けているクソ汚い男がいるだけだ。

「もしかして入ろうとしてたのか？」

「やー、ちょっと気になつてもうてな」

「なにが」

「考えてみろよ。多分こういうところには入らないだろうけど、もし里沙がここに入つてたとしたら、すぐに悪い男の餌食になる」

「……!!」

「そうか、なんで想像できなかつたんだ。確かに、その可能性はある。

莊厳な扉に手をかけて、二人の方へ振り向いた。ふつ、どいつもこいつも男の目をしてやがるぜ。

「光莉さんが俺に会いたくて入つてる可能性が、ここにはある!!」

「話聞いてつた？」

「夕弥にあまり酷なことを求めるなよ」

なぜか呆れ気味な二人の声を背に、近くにある水着をひつつかんで一秒で着替え、『いけないコね』と書かれている、普段なら触れたくないような莊厳な扉を開けた。

そこに広がっていたのは、死体の山だった。正確には息はあるけど、白目をむいた海パン一丁の男たちが山になつてゐるその光景は死体の山と言うほかない。

その山を作り上げたであろう人物は、俺たちに気が付くと血にまみれた手を親し気に振つて出迎えてくれた。

「なーに？ こんなところに入つてきて、いつも私に好き好きつて言うけど、他の女の子のこと気になつちやつた？」

「光莉さん！ やつぱり俺に会いに来ててくれたんですね！ つか大丈夫ですかなんですかこの男ども！ もしかして光莉さんに声をかけてきたとか、クソツ、くるのが遅れてすんません！ おい春斗、霞！ この性犯罪者どもの写真を撮つて出会い系サイトに『おじさんが大好きです』つて一文添えて登録するから手え貸せ！ あつ、あと光莉さん！ 水着姿めちゃくちや可愛いです！ 好きです！」

「うるさい」

俺の愛に対し返された光莉さんの言葉は四文字だつた。そんなつれないところも可愛らしくて好きだぜ。「なーに？」もお姉さんっぽくて非常によかつたし、この場に春斗と霞がいなかつたら体を震わせながら弓のようにしなつて、天へと昇る心地に抗えずどうにかなつてしまつていた。こんなに俺の心を惑わせて、光莉さんは本当に罪な女だぜ。

「光莉さん。なんでこんなとこおるんですか？」

「日葵がね。『恭弥がいるかも、しれないから……一緒にきてくれる?』つていじらしく頼んできてくれたから。ちなみに里沙も来てるわよ」

多分母さんと光莉さんを二人きりにしたら万が一のことがあるといけないからだろう。万が一つていうのは一人が男にどうこうされるつていうわけじゃなくて、光莉さんが母さんにどうこうするつていう方の心配。その点で言えば里沙はその場にいるだけで光莉さんが自重するようになるしかなり適任だ。

「その二人はどこに？」

「里沙が男に声かけられたから避難させてるわ」

「は？ 里沙何にもされてないですよね？」

「私を誰だと思つてんのよ。男が声をかけた瞬間ぶつ殺したわ」

「もうちよつと待つてもよくなないですか……？」

「何言つてんだ霞。里沙くらい可愛い女の子が混浴にいて、それに話しかける男に下心以外があると思うか？ こればっかりは光莉さんが正しい」

そもそも混浴にくる男は下心しか持つてないんだから。クソ、うちの年がら年中父さんに恋をしてる母さんのせいで光莉さんに余計な拳を震わせて、里沙を危険な目に遭わせちまつた。あの人もう歳なんじやねえか？ 元からポンコツだつたけど、日々常識と

か判断力とか失われていつてる気がすんだけど。あと光莉さんのおっぱいが大きいんですけど。

「そんなこといいから、他のカスどもに声かけられる前に二人を迎えて行くわよ」「はい！あの、その……手、つないでもいいですか？」

「嫌よ。あんた興奮するでしょ」

「俺の下半身を見ても同じことが言えますか！？」

「見たから言つてんの」

「霞。光莉さんは見たらしい」

「僕に話しかけるな」

なぜか霞に嫌われてしまつたようで、霞は爆笑する春斗の陰に隠れてしまつた。ははーん？さては光莉さんが魅力的すぎて、『俺を嫌い』つてことにして光莉さんから距離をとつたな？この思春期め！

「夕弥夕弥。そのまんまで日葵さんと里沙のどこ行くん？」

「やつべ。気まずいどころの騒ぎじやねえ」

「なんか嫌なものでも思い浮かべる」

嫌なもの嫌なもの……いや、面白いものにしよう。直近で見た嫌なものが嫌なもの過ぎて思い出したくもない。

面白いもの……今から里沙に会うつてなつて、小さい頃からずつと一緒にいたのにも
関わらず、明らかに異性を感じてるからめちゃくちや恥ずかしくなつてる霞。だつ
ひやつひやつひや!!!

「よし、ありがとう霞」

「僕が嫌なものってこと!!?」

「あ、違う。家族みてえな異性にすらどぎまぎしてんのが滑稽で面白くて。だからあり
がとう」

「舐めてんのかこいつ……」

「いいじやないそれくらい。むしろそうやつて身近な男の子に恥ずかしがつてもらえる
方が、女の子としては嬉しいもんよ」

「あ、あのう、光莉さん……俺、恥ずかしいです」

「生き様がやろ?」

「テメエ!!」

俺の100点満点の光莉さんにに対するアプローチに余計な一言を挟んできた春斗と
大乱闘。しようとしたところで、「ここお風呂場よ。暴れんのはやめなさい」という光莉
さんの声に冷静になつて振り上げた拳を下ろした。「あれ? さつき光莉さん男の人た
ちを」なんて余計なことを言いそうになつた霞の口を塞いでおくことも忘れない。光莉

さんのあれば必要なことで、俺たちの喧嘩は必要ないことだ。わかつたな？

そうして暴れながら歩いていると、開けた場所にでた。テニスコート六面分くらいはある広さのお風呂で、正常そうな男女が各々お湯を楽しんでいる。よかつた。光莉さんが手を下さずに済みそうだ。

二人は男に話しかけられることもなく、仲良く談笑している。近くでオカマさんたちが目を光らせているのは勘違いじやなければ護衛だろう。俺たちが近づくと一瞬睨んでから、優しい微笑みを浮かべてその場から去つていった。カッケエな普通に。

「日葵！ 里沙！ 大丈夫だった？ 男に変なことされてない？」

「大丈夫！ ありがとね、光莉」

「光莉さんも相手に怪我させすぎてませんか？」

「あいつ、心配するのが相手なあたり性根を疑うよな」

「ナチュラルに失礼やんな、里沙」

「は、春斗っ！ 僕は目を閉じるから手を引いてくれ！」

初めは光莉さんのことをずっと心配していたからか光莉さんのことしか見えていかつたみたいだが、俺と春斗が里沙に低評価を与え、霞が目を閉じていつも通り初心ムーブをかましたことで俺たちに気づいたのか、母さんが俺たちに手を振つて里沙が目を丸くしてから母さんの背中に隠れた。

「夕弥！ 春斗くんに霞くんも！」

「どうも！ 里沙はどうしたん？ なんで隠れたん？」

「な、なんか恥ずかしい」

「お前まで俺の生き様が恥ずかしいって言うのか!?」

「なんの話?!」

違つたか。まあ俺の生き様に恥ずかしいところなんてないから間違いだろうとは思つてたけどな。

しかし今更水着姿程度で恥ずかしがること……霞は例外として。恥ずかしがることないと思うんだけどなあ。……いや、えっと、俺個人的にはなんとなく恥ずかしくなる原因はあるけども。なんか母さんは俺と里沙交互に見てにやにやしてるし。わかりやすすぎだろあんた。子どもの恋路はもつと隠れて応援するもんなんじやねえの？

母さんのポンコツは今に始まつたことじやないから置いといて、せつかく会つたのに隠れられるとちよつと寂しい。ここはなんともないからつて安心させておかないとな。

「別に、里沙の水着姿見たところで今更なんとも思わねえよ。肌が綺麗とかスタイルいいとかやつぱり可愛いとかその程度だ。なあ春斗。俺ものすごい勢いでとんでもない暴露しなかつたか？」

「事実やしええんちやう？ 声に出すのはキモいけど」

なぜか思惑と違うことを口走ってしまったが、これでも大丈夫だろう。里沙なら顔を青くしながら「キモ……」と言つていつもの調子を取り戻すはずだ。せつかくの風呂で気分を悪くさせて申し訳ない。でも元を返せば里沙が恥ずかしがるのが悪いんだから、これは自業自得だ。

「……？」

つて思つていたのに、里沙が中々出てこない。どころか、母さんの背中に一層縮こまつて姿を隠す。

「あんた、やつぱり恭弥の息子ね」

「何かよくわかりませんけど、不名誉だつていうことはわかります」

どこか呆れている光莉さんに答えながら、里沙を見る。

母さんの背中に隠れているからよく見えないけど、ちらつと見えた耳は赤くなっているように見えた。

第16話 そして傷を負つた

「光莉さん。どうすれば光莉さんは俺と結婚してくれると思います?」「本人に聞くことじゃないわね、それ」

一番信頼している光莉さんにだから聞いたのに何を言つてんだろうと首を傾げる
と、光莉さんがペчинと優しくおでこを叩いてくれた。やべえなこのおでこ一生洗えない。
でも洗わないと汚いから、このおでこを摘出して新しいおでこを取り付けようと思
う。

ホテルアルストロメリアの地下にはバーがある。バーと言つてもお酒のみを提供す
るところではなく、雰囲気をバーに寄せたカフェのようなところだ。ダメ元で「光莉さ
ん! 僕と大人な雰囲気を楽しむのはどうですか!」と頼んでみたら「いいわよ」と言つ
てついてきてくれたから、俺は夢だと思っている。あ、でもさつき光莉さんが叩いてく
れた時痛かったから夢じやないか。この人力加減バグつてんだよな。優しく叩いてく
れたつて言つたけど、内出血くらい起きていてもおかしくない。

「考えてみてくれません? 僕勉強もできるし運動もできるし顔もスタイルもいいし、
悪いところなんてないと思うんですけど」

「恭弥の息子」

「最悪のウイークポイントじゃん……」

父さんは死ぬほどクズだから、その血が流れている俺もクズである可能性は十分にある。俺は自分を客観視できる人間だ。いくら頭と見た目がいいからって、それを台無しにしてしまうほどのクズ加減があるということを俺は知っている。なんで母さんは父さんと結婚したんだって毎日どころか毎分、いや毎秒思つてるし。

でも、俺はそんなはつきりとしたクズじやないはずだ。だつて千里さんも「君つて恭弥よりは面白くないよね」って言つてきたし。つかなんだよその言い方。あの人ノンデリじやね？」普通に。

しかし、どうするか。光莉さんは会いたいと言えば会つてくれる。でもこの旅行先でバーという大人な空間。そして光莉さんはお酒を飲んでいるというあまりにも都合のいい状況。これを逃すなんて男じやない。

「こうしましよう！ 今から光莉さんはお酒を、俺はソフトドリンクを飲んで、光莉さんが先に酔つたら結婚してください！」

「あんたもお酒飲むならまだしも……つていうか私にメリットないでしょ」「は？ 俺まだ未成年なんで酒飲んじゃダメでしょ」

「法律を守る常識があつて、なんで公平性が欠如してんのよ」

「公平性に欠けてませんよ。だつて俺は、光莉さんに酔つてるところだから、さ」
お酒の中に入つていた氷を口に詰め込まれてぶん殴られた。この人親友の息子に対して容赦ねえよ。普通そんなヤクザみたいな殴り方する？　さつき自分で20も離れてるつて言つてたよね？」

でも、ポジティブに考えれば、こうやつて暴力を振るつていいと思つてくれてるつてことだ。それは信頼度の高さの表れに違ひない。だつて父さんと千里さんは俺以上にボコボコにされてるし、しかも俺は光莉さんからすれば親友の息子。そんなやつの口に氷を詰めてぶん殴るなんて、愛情表現以外の何がある？

「ふつ、感じましたよ、光莉さんからの愛」

「単純にムカついたらぶん殴るクセがあるだけよ」

「よく直した方がいいって言われません？」

「殴つてもいい相手にしかやんないからいいのよ」

ほら、愛情表現だつた。見方によつては暴力を正当化してるようにも見えるけど、俺は愛情表現だつて信じてる。そうじやなきや流石に父さんと千里さんは光莉さんを訴えていてもおかしくない。

「そういえばあんた」

「はい？」

「私のどこが好きなの？ いつも求愛行動しかしてこないから、聞いたことないわよね」

「人を動物みたいに言うのやめてくれません？」

「なんだ？」 いきなりそんなこと聞いてくるつてことは、脈ありか？ それともまだ俺の求愛が冗談だと思つてゐるのか？ だから好きなところを答えられないだろうみたいだ？ だとしたら心外だ。これは真正面から好きなところをぶつけてわからせるしかない。そして、女性に好意を伝えるときはいつだって一言目が大切だ。俺は父さんが一言目でいつも間違えてひどい目に遭つてゐる姿をよく見ている。反面教師としては一級品だぜ。

「まずは張りのあるおつきなおっぱい」

「夕弥。なんでぐちやぐちやになつてるの……？」
「おかしいな……」

父さんは「女性を褒めるときは、その人の一番の魅力を伝えるんだぞ」って言つてたから、それはその通りだと思つて実践しただけなのに。やっぱりあの人の言うこと信じるべきじやねえな。

里沙の声で目を覚ました俺は、差し伸べてくれた手をとつてゆっくり体を起こす。いや、引き起こす。頭が土まみれになつてているのは、恐らく俺がロビーを彩る植木の一部にされていたからだろう。俺が麗しすぎるからって、観葉植物の一種にするのはやめてほしい。

「その様子だと、光莉さんとはうまくいかなかつたみたいだね」「どこをどう見たらそう見えるんだよ」

「ありのままを見てそう見えたんだよ」

何を言つているんだ？　俺はただ光莉さんとバーに行つて、ぐちやぐちやにされて植木にされただけなのに。まあ一般人からすれば大失敗に見えるだろうが、俺からすれば大成功だ。光莉さんが植木にしてくれるなんて、よっぽど近しい人間じやないとやつてくれないからな。

「もう一回お風呂入つてきたら？」

「だな。大浴場を血で汚すの申し訛ないし、部屋で入るか」

ホテルの部屋は、「夫婦で部屋を取ると子どもができちゃうから」という父さんのイカれた思考により、男と女で分けている。だから毎年夜になると「枕投げしようぜ！」と父さんか蓮さんが言い出して、全員が盛り上がりつて大騒ぎすることが恒例だ。ちなみに去年は盛り上がりすぎて枕野球をした。

「あ、夕弥」

「ん？」

「えっと、言いにくいんだけど……今男部屋の方ね？　お風呂でおじさんとオカマさんが裸の付き合いしてるらしくて」

「なんで俺の父さんは気軽に地獄を作り上げるんだ？」

何してんだあの人。子どもができるからって理由で男と女で部屋分けしたのに、自分で自分はオカマに襲撃されてんの？　多分、学生時代世話をなつた人がオカマだつたつて言つてたからその人なんだろうけど……。

「つかんなことになつてんなら風呂入れねえじやん」

「うん。だからこつちきなよ」

「おー。そうすつか」

別に知つた仲だし、大体血はつながつてるし気まずさなんて一つもないしな。光莉さんがいたら興奮しすぎて死ぬけど、まだバーにいるだろうからその間に風呂入ればいいだろ。

あまりにもダメージを負いすぎたため、里沙に手を引かれながら部屋へ向かう。おかしい。こういうギャグっぽいダメージつて漫画とかならすぐ治るのに……。現実は非情だ。

「えっと、カードキー……」

「ここじゃね？」

「勝手にポケットまさぐるな」

「アアアアアアアアアアア!!!!」

「ごめん！」

部屋の前にについてカードキーを探しだしたから、勘で里沙のポケットをまさぐつたら「こら」みたいな感じでぺчинと一撃。しかしそれが傷に触れてめちゃくちや痛くて叫び散らしてしまった。あれ、光莉さんマジで俺にムカついて暴力振るつてきたのか？ 親愛を感じるようなダメージ量じやねえだろこれ。

叫ぶ俺に焦つた里沙が、急いでカードキーをかざしてドアを開け、俺を中にぶち込む。仮にも俺のことが好きだと言つているやつの扱いじやねえだろ。物みたいにぶち込みやがつたぞこいつ。

「あれ、夕弥。どうしたの？」

「その傷つき方は光莉やな」

「薰さん、春乃さん」

光莉さんの傷つけ方把握されてるんだ……。どんだけ父さんと千里さん光莉さんにやられてたんだよ。あの二人のノンデリ加減みたら相当な数だろうけど。

「母さんと恭華さんはいないんですか？」

「日葵は恭弥がひどい目に遭つてるつて聞いて飛んで行つて、恭華はこれ以上の地獄ができるんようにつてついて行つた」

「俺、もうこつちに泊まろうかな……」

「いいよ。私と一緒に寝る？」

小首を傾げて上目遣いの薰さんに、思わず目を逸らす。この人めちゃくちゃからかつてくるんだよな。俺が思春期で恥ずかしがるつてわかつててやつてくるからタチが悪い。春乃さんがやつてくるなら「まあ春乃さんだしな」つてなるけど、いつも優しくて穏やかで真面目に尊敬できる人だからこそ照れてしまう。

「母さん！ タ弥ももう子ども扱いしていい歳じやないんだから！」
 「じゃあ大人扱いしよか。私と一緒に寝る？」

「春乃さん！」

「まあまあ里沙。そんな独り身のジョークに目くじら立てるなつて

「今私のこと独り身言うた？」

「死ぬほど失言しました」

修羅の気配を感じて瞬時に土下座する。自分が悪いと思つたらすぐに謝る。修羅を感じたら土下座する。父さんからの数少ない有益な教えた。ちなみに母さんからは「謝

らなきやいけないようなことしちゃだめだよ」と教えられた。

「別に気にしてへんよ。薰ちゃん、光莉呼んどいて。夕弥風呂入れとくから」「めちゃくちや気にしてるじやないですか!! やめて!! せめて薰さんにして!!」

「やつて」

「はーい。じゃあ一緒に入ろつか?」

「違いますって! 言葉の綾つていうか、そもそも一人で入れますから!!」

「でも傷だらけだし、一人で入つたら危ないよ?」

「そうそう。ここはお姉さんの言うこと聞いといた方がええよ」

マズい、このままだと俺のハイパー・ビッグマグナムが見られてしまう。家族みたいなもんだからいいかと言えばそういうわけじやなくて、むしろ家族みたいなもんだからこそクソ恥ずかしい。この人たち思春期の男子高校生をなんだと思つてんだ? こういうのが一生の心の傷になつて女性不信になるかもしけないんだぞ?」

「クソ、助けてくれ里沙!」

「えつ、あつ、えつと、わ、私が一緒にに入る!」

「そうじやねえだろ!!」

誰が「(傷だらけで風呂に入るの難しいから)助けてくれ」って言つたんだよ!! 正直お前と入るのが一番気まずいんだよ!!

「流石にいとこ同士とはいえ、それは許可できないかなあ」

「み、水着きるし、大丈夫！ 万が一のこと考えて夕弥は目隠しするから！」

「俺を使って何プレイしようとしてんの？」

「それならええかもな

「よくないですけど？」

「そういえばプールあるからって持つてきてたね、水着。それならいいかな

「よくないですけど!?」

「それじゃあ先入ってるね」

「なんでだよ!!!」

倫理観バグつてんのかこの人たち!! どう考へても年頃の男女を一緒の風呂に入れ
ちゃダメだろ!! いところは言え男女だぞ? 水着着てても変わんねえよ! 風呂つ
ていうシチュエーションがもうダメなんだよ!!

「もういいよー」

「もういいよじやねえんだよな」

「ほら、女の子待たせるもんやないで」

「里沙をよろしくね」

「その言い回しやめてくれません?」

まあ、中に入つて俺は大丈夫だからって説得するしかねえか。多分里沙も今頃頭抱えて「なんであるなこと言つちやつたんだろう」ってなつてたところだろうし。どうせ水着も着てねえだろ。

脱衣所の扉を開けて、中に入る。

めちゃくちゃビキニだつた。

「何してんのお前」

「なんか引っ込みつかなくなつちやつて……どうしよう」

「バカじやねえの？ 俺里沙と入んのが一番気まずいんだけど。あと水着似合つてると、かわいい」

「私も自分のこと死ぬほどバカだと思つてる……あとありがと」

『俺のことが好きムーブ』にしてもやりすぎな気がする。というかそうか、それが広まつてゐるから一緒に風呂入んの許可したのか？ あり得るな。恋する女の子の応援のためなら、ある程度の倫理観は切り捨てるだろうし。

「一人で大丈夫そだつたつて言つて戻つとけ」

「……でも、ここにくるまで手を引かなきやこれなかつたし」

「大丈夫だつて。普通に歩けつ」

歩けるし、と足を踏み出した瞬間バランスを崩して里沙の方に倒れてしまう。マズ

い、と思つた時にはもう遅かつた。痛む体を無理やり動かして、里沙にぶつからないよう体を捻ろうにも無理がある。

「うわ

「ぶつ!!!!」

しかし里沙が虫を叩くように俺をビンタしたことで、里沙を巻き込んで倒れる事態は回避された。さつき俺のこと心配してたよな？ なんでそんな無感情で俺のこと殴れんの？

「ほら、やつぱり危ないじyan」

「今ちょうどダメージも増えたしな……」

「もういいんじやない？ 夕弥が何かしてくるとは思えないし、昔は一緒にお風呂入つたことあるし」

「昔つてまだ里沙に女性らしい起伏がなかつた頃の話だろ？」

「キモい言い方しないで。ほら、早く脱いで」

「いやん！ 里沙ちゃんたら大胆ね！」

場を盛り上げようとふざけてみたら、無感情に裸にひん剥かれて風呂へぶち込まれた。いや、もつとほら、ないの？ 裸見て「きやつ！」とか。ああダメだ。完全に『無』になつてらあ。

第17話 そして罪を償つた

ゴールデンウイークにゆつくりできる場所なんて、学生には基本的に存在しない。お金を払えばホテルを取つたり、レンタルスペースを借りて時間を気にせずゆつくりできるけど、学生の身分でそんなお金用意できる……いや、用意はできてもそんな気前よくお金使えるほどお金持っているわけでもない。霞の家はケーキ屋だからそこを使わせてもらおうと思つても、流石に身内だからと飲食スペースを占領するのは非常識だし、となると『お金が必要なくて長時間ゆつくりできる場所』は誰かの家しかなくなる。

「つていうわけなんだよ姉ちゃん」

「じゃああんたらのうちの誰かの家に行つてくんない？」

インターホンを鳴らし、出迎えてくれた姉ちゃんは、めちゃくちや嫌そうな顔で突っぱねてきた。

姉ちゃん、氷室葵。^{ひむろあおい} 父さんと歳が18個も離れている妹で、現在大学生一人暮らし。

麒麟寺さんが「わたくし、お金がありませんわ！」とお嬢様にあるまじき発言を聞いた俺は、『お金が必要なくて長時間ゆつくりできる場所』として姉ちゃんの家をチョイスし

た。じいちゃんとばあちゃんが「半端な家で一人暮らしさせられない」と2LDKのマンションを与えられた意味はこれだと俺は確信している。

「申し訳ございません、夕弥さんの叔母さま。わたくし、お友だちの家にお邪魔するのが夢として」

「ならお友だちの家に行つてくんない?」

「せめてのお詫びとして」

「……や、別にお土産ねだつてるわけじゃないけどさ」

「わたくしがきましたわ」

「ああもうめんどくせえわ。入つていいよ」

麒麟寺さんの非常識な言動に姉ちゃんが折れて、俺たちを迎えてくれる。「おじゃましまーす!」と元気に突入する俺と春斗と麒麟寺さんの後ろで、里沙と霞が姉ちゃんにケーキを渡しているのは気にならないようにしておこう。ほら、姉ちゃんは身内だし。家族だし。氣い遣う必要ねえだろ。

姉ちゃんの家にはちよくちよく泊まりに来ていて、その時に使わせてもらつている部屋になだれ込む。叔母とはいえ年齢が近いからちよつとよくないんじやない? と思う人もいるだろうが、俺には光莉さんがいるから問題ない。姉ちゃんはただの姉ちゃんだ。

「えっと、ほんとにごめんね？ 急にきちゃつて」

「僕では止められませんでした」

「いーよいーよ。ほんとにはいい子だねえ里沙と霞は。うちのウンコにも見習つてほしいよ」

「甥を糞便と同じ扱いすんなよ」

里沙と霞を撫でながら言う姉ちゃんに中指を立て、立てた瞬間に変な方向に曲げられそうになつて土下座する。そんな俺に「大騒ぎすんなよ」と言つて姉ちゃんは部屋から出て行つたのを見て、広めのテーブルを囲んで全員座つたところで麒麟寺さんが口を開く。

「さて、みなさま。わたくし一人寂しく過ごしていたゴールデンウイークで思つたことがありますの！」

「これあんまり遊ばれへんかつたこと根に持つてへん？」
「思つても言うなよ春斗」

「もつとお互いのことを知るべきだと思いますの！」

やはり気にしていたのか、口を滑らせた春斗を睨みつけながら麒麟寺さんが胸を張る。霞が麒麟寺さんから目を逸らしたことは後で泣くまでいじり倒すとして、そういうば出会いつてから全然経つてないし、俺たち四人はともかく、麒麟寺さんは俺たちのこと

ほとんど知らないよな、と一人納得した。

「わたくしが知つてゐることと言えば、里沙さんが夕弥さんを愛していることくらいです」

「待つて麒麟寺さん。それ誤解なの」

「違うんですの？ わたくしの目にはとても好意的に見えますわよ」

「確かに夕弥のことは好きだけど！」

「何？ いきなり修羅場？」

ガチャヤ、とドアが開く音とともに聞こえてきた声に里沙が固まり、ゆっくり後ろを向く。そこにはケーキとジュースを乗せたトレイを片手に、にやにやといやらしい笑みを浮かべる姉ちゃんがいた。

「葵さん違うの！ 今のは

「はいこれ、買つてきてくれたケーキとうちにあつたジュース」

「葵さん聞いて！」

「なーに恥ずかしがつてんの。ちつちやいころは『ゆうやとけつこんする！』って言つてたし、別に驚きもないけど」

「ウワー！！」

「じゃあごゆつくり」

言いたいことを言つて部屋を出る姉ちゃん。ゲラゲラ笑う春斗。里沙を気遣う霞。頭を抱えて動かなくなつた里沙。うちの身内全員に広まつたんじやねえかなあと心配する俺。「めちゃくちゃうめえですわ」とケーキを頬張る麒麟寺さん。

この人、わかつててやつてるよな多分。根が善人ながら邪悪な気がするんだけど。「里沙さんは非常にいじりがいがあつて可愛らしいですわね」

「十割理解したようなもんですよ」

「里沙を表現するんやつたら、大体可愛いが結論になりますから」

「あとは優しいとか」

「ありがとう!!」

やけくそなありがとうを披露して、これまたやけくそにケーキを食べ、ジュースを飲み干し、なぜか俺のケーキからイチゴを奪つて俺を睨みつけてくる里沙に、「やつぱりお可愛らしいですわ」と麒麟寺さんが微笑む。思えば里沙はいつも振り回されてるような気がするなあ。大体振り回してるのは俺だから、口に出すと「夕弥が言うな!」って言われるから言わねえけど。

「夕弥さんと里沙さんと霞さんって、血の繋がりがあるんでしたわよね?」

「俺の父さんと里沙の母さんと霞の母さんが兄妹なんすよ」

「春斗さんはどういうつながりで?」

「俺の母さんが三人の両親と高校からの友だち」

「へえー。だとするとほぼ身内みたいなものなんですね」

「ちょっと寂しそうな顔してるやん」

「夕弥。撫でていい?」

「霞に聞けよ」

「なんでもいつも僕に振るんだよ!」

俺たち四人は全員の親につながりがあつて、麒麟寺さんにはない。それを気にして麒麟寺さんが口の先を尖らせた。ドMで留年してゐるくせに。これは関係ない。

改めて考えてみると、結構異常だなと思う。仲良すぎじゃねえか俺らの両親。普通は住む地域離れるもんじやねえの? 俺ら幼小中高全部一緒なんだけど。そりや麒麟寺さんが疎外感持つてもおかしくない。俺も同じ立場なら疎外感……ねえな。気持ちワリイつて思うわ。

「麒麟寺さんのことも教えてくださいよ。そういう名前とお嬢様になりたいつてことくらいしか知らないですし」

「わたくしのこと? そうですわね……」

「?」

ちらちらと麒麟寺さんが俺に視線を向けてくる。何その視線? 「これ言っちゃおう

かな……みたいな。俺と麒麟寺さんに共通の秘密があつて、それを言おうかどうか悩んでるみたいな。そんなのあつたか？」

「夕弥さん。申し上げてもいいと思います？」

「え？ 何の話つすか？」

「まあ！ 忘れたとは言わせませんわよ！ わたくしを掃除用具入れに引きずり込み、暴れるわたくしを抑え込んで無理やり口を抑えたことを！」

「ちよつとこつちきな、夕弥」

めちゃくちやマズいことを麒麟寺さんが言つた瞬間ガチャ、と音が鳴つてドアが開き、顔を覗かせた姉ちゃんが能面のような表情で俺を呼ぶ。マズい。これに従つて姉ちゃんの方に行つたらこの場での弁明の機会も逃すし、姉ちゃんに殺される！

「違う！ 姉ちゃん聞いてくれ！ 俺はただ、命を狙われていただけなんだ！」

「んなわけないでしょ。言い訳すんならもつとまともなのにしてくれる？」

「これは事実やで」

「葵さん。本当のことなんです」

「夕弥を庇うのは癪だけど、本当です」

三人からの援護射撃に姉ちゃんが絶句する。そうだよな。普通の学生が命を狙われるなんて信じられないよな。でもあるんだよ、あの学校では。俺も言いながら信じても

らえないとどうなつて思つてたからこれは姉ちゃんは悪くない。里沙たちがいて助かつた。

いや助かつてねえわ。麒麟寺さんが言つたことを弁明する相手増えてるから被害でけえよふざけんな。

「まあ、それは本当だとして。だからといって性犯罪はよくないじやん」「葵様、それは違いますわ！ 性犯罪などではなく、無理やりでしたがわたくしは嬉しかつたんです！」

「クズ男に引つかかつた女の子の言い方してるやん」

「有罪だな夕弥。光莉さんには僕から言つておいてやる」

「クソ初心野郎が光莉さんとまともに話せねえだろカス。調子乗つてんじやねえぞ」

「そんなに言わなくともいいだろ!!」

俺を責められるからと嬉しそうにしている霞がムカついたから攻撃すると、本当に気にしていたことだからか掴みかかつてきた。「悪い、言い過ぎた」と謝れば「僕も言い過ぎたよ……」と引き下がる霞はいいやつで本当に扱いやすい。正直バカだと思ってる。

ただこのままじゃ『麒麟寺さんを無理やり襲つた挙句、その中でどうにか麒麟寺さんを堕として自分の女にしたクソ野郎』になつてしまふ。なんで光莉さん一筋の俺が、お嬢様になりたい留年ドM女を手籠めにしたつて思われてんだよ。元を返せば里沙のせ

いじやね？ 里沙があんな態度とつて、それが学校中に知れ渡つて俺の命が狙われて、その結果麒麟寺さんを掃除用具入れに引きずり込む事件を生んだんじゃね？

……いや、ここで里沙のせいにしても俺のクズさが浮き彫りになるだけだ。そんなことしたら余計に俺の立場が悪くなる。じゃあどうすればこの場を切り抜けられる？ 一番いいのは、麒麟寺さんにさつきの発言を撤回してもらうこと。「お嬢様なので冗談の相場がわかりませんでしたわー！」って言つてもらうことだ。

なんとか伝わってくれとアイコンタクトを送る。麒麟寺さんはそれを受け取つて、首を傾げたあと目を見開き、「任せてくださいまし」と力強く頷いた。

「みなさま、よろしいですか」

凛とした声が空間を支配する。麒麟寺さんの纏う空気が変わつた。

「わたくしが本当に性被害を受けたとして、このような場ではつきりと口にすると思つて いますの？」

「性被害やないやろうけど、そもそもやつたことは事実っぽいし、せやつたら夕弥はどうちにしろ悪いことしてるやろ」

「負けましたわー！！」

「きな、夕弥」

「役立たずー！！」

春斗に一瞬でＫＯされた麒麟寺さんの敬礼に見送られ、俺は姉ちゃんに引きずられ部屋を後についた。

第18話 そしてジャブを放つた

放課後、便利部部室。こんな部活に毎日依頼が舞い込んでくるわけもなく、「中間試験が迫っていますわー!!」と大騒ぎする麒麟寺さんの勉強を見るのが日課となり始めた頃。

里沙以外の四人が先に部室へ集合し、後から疲れた表情の里沙が部室にやつてくるのも見慣れた光景になっていた。

「やつと解放された……」

「お疲れ様ですわ。春斗さん」

「ほい紅茶」

「ありがと」

なぜかできる執事の動きが板についている春斗から紅茶を出され、俺の隣に座りながら一口。一息ついて落ち着いたように見えるが、やはりその表情には疲れが見えた。

「なんで女の子って恋バナ好きなのかな……」

「そりや女の子である里沙が一番理解できるだろ」

「わたくしも女の子ですわよ?」

「一般的なっていう枕詞つけられる自信あります？」

「わたくしはお嬢様ですわー！」

里沙が精神的に疲弊している理由。それは、『ゴールデンウイーク中俺と何かあつたんじゃないか』と女の子に質問攻めされているからだ。

そりや家族みたいなもんだから旅行には行くし、旅行に行つていない間もふらつとお互いの家に行つて時間を潰すこともある。旅行中一緒にお風呂に入つたのはまあその、あれだとして、そういう家族的な交流も『里沙は俺と付き合つている』と思つてはいる女の子たちからすれば、『家族的な交流の中にあつた二人だけの大切な時間』を知りたい、っていう風になるらしい。んな場面一ミリもなかつたけどな。

「夕弥、もういいんじやないか？」里沙に捨てられたつて言えば

「俺は変な目で見られてもいいけどよ、それやつたら里沙がいとこと付き合つて別れた女の子っていう風に見られるだろ？　んなことしたら俺が父さんに殺されんだろうが何回言つたらわかんだよ愚図」

「こんなすぐ暴言飛ばすようなやつが、まだ里沙と付き合つて信じられてんのがおかしいと思うんやけど」

「あら、夕弥さんは素敵な男性だと思いますわよ？　誰彼構わず暴言を飛ばすようなお方ではございませんでしようし」

まああなたにドMだ留年だなんだつて平氣で言つてますけどね。氣にしてないならいいんです。

ただ確かに春斗の言うことも一理ある。俺は入学して間もないのにやばいやつだって認識されるくらいだつたのに、今じゃ全然そんなことも……なくはないが、少なくとも前より避けられることはない。そう考へると、里沙の『俺のいいところアピール』がものすごい効果を發揮してることになるけど、それはそれであんまり考へたくもない。

「でも悪いことちやうやろ？ 男避けになつてんのも事実やろし」

「それはそうだけど、そういう会話になる度に夕弥のことが好きだつてフリしないといけないから、いい加減ゲボ出ちゃう」

「里沙も大概ひでえから帳尻取れてんだろ、俺たち」

「夕弥以外には言わないだろ」

「すなわち愛ということですわね！」

「違いますから」

違うこともねえと思うけどなあ。『この人にはこれを言つても大丈夫』って言うのは信頼つていう名の愛だろ。里沙が違うつて言いたくなる理由もわかるけど、そとはつきりと否定されるとへこむように見せかけてまったく気にならない。そもそも光莉さん

以外眼中にない。そして光莉さんの眼中に俺はいない。ぐすん。

「しかし、里沙さんが毎日夕弥さんとのことを聞かれて疲弊しているのも事実。これを解決できる手がありますよ。ぜひ！ 女の子たちの欲を満たしてあげればいいんですの！」

「女の子たちの欲？」

「そう。里沙さんと夕弥さんのことが聞きたい！ となつてるのは、お二人について『付き合つている』という情報を知つてているのみで、『どこまで行つているのか』『普段どんなことをしているのか』が不透明だからだと考えられますわ」

「……確かに、私いつも歯切れ悪い答えばつかしちゃつてます」

「そらゲボ出そうやつたらそういうわな」

里沙と俺は付き合つてるつていうことになつていて。そしていとこだつてこともバレている。だからこそどこまで行つてなのか知りたいっていうのはまあ理解できる。ただ里沙はさつきも言つていた通り俺のことが好きなフリをするとゲボが出そうになるから、女の子たち満足のいく答えを出せていない。

「つていうことは、やっぱり里沙が女の子たちを満足させないといけないってことですか？」

「おい霞。お前らしくもないド下ネタだな」

里沙に無言でビンタされたから、霞に一言「ごめん」と謝つておいた。なんだよ、ちょっとした冗談じやん。何？ 霞相手だからダメ？ 過保護すぎだろお前。もう霞も16になる歳つつーか俺たちと同い年だからいいだろ。霞がそういうの苦手つて知つてるでしょ？ でもこいつ、そのくせ俺と春斗が猥談してたら自分が入れないからって拗ねるんだぜ？

「夕弥さん、里沙さん。お二人の世界に入るのはやめてくださいまし」

「麒麟寺さん。変な言い方やめてください」

「それはお嬢様言葉のことですの？ それとも二人の世界のこと？」

「お嬢様言葉が変つていう自覚あつたんですね……」

「世界広しと言えど、お嬢様でもないのにお嬢様言葉を使う留学生は、わたくしくらいですわ！」

あとドMな。

「つまり、わたくしが言いたいのは、夕弥さんも責任を負うべきということですわ！ お二人が付き合つているとなつていてる現状、これはお二人の問題なのですから」「俺が育児をしない夫みたいな言い方するのやめてくれません？」

「うつ」

「おい里沙！ 今吐きそうになつたらつわりがきたみたいになつちやうだろ！」

「別にならへんで」

焦つた。育児つていうワードの後に里沙が吐きそうになつたから『育児をしない夫』がリアルになるとこころだつた。俺は世間の夫は育児をしないつていうイメージを一人で払拭するくらい育児をしたい男なのに。むしろ光莉さんの母性に甘えて俺も育ててほしいとまで思つてゐるのに。あれ、それだつたら別の形で育児に参加してね?

それもまたアリ。

「夕弥が責任を負うつて、具体的にどうするんです?」

「女の子たちが里沙さんに聞かなくともいいや、となるくらいお二人が仲睦まじい様子を校内で展開する、というのはいかが?」

「待つてください麒麟寺さん。私、流石に夕弥を殺したくはありません」

「そんなに嫌なわけ? 流石に傷つくぞ俺」

「今まで里沙が夕弥の隣にいてくれたんだぞ。その気持ち考えてみようと思わないのか」

「俺つてそこまで嫌悪感与える人間なのかよ」

「俺は別にそこは思わへんで」

一人味方をしてくれた春斗に投げキッス。負け時と返されたウインクに頬を赤らめると、「うわ、キショ」という率直な意見を里沙からいただき、とりあえずは春斗と二人

で猛省することにした。正しいことは受け入れるタチなんだ、俺たちは。
 しかし、学校で里沙と仲睦まじく……つまりいちやいちやするのか。俺はそれで里沙の負担が減るなら全然やれるけど、里沙の負担の種類が変わるだけじゃねえのか？ しかもそれって父さんたちにもその様子が伝わるかもしねりないってことだし、リスクがでかい気がする。

「まあ、俺もただ見てるわけにはいかねえってことはわかりました」

「あくまで先ほどのものは解決策の一つとして考えていただければ結構ですわ」

「でも確かに、普通に里沙がまあ、惚氣？ みたいなことやつてもうたら、次から次へとほしがつきそうやしな」

「そう考えると聞く必要がないって思わせるのはありか」

「あとは俺が頑張るだけ、か」

「あの、私の意見は無視？ 嫌なんだけど私」

「里沙」

里沙の肩に手を置いて、正面から見つめる。少し驚いて目を丸くした里沙は、気まずそうに眼を逸らして小さく「なに」と呟いた。

「俺を信じろ。やるときはやる男なんだ」

「……別に、信じてないわけじゃないけど」

「決まりですわね！ 夕弥さん、あなたに里沙さんの今後がかかるつてること、重々ご承知くださいな！」
「任せてくれださい」

翌日、昼休み。

最近里沙は友だちと食べることが多く、俺は春斗と一緒に霞を拉致つて三人で食べているが、昨日の便利部での会話で決意を固めた俺は、今まさに弁当箱を取り出して友だちと昼飯を食おうとしている里沙の元へと歩いていく。それに気づいた里沙は、一瞬嫌そうな顔をした後、『え、な、いきなりどうしたの？ 一緒に昼食べるっていう話してなかつたのに！』と焦る乙女の表情に切り替えた。大女優かよお前は。

「里沙」

「どうしたの？」 夕弥

周りから視線を感じる。これから何が起きるのかという期待の色を感じる。別に、今日この一撃で満足させようとは思っていない。そんなきつい一撃を放つたら里沙が気持ち悪すぎて死ぬか俺を殺す。だとすると、今必要なのはジャブだ。想像しろ、『里沙からの惚気があまり聞けず、悶々としている気持ち』を満たせるようなジャブは何か。

ちゃんと頬まで赤くして表情を作つてゐる里沙のそばにしゃがみこんで、懇願するよう見上げる。その時点で里沙の完璧な作られた表情が一瞬崩れたのを見なかつたことにして、言つた。

「最近一緒に飯食えてねえから、今日は二人で食いたいんだけど、いいか?」

「ひつ」

これ以上教室にいるボロが出るからと急いで里沙の手を取つて、教室を出る。これで正解だ。あのままあそこにいると、「あとで色々聞かせてよー!」攻撃が始まる。だから強引に連れていくことで、その攻撃から逃れ、俺の強引さを際立たせる。そうすれば放課後だつて俺が連れていくことが可能になる。

ジャブに加え今後の布石も打つ俺のこの対応は完璧と言えるだろう。

「吐きそう……」

俺が気持ち悪すぎて吐きそうになつてゐる里沙の心情を除けば。

「大丈夫か里沙」

「誰が言つてんの。……でもありがと。正直、そんなにゆつくりお昼食べられてなかつたから」

「だろうな」という言葉は飲み込んで、とりあえず便利部の部室を目指す。誰かに見られるところで食べてたら里沙の心が休まらない。その点便利部なら誰かがきたとして

も氣を遣わなくていいやつだし、むしろ二人きりにならない可能性がある分俺も氣が楽だ。

「ね、夕弥」

「なんだ？」

「さつきみたいなやり取り、光莉さんとやりたかつたりした？」

「は？ 里沙以外にやんねえだろ」

「そつか」

そもそも光莉さんは学生じゃねえし。あ、これは多分失言。女性に年齢に関する言葉は禁句。

その日は便利部の部室について、そういうここまでずつと手つないでたけどその必要なかつたなと二人で笑つてから、二人で飯を食つた。マジで薫さん料理上手だなつて褒めたら里沙は自分で弁当を作つてるみたらしかつた。超恥ずかしい。

第19話 そして新たな弱点が見つかつた

「わたくしの家があまりお金がなくて、しかもわたくしが小さい頃にお母様が出て行つて離婚して、お父様とわたくしと弟の三人暮らしどう話はしましたつけ」

「あんた何留年してんすか」

「そういえばもうすぐ中間試験ですわー！！」と騒ぎ始めた麒麟寺さんの勉強を見るために大集合した中で落とされた爆弾に、つい心無い言葉を浴びせてしまった休日の午後。大体のことは笑つて済ませる春斗も、「ええ……」と流石にドン引きしていることから、とんでもなきがうかがえる。

これが「お父様がお仕事で忙しく、わたくしが幼い弟の面倒を見なければいけなくて……」ということなら百歩譲つてまあわかる。ただ、一緒に勉強していると麒麟寺さんが本当にアホだということがわかつたから、マジでバカすぎて留年した可能性がかなり高い。

「こら。弟さんの面倒を見ていたからかもしないじやん」

「弟は中学二年生でかなり優秀ですわ。わたくしのことを白い目で見すぎてもう黒目がなくなっていますもの」

「比喩表現やなくてほんまに白目なるやつおらんやろ」

「なんか僕らにもプレッシャーのしかかつてきたな」

確かに。麒麟寺さんの勉強を俺たちが見ていて、それでもだめだつたら俺たちまで落ち込んじやうだろ。ていうか学校はなんで麒麟寺さんをサポートしないんだ？ 学校の利益のことしか考えていない腐つた学校ならまだしも、うちの高校には父さんも蓮さんも春乃さんもいるのに、麒麟寺さんを放置するとは思えない。

「そないな状況やつたら母さん放つとかんと思うんやけど」

「あ、わたくし一年生の頃はやさぐれておりましたので。更生に一年かかった次第ですわ」

「お嬢様を目指すようになつたのが更生……？」

「やさぐれて留年するよりはマシなんじゃない？」

「それに、わたくし用の問題を先生方が作つてくださつていますので、毎日家で猛勉強中ですわ！ お嬢様たるもの、知識と教養は必須ですよ！」

ああ、それで父さんが毎日母さんといちやつく暇も惜しんでパソコンにかじりついてるのか。流石の父さんも麒麟寺さんの家庭事情を見たら母さんよりも麒麟寺さんをなんとかしようつていう方向に傾くらしい。

……ちよつともう少し麒麟寺さんこのままでいてくれねえかな。そうすれば家の空

気がピンクになることも少なくなるし。

「それにしても、皆様お勉強できるんですね」

「俺は『教師の息子がバカだと恥ずかしいから』っていうクソみたいな理由で勉強させられてたんで」

「私は『娘が賢いといざという時にマウンント取れるから』っていうクソみたいな理由で勉強させられてましたから」

「俺は『勉強してる二人よりも賢くなつたら、上から煽れておもろいから』っていうおもうい理由で勉強してるんで」

「僕は単純に勉強します」

「里沙さんがまともに育つてている理由がよくわかりませんわ」

「母さんの背中を見て育ちました」

あと話を聞く限り霞がいい子すぎる。こいつの欠点なんなんだ？　俺を敬遠するところくらいだろ。初心なのも可愛くて欠点になり得ないし、こいつ家のケーキ屋の手伝い率先してやるし。おかげでお姉さまから人気がすごいらしい。まあわかる。初心で顔がよくて礼儀正しい男の子つてもう人気が出ないわけないしな。その度にムカつくから「こいつ俺の親友です」って言つて評価下げるようしたら「そんな子とも付き合つてあげてるんだ！」ってむしろ評価上がるし。マジでムカつくな。俺が何したつてんだ

?

「麒麟寺さん、今日は大丈夫そうなんですか？」

「流石に去年のような無様は晒しません。きちんとお勉強もしていますし、赤点は逃れられますわ。ですがしかし！」

「うつせえな」

「夕弥。クソが漏れ出てんで」

「え!?」

「ウンコやなくて」

「二人とも、下品」

春斗が妙なことを言うからお尻を確認したら、里沙に怒られてしまった。でも麒麟寺さんがぶるぶる震えてるからお気に召したんだろう。下ネタが好きってマジでバカつぽいな。哀れだぜ。

「夏が近づいていますわ！ ということはつまり、プールの授業があるということ」

「……もしかして」

「わたくし、一切泳げませんの。どういたしましよう」

「土下座して単位もらうっていうのはどうです？」

「他の体育頑張つたら単位帳尻合うやろ」

「……」

「夕弥、春斗。『じやあ一緒に練習しましようか』って言おうとしたけど恥ずかしくて言えない霞を見習つて」

泳げないとう麒麟寺さんに対して、諦めから入った俺と春斗がまた怒られた。いやだつてさ、できないことをできるようになるのつて難しいし、ただでさえ勉強頑張つてんだぜ？ 一つくらい無理せずできないままにしててもバチ当たんねえだろ。むしろ、「泳げるようになりましたが勉強で蓄えた知識がすべて流されていきましたわー!!」つてなるより全然いい。

「でも一緒に練習する言うても、麒麟寺さんお金ないんやろ？ 学校のプールでも借りる？」

「んなことしたら里沙のスク水姿を見にクソどもが押し寄せてくるだろうが。ダメに決まつてんだけ」

「学校のプールを利用するとなると、もうプールが始まつてしまっていますわ。そういう前に練習して、泳げるようになつておきたいんですの」

「やつてもらう側なのに我がまま言つてんじやねえよ。わきまえろ」「夕弥、クソが出とる」

「え？」

「ウンコやなくて」

「いい加減にして」

里沙が本気でブチギレそうな気配を醸し出し始めたので、素直に頭を下げる。流石にウンコの天丼はきつかつたか。ウンコの天丼って言い方したらなおきついしな。これを口に出すと本気で気分が悪くなりそうな人がいるだろうから、気を遣つて俺の心のうちとどめておこうと思う。俺は常識人だからな。

俺のお尻が連続で確認されてびっくりしているのを気にしながら、麒麟寺さん泳げない問題について思考を巡らせる。フリをして光莉さんのことを考える。夏と言えばプール、夏と言えば海、プールと海と言えば水着。これは光莉さんをすぐに誘うしかない。そして俺の肉体美を見せつけて「タ弥、好き……」って言つてもらおう。これしかない！

「ねえ、そろそろいい？」

「姉ちゃん。どうしたんだ？」

部屋の入口、ドア枠に手をついて、カツコよく立つて姉ちゃんに首を傾げる。なぜそんなに気に入らない表情をしているのかわからない。ただ俺たちは、タダで使える姉ちゃんの家を利用するだけなのに。「あんたら私の家たまり場にしてるけど、せめて事前に連絡くらいくんない？」

「姉ちゃんの家は俺たちの秘密基地みたいなもんだろ」

「私のことよしなが先生だと思つてんの？」

「葵様。失礼ながら、葵様をよしなが先生だとは思つていませんわ」

「知つてるけど？」

じやあなんで言つたんだろう。最近よくないことがあつてイライラしてんのかな。
俺と姉ちゃんの仲だから相談してくれてもいいのに……。

でも流石に親しき仲にも礼儀あり。いくら姉ちんだからと言つて、連絡もなしに休
日に押し掛けるのはよくなかったか。ただ突然決まるから事前に連絡もクソもないし、
俺たちは悪くないと思う。ただ、里沙と霞が謝つてるってことは悪かつたんだと思う。
里沙と霞は常識人である俺以上の常識人だから、二人のとる行動はかなり正しい。そし
て二人は俺と一心同体みたいなもんだから俺はもう謝らない。

「ま、大暴れするわけじゃないから別にいいけど」

「彼氏も作らず一人でだらだらするだけだしな」

「甥だろうとなんだろうと普通に殴るよ」

「おいおい（笑）」

何が起きたかわからないが、痛いことだけはわかる。明らかに俺が悪かつたのに、里
沙が「大丈夫……？」って心配してくれるくらい今の俺の状態はひどいらしい。

「ごめんなさい葵さん。いつも迷惑ばかりかけて」

「いーよ霞。なんだかんだわきまえてくれてるから」

「そうですわ！ 葵様にブールへ連れて行つてもらいましょう！」

「わきまえてへん人おるけど」

「ん？ そんくらい別にいいよ。どうせやることないし、それなら暇な時間をかわいい

あんたらのために使つた方が有意義でしょ」

「え、いいよ葵さん！ 流石にそれは悪いし」

「子どものうちに与えてくれるもんは受け取つときな」

遠慮した里沙と、「ありがとうございますわ!!」と目をキラキラさせている麒麟寺さんをぽんぽんと撫でて姉ちゃんが微笑んだ。なんだこの人。ほんとに俺と同じ血流れるのか？ 俺が同じこと言つたら「もつともらしいこと言つて、何企んでるの？」って言われるぞ俺。明確なことはわからないけど、姉ちゃんにいい血が流れていて俺に悪い血が流れていることだけはわかる。

俺に母さんの血が濃く流れたらな……。母さんから「お父さんにすぐ似てる！」ってよく言われるし、その度「おい、息子に対して嫉妬させるなよ」「ふふ。そういう意味で好きなのは、恭弥だけだよ」「日葵……」ってクソみたいな展開が生まれるから、父さんに似てるって言われるのがトラウマにもなつてるし。

「でもいいのかよ姉ちゃん。五人分つて結構かかるだろ?」

「甘えんの本当に上手だね夕弥。朱音ちゃんと里沙と霞の分は出すけど、全員分払うとは言つてないよ」

「なんで俺ら選考漏れしたん?」

「まあ、俺たちが大人だからだろうな」

「そんなので恥ずかしくないの?」

「里沙。心にくる言い方はやめろ」

『そんなの』はあんまりだろ。それに俺が言つたことは間違いやない。俺は光莉さんに大人な恋をしてるし、春斗はなんかよく笑つてるから大人だろ。春斗が大人である理由が薄いような気もするけどそれも気のせいだ。それを気にするやつが子どもつてことだな。

「ついでに水着も買つたげよつか」

「それは恥を体現したようなわたくしでも流石に遠慮いたしますわ」

「朱音ちゃん可愛いんだから、恥なんて言つたらバチ当たるよ。それに遠慮もしなくていい。可愛い子の水着買えるなんて、立派な社会貢献でしょ」

「え、あ……その……ありがとうございます」

「元々やさぐれててお嬢様を目指すようになつて、素はしおらしくてすごい女の子して

「めちゃくちゃ可愛いって、連れて帰るなって言う方が嘘だよね
「連れて帰つていいかどうかは流石に霞に聞かないとなあ
「まだ僕に聞くのかよ……」
ノリつてやつだろ。